

ギャルと生徒会長二人まとめて催眠ペットに！！

ごしゅじんさま、あたし(私)達の身も心も操ってください！

脚本（小説版・音声版）

秋乃みのり

サークル

性癖おしまい部

四ノ宮 アスカ 役 いぬです

三澤 シオリ 役 あやち

『ギャルと生徒会長二人まとめて催眠ペットに！！
ごしゅじんさま、あたし(私)達の身も心も操ってください！』

序章 催眠アプリとの出会い

- 一、 生意気ギャルのアスカに催眠導入♪
- 二、 【一日目】ラブホで処女喪失&催眠ペット化♪
- 三、 【二日目】生意気ギャルアスカの催眠エロペット宣言！
書き下ろし幕間 アスカ編
- 四、 生徒会長シオリに催眠導入♪性欲処理は生徒会のおしごと♪
- 五、 【一日目】生徒会室で処女喪失&エロハメ録り♪
- 六、 【二日目】生徒会長シオリの催眠エロペット宣言！
書き下ろし幕間 シオリ編
- 七、 放課後は乳首オナニーでイキまくり♪ 淫乱生徒会長爆誕！
- 八、 二人を連れ込んでエロ奉仕命令！完堕ち催眠ペットとどすけべセックス
書き下ろしミニエピソード ふたりの催眠ペット
- 九、 催眠エロペットのふたりといちゃらぶえっち

終章 その後の日常

序章 催眠アプリとの出会い

「クソ……っ」

世界ってのは、まったく不平等だ。家柄、遺伝、地域性、両親の資産、生まれた時代に周囲の人間……自分じゃどうしようもない『レール』が人生にはあらかじめ敷かれていて、そこから如何に外れないかに、人生の成否がかかっている。

出る杭は打たれる、という言葉があるように、目立てばたちまち爪弾きに遭う。ひとたび『変わり者』の烙印を押されてしまえば、社会秩序の最底辺に投げ込まれてしまう。社会全体がそうなのだから、その縮図である学校も然りだ。

「くそっ……!!」

退屈な授業を終え、ようやく迎えた放課後——道端に転がる空き缶を蹴飛ばしながら、俺は悪態をついた。『陰キャ』『根暗』『何考えてるかわからない』……

クラスメートの女はこれ見よがしに陰口を放つ。どれも俺のことだ。目立てば嫌われる。だからこそ目立たないようにしているのに、それでも言いたい放題だ。

「黙ってたらいいい気になりやがって……！」

群れて、口さがなく囁る女ども。そんな女にモテようと迎合する男ども。ああ、不愉快だ。

(長い物に巻かれるしかないクソどもめ……！)

世界はクソだ。持って生まれた環境^{かんげい}ですべてが決まってしまうのだから。

俺には目立った特技もなく、人に好かれるだけの顔もない。腕っぷしもからきしだ。せいぜい出来ることと言えば、いつも通り家に帰って、不埒な妄想に浸るしかない。

クラスの女を襲って、男は従えて。喧嘩に勝つ妄想、セックスの妄想——こっそり万能感に浸れる虚しい自家発電しか、やれることはないのだ。

これが俺の人生だ。俺のレールだ。既にゴミみたいな人生だが、『脱線』すれば、更に目も当てられないことになる。負け組で居るしかない。それが、俺の人生なのだから。

「あのくすいません。ちよつといいですかあ？」

——力の限り空き缶を蹴飛ばした、その時だった。

どこか人を食ったような、甘ったるい女の音色。俺に話しかけるヤツが居る訳がないのに。

（一体誰だ？目的は何だ？）

慎重に動かした首が、機械仕掛けロボットよりもぎこちなく背後へと向く。

不審者、キヤッチ、それとも宗教の勧誘か？あるいは悪徳業者の押し売りもあり得る。いずれにしてもロクなものじゃない。断り文句を考えながら振り向く俺の前に

は、一人の女が立っていた。

「あっはあ♡ やっぱりイイ♡ ですねえ、その死んだ魚みたいな顔♡ それに、人を全然信じず、見下してる目・つ・き♡ 人生楽しくなあって顔に書いてますよお？♡」

パーカーのフードを目深に被った姿。夕陽の逆光と相俟って顔は完全に隠されている。その正体も目的もわからないが、明らかなのは、俺よりは小柄で、どうやら俺とそう変わらない年齢であろう声ということくらいだった。

カコン、カコンと分厚い靴底が音を立て、女が眼前に躍り出る。互いの吐息が感じる距離に滑り込んだ女は、そのまま俺にもたれかかった。

ミルクチョコレートか、バナラクツキーを思わせる匂いが、女の身体から立ち上っている。

鼻につく濃厚な気配の中で、パーカーの下のグラマラスな感触が主張する。童貞には刺激的すぎるその「柔らかさ」に、下腹部が熱を持つ。

「ちょ、っ」

「ふんふん♪ おにいさんってば、随分タメこんじゃってるねえ。ちゃんとオナニー毎日してる？ 妄想の割には随分ガマンしてるんじゃない？ 年頃のオトコノコなんだから、一日十回は余裕でしょ♡ いやあ、調査通りの逸材で嬉しくなるねえ」

「……っ」

「ちよつとビビリすぎだつて。にやははっ、ウチはおにいさんのことを気に入ってるのだよ。昨日は七回もお部屋でシコシコしたんでしょ？ エツロくい女の子が出てくるゲームで、夜遅くまでぴゅっぴゅしてたんだよねえ？」

——ああ、こいつはやばい。近づいてきた時点で怪しむべきだった。俺みたいなモブに話しかけるだけでも十分おかしい。そのうえ、話す内容は痴女のそれだ。

(こいつ、正気じゃない……！)

近付いてナイフで一刺し——「学生、通り魔に刺され死亡」なんて結末が頭に過ぎる。

「離れ……っ」

「にやはは、抵抗しないでよお♡ イイこと教えてあげるから、スマホ出して？大丈夫だよ。絶対に、絶対に悪いようにはしないから♡」

「うるさいっ」

重心を逸らしつつ、しなだれかかる身体を突き飛ばすように後ずさる。フラフラと蜃気楼のようによろめく女は、五歩ほど後退してからニヤリと嗤った。

「……へえ。最新機種じゃん。うん、これなら大丈夫だよ。まあ、それもちゃんと調査済みだけど♡」

「なっ」

女の掲げた右手に、見覚えのあるスマホが握られていた。気配も感触もまるでない、鮮やかなスリの手口に理解が瞬時遅れる。

「いつのまに……っ」

「どれどれ。暗証番号は……うーわ。今どき四桁のPINなんてマ？ ダメだよお、そんなのウチにかかればすぐに解除されちゃうんだから。まあ、おにいさんのコト

なら全部知ってるんだケドね。……うん、ハイ。これでDL完了♡」

「何して……」

「ん？何って？おにいさんが思う『クソみたいな人生』を劇的に変えられる【可能性】を、今、ココに入れてるの。どう使うかはおにいさん次第。ウチは【与える】だけだからねえ。……ほら、投げるからちゃんと受け取りなよ」

女が振りかぶり、その手に握る物体を夕暮れの空に放り投げる。放物線を描くソレを、我に返った俺の両手が辛うじて受け止めた。

「使い方はそのアプリを見ればわかる。誰に使ってもいいケド、せつかくなんだ。君が『キライ』で『ダイスキ』な、クラスメートの女の子に使えばいいんじゃない？ 居るんでしょお？ 見た目だけは好みの、妄想で毎日犯してる女の子が♡」
「な、何を……」

バレている。俺の行動のすべて、家の中での一挙手一投足のすべてが筒抜けになっている。

「寂しくない？家でおちんちん一人でシコシコしてるだけなんて♡おにいさんが家でしてるえっちなゲームみたいなコト、したくないの？ふふふ……じゃあね、おにいさん♡」

「お、お前は一体っ」

フードの下で、女の顔が醜悪に歪む。まるで、口裂け女のように、釣り上がった歪な笑みだった。

「……いったい、何なんだよ……」

スマホに残る見慣れないアイコンが、この出来事が夢ではないと告げている。奇妙で奇怪な色合いをした『ソレ』が何かをただすべく、顎を突き上げるように正面を睨みつける。そこに居たはずの影は、形も気配も残さずに消えていた。

——それが、俺と『催眠アプリ』との出会いだった。

一、生意気ギャルのアスカに催眠導入♪

結論から言えば、アプリは本物だった。実家の両親・姉と妹に催眠をかけたのが先週のことだ。

傲慢な姉を俺専属のメイドに、勝気な妹を俺が好きでたまらない女に変え、両親はそれを不思議にも思わない。俺の顔を見るだけで顔を顰めていた姉妹は、我先と一緒に風呂に入りたがり、共に寝たがった。あれほど『家に戻ってくるな』と喚んでいた二人がウソのようだ。両親は仲良くなった息子達を喜び、穏やかに笑う。俺が晩御飯中に立ち歩き、姉に抱き着こうが、妹の胸を揉もうが、まるで気にしていない。理屈はよくわからないが、アプリの作用は間違はなく、本物だ。

はたして、あの女は一体誰だったのか。正体は未だにわからない。気にはなるが、情報収集のアテもない。

「……帰るか」

……例えアプリが本物でも、普段のルーティンはそう変わらない。いや、
変えるべきではない。不思議な力を手にして直ぐに目立つのは、バカのやること
だ。手当たり次第にアプリを使えば、思わぬ落とし穴に嵌まる。人目につかず、ひ
っそりと、素早く。小賢しくてもいい、バレなければいい。

座席の間をくぐり抜けて、影を縫うように廊下の床を踏む。放課後の校舎に明る
い声が響いたのはその時だった。

「しおりん、かーえろ♡ もう今日は生徒会ないんっしょ？この前できたスイーツカ
フェ、一緒に食べに行こうぜい？♪」

隣のクラスに駆け込む一人の影。太陽のように煌びやかな金髪と、小洒落たアク
セサリーに身を包む女。

教師達の注意をもともせず、圧倒的センスと明る^い性格で誰からも『許されて
しまう』女。男はこぞって付き纏い、あわよくば彼女にしたいと騒ぎ立てる……
いけすかない女だ。

（俺は知ってるぞ。お前が陰では俺みたいな奴を嫌ってることを——！）

はたしてその女——『四ノ宮アスカ』が、華麗なスライディングとともに一人の肩を掴んだ。ふわりと髪が跳ね、派手なアクセサリーがしゃらりと揺れる。話しかけられた相手もまた、四ノ宮の来訪を予期していたらしい。苦笑しつつも、手を振って迎え入れていた。

「アスカ……買い食いは駄目だと先生も仰ってただろう。私は生徒会……」
「んもー固いってえ。いーじゃん別にそんなくらい」

三澤シオリ……四ノ宮とは対照的に、楚々とした佇まいが特徴の女。
本人の立候補、先輩からの指名、全校生徒からの推薦……つまりは、圧倒的な支持で『生徒会長』の座に就いた女。

凜とした口調とボーイッシュな顔立ちの下に、申し分ない女の身体がひつついている。四ノ宮アスカが爆乳なら、三澤シオリも十分に巨乳といえる。二人とも学年きつてのプロポーションだけあって、そこはまるで花が咲いたような空気が漂う。

「じゃあさ、今回はあたしが特別に奢ったげるから来てよ。せっかくの映える苺のタワーパフェ、一人じゃ寂しいじゃん、ねーえー」

「寂しいとかそういう問題ではなく、私は生徒の風紀を守る立場なんだ……私がそういうことを大っぴらにしたら、みんなに示しがつかないだろう？」

食い下がる四ノ宮をあしらう三澤生徒会長の構図は、もはやこの学園の名物になっている。

「そんなのパフェひとつで変わんないってえ。華の女学生なんだよー？楽しまないとソンじゃん。ほらほら、早く行こ♪ あたし、今日はしおりんをデートに誘うって決めてたんだからさー」

帰宅準備を終えた生徒会長に、ふと俺も我に返る。悠長に盗み聞きをしている場合じゃない。なぜならば――、

「もう……わかった。アスカに付き合うよ。それじゃあ……きゃあっ!？」

――そう。この好機を逃す手はない。

開け放たれた扉を潜り抜ける生徒会長に、わざと身体を『当てに行く』。教室と廊下間の、出会い頭の衝突。普段の学生生活でもままあるアクシデントだ。

四ノ宮に気を取られて前方確認が疎かになった会長が、目論見通りにバランスを崩す。弾き飛ばされるように尻餅をつく会長が、やや苦しげにうめいた。

「う……っ」

「ちょ、ちょつとしおりんだいじょうぶ!?」

どさり。鈍い音に、四ノ宮の目が大きく見開かれる。突如起きたアクシデントに駆け寄り、会長を抱え——すかさず、般若の形相で俺を睨み上げた。

「……あんだ、何ぼさつとしてんだよ。女の子突き飛ばすとか、サイテー。まじありえないんだけど」

「……そっちが余所見してぶつかってきたんだろ」

嘘ではない。余所見をしていたのは会長で、俺は『偶然』通りかかっただけだ。

俺にも非はあるが、俄然不用意に飛び出した側が悪い。俺は心配されこそすれ、誹

りを受ける謂れはない。

・ ・ ・ —— 尤も、そんな正論は何の役にも立たないのだが。番犬よろしく進み出た女は、怒りの炎が見えるほどの勢いで詰め寄ってきた。

「はあ？そっちが余所見してた？何それ、言いがかり過ぎてウケる。どこに目えついでんだって話。ってゆーかお前、誰？その制服着てるってことは、ウチの生徒だよね。名前言えよ」

「……クラスメイトだから知ってるだろ？」

そう。生徒会長はともかく、四ノ宮とは毎日同じ教室で授業を受けている。二期も半ばに差し掛かった今、『知らない』方がありえない。陽キャラ特有のこの傲慢さが、俺は酷く気に入らない。

ぶつけた正論を、しかし四ノ宮は鼻で笑う。おおかた猿かキモオタに話している程度にしか思っていないのだろう。相手を圧倒的な格下と見做していなければ、そんな言葉が出てくるはずがない。

「はあ？あたしのクラスメイト？ぜんぜん知らないんだけど。はあ、もうサイアク

……せっかくしおりんと今からデートしようって話してたのに……。あ、そうだしおりん立てる？こいつにヘンな所触られてない？」

「あ、ああ。私は大丈夫だ。……こほん。私こそ、ぼうつとしていて済まなかった。君もケガはしてないだろうか？」

すくと立ち上がり、スカートについた埃を手早く払う。まったくこれだから出来た人間は違う。被害に遭っても俺を慮る生徒会長を見て、ぎゃあぎゃああと騒ぐ隣の女も見習ってくればありがたいのだが。

「ちょ、ちよつと。こいつなんかの心配しなくていいって！悪いのはこいつじゃん！目つき悪いし、なんかジロジロ見てきてキモいし！」

「そう言うことは言うものじゃないよ。幸い、君も怪我してないようだし、ここはお互い様ということにしてはくれないだろうか」

その言葉と共に、会長がこつそりと左右に目配せをする。見れば、騒ぎを聞きつけた生徒の人ばかりが出来始めていた。これ以上長居をすれば、誰かが教師に通報するだろう。そうなれば間違いなく俺は槍玉に挙げられ、一気に悪者に仕立て上げ

られてしまう。『スクールカースト』とはそういうもので、生徒一個人でひっくり返せるものでもない。嫌悪感をあらわにする友人を宥める会長も、あまり目立ちたくはないのだろう。黙って頷く俺に、会長が安堵のため息を漏らした。

「……そうか、ありがとう。感謝するよ。では、また明日学校で」

「はあ……しおりんはほんと優しいねえ。あんた、しおりんに感謝しなよ。さっきのがもしあたしだったら、あんたのこと、ボコボコにしてたから」

……本当に一言も二言も多い女だな。そもそもお前は関係ないだろう。

「こら、アスカ。もうやめないか。美味しいパフェを奢ってくれるんだろう。案内よろしく頼むよ」

「う……しおりん、ちゃっかり奢りの所は覚えてるじゃん。はあ……うん、じゃあ行こ！しおりん♡はー♡しおりんとのデートだあ♪」

けろりと切り替え、二人の女は歩き出す。自作自演とはいえ、あまりの物言いに暗い怒りが湧いてくる。

(決めた。まずはお前からだ)

さっきの悪態を後悔させてやるとしよう。ポケットの中に眠るスマホを取り出し、俺は二人の後を追った。

女の趣味はまるでわからない。合理や効率という考え方概念が欠落していると思えない。

カフェに洒落込む二人を見下ろせるベンチに位置取り、監視すること一時間半。いい加減、足が痺れてくる頃合いだ。悪鬼の表情はどこへやら、満面の笑みでパフェを完食した四ノ宮が、対面に座る生徒会長に何やら話しかけている。

「……女三人で姦しいは嘘だな。二人で十分だ」

どうやら本当にただ駄弁るだけの集まりだったらしい。取り留めもない話に花を咲かせた二人が清算を終え、別々の帰路へ着く。

「さ、て、とー。しおりんにはああ言ったけど、家に帰ってもヒマなんだよねー。マジやることないし。どこかヒトカラでも……っ!？」

まったく不用心極まりない。時刻は夕方。陽の沈みも早くなるこの季節、薄暗がりの中距離尾行を詰めるのはたやすかった。

「……おい、フラフラするなよ。お前もぶつかるともりか？」

我ながら、当たり屋まがいの所業だ。ぼんやりと歩いていた四ノ宮の眼前に飛び出し、胸を突き出しながら行く手を阻む。甘いスイーツに上機嫌だった女は珍客施の登場に驚き———またしてもその瞳に怒りを灯す。目は釣り上がり、猛禽類のようだ。どうやら俺がさっきの言い争喧嘩った相手だと気付いたらしい。

「あんた、さっきの……!! ……何しに来たの？」

まったく、だからギャルは嫌いだ。気が短く、態度は大きい。だが、気圧される必要も理由も何もない。三澤と別れたいま、こいつを助けてくれる奴は誰もいないんだから。

「さっきのことが許せなくてな。謝るならチャンスをくれてやる」

努めて偉そうに、用意していたセリフを放つ。

幸い人通りはなく、俺達を不審がる奴もいない。運は俺に向いている。

「はあ？いやだからさ。それはあんたがぶつかってきたんじゃない。逆恨みとかマジできもいんだけど。自分のこと棚に上げて女子に恨み言とかダサすぎ」

「……反省する気がないのか？」

「はーあ。あんたってさ。いかにもモテませんって顔だよねー。みみっちいし、しつこいし、ないわー」

「お前……っ」

……想定内の反応だが、やっぱり腹は立つものだ。呆れた表情を浮かべる四ノ宮

に、俺はポケットに入れていた物を取り出した。

「ってゆーか、そっちこそ不用心なんじゃない。あんたみたいなオタクくん、あたしがちよっと大声出せば一瞬で『終わり』なんだよ。あんまり調子に乗ってると……」

そろそろ黙れ。ビツチめ。

催眠アプリ——数週間前、怪しい女によって強制的にダウンロードさせられたそれは、ジョークグッズの類ではなかった。特定の音波と画面のサイクルを繰り返して、相手を強制的な被暗示状態へと落とす——禁断の「魔法」だ。

四ノ宮の瞳が、突き出されたスマホの画面に釘付けになる。サイケデリックな画面の点滅と、耳の奥を貫く不快な高周波の音が、その憎らしい美貌に叩きつけられる。

変化は、劇的だった。

「：警察……に……」

怒りに燃える眉が平坦に下がり、瞳から光が消えていく。思考力が急激に吸いとられ、言葉はぷつりと途絶えてしまう。十秒前後の音と光の照射のあと、そこにはぼんやりと立ち尽くす一人の女がいた。

念の為、手をひらひらと目の前で動かし、その唇に指で触れる。みずみずしさと肉厚な弾力は、男のそれでは有り得ない。あまりの良さに思わずべたべたと触り、はつとする。意識があれば確実に拒まれ、あるいは大声を上げられるセクハラにも、四ノ宮はまるで反応しない。

（完璧だ。四ノ宮は催眠状態に入った——……！）

確信とともに、心臓が強く脈打つ。これから起きる展開に心が湧き立つ。

「……名前を言え。フルネームでだ」

「はい……あたしは 四ノ宮 アスカ です……」

「……よし。大きな声は出すな。お前の心は空っぽ。何も疑問に思うな。そのまま俺の言葉に従え」

「はい……大きな声は だしません…… あたしの心は からっぽ …… …… なんて言うこと 聞く……」

ひとたび催眠状態に入れば、よほどの強烈な刺激がない限り、かなりの長時間この状態が続くことを、先に試した家族で確認している。もう、四ノ宮アスカは手の中だ。

「……いいだろう。そのまま、少し距離を空けて俺についてこい。場所は着けばわかる」

「はい……どこでも……ついて………いきます……」

さあ、楽しもうじゃないか。なあ、四ノ宮？

二、【一日目】ラブホで処女喪失&催眠ペット化♪

生まれて初めて入ったラブホテルに、跳ね上がる心臓を手で押さえつける。光るパネルも、無人の受付もまるで経験がない。無論、誰かに見つければ一卷の終わりだ。クラスメート、教師、親あるいは顔見知り……こんな所に女を連れ込んでいるなど、万が一にも見られてはいけない。

(とりあえず……ここにするか)

深く考えず、目の高さにあったパネルを押す。誰にも見られていないと自分に言い聞かせ、吐き出された磁気処理紙を握り締める。何度も唾を飲み込む俺の後ろには、うつろに目線を彷徨わせたままの四ノ宮がついてきていた。

「……………ん……………」

「ほら、早く入れ」

ムーティなダウンライト、空調の音だけが静かに響く部屋。ラブホテルは俺が想像していた以上に清潔な空間らしい。

(四ノ宮は……よし、しっかり催眠状態にかかったままだ)

しどけなく着崩した制服と、スカートの下から覗く太ももが眩しい。制服を押し上げるほどの巨乳に、シミも肌荒れもまるでない卵肌。今からコレを好きに出来ると思えば、興奮を抑えろと言う方が無理な話だ。扉の施錠をもう一度確認し、俺は獲物に対して呼びかけた。

「よし……よく聞け。今から俺が指を鳴らすと、お前は催眠状態から覚めて、元の自分に戻る。だが、身体を動かすことはできない。お前の身体は俺の言うとおりにしか動かせない。いいな？」

「はい……。あたしは……次に目を覚ますと……元の自分に戻ります……だけど……身体はあなたの言う通りにしか動きません……」

オウム返しに四ノ宮が繰り返す。催眠術の原理は俺にもよくわからない。暗示でどこまでのことが出来るのか、ネットで齧った程度の知識しかない。

「それと、決して逃げようとは思わないよ。お前は俺を怖がることも嫌うことも出来るが、逃げようとは思わない。俺がアプリを見せれば、お前はまたすぐに今の状態になる。いいな？」

「はい……逃げようとは思いません……あたしは……あなたの暗示でいつでも催眠状態になります……」

「よし。今言ったことを全部理解したら、お前は目を覚ます……」

うわごとを呟く四ノ宮が、やがて反応を示さなくなる。たつぷりと暗示が浸透したことを確認し、耳元に指を近づけて弾く。ぽちんという軽快な音のあとに、目の前の女の瞳に意思の光が戻ってきた。

「……んっ!!? え……っ?」

——これは、既に催眠をかけた俺の姉妹から聞き取った話だが。催眠にかかっている間の出来事は、『夢を見ていた』ように感じるのだという。言われなければすっかりとは思いつけない……そんな『夢見心地』を彷徨っているのだと。

「は？なに？え？どこココ……？」

——で、あるからに。四ノ宮の考えは手に取るようにわかる。ホテルに来た意味も、理由も、経緯もわからない。夢うつつの催眠状態から目を覚ましてみれば、まるで見覚えのない場所にいる。平常心でいられる筈がない。

「……ひっ!？」

次に恐怖する。不気味に静まり返った部屋の中、四ノ宮が『俺』を認識する。見知らぬ場所で、見知らぬ部屋で、嫌悪している男と二人きり……いよいよこれは恐ろしい。みるみる顔を引き攣らせた四ノ宮が、俺の姿に警戒しボルテージをあげた。

「なんであんたが……ちよっ、何……近付いてくんない！」

悠然と近づく男に気圧され、露骨に顔を顰める。互いの鼻頭がくつつくほどの距離に迫られ、目の前の美女はいよいよ怒りを爆発させた。

「ちよっ、キモい……！息、掛けないで……あたしに触んな……！」

「なんだ、騒ぐなよ。お前がふらふらついてきたんだろう」

「あたしに一体……何したの……！」

『理解』は、人間が欲する本能的で根源的な欲求だ。理解できないことほど怖いものはない。「未知」には対処できない。それは底のない「恐怖」に等しい。

「何と言われてもな……まあ、催眠というやつだ。お前は今、俺の催眠にかかっているんだよ」

——俺自身、『見知らぬ女に催眠アプリを渡された』だけだとは言わないでおく。例の女の正体や経緯はこの際どうでもいい。「勝ち気な女が恐怖する姿を見るのが楽しい」……それで十分だ。

「……はあ？催眠？アタマだいじょうぶ？さすがキモオタは意味わか……んな……つてか、えっ！？身体っ動かないっ……！？」

「おいおい、ほんとにわからない奴だな。お前みたいな強気なギャルを自由にさせたら何をされるかわからん。間違っても俺を殴ろうとするなよ」

こと、ここに来てようやく、四ノ宮が自身の異変に気付く。首はおろか、全身、鉛のように動かさないことに。

「逃げる」という発想を暗示で封じた以上、おそらくは俺に危害を加えようとしたのだらう。軟禁、セクハラ……これだけで十分、俺を吊し上げる理由になる。

「ちょ、ちよつと！ホント何したのか言えよ！……う……っ、ヤダホントに動かないんだけど……！」

再度狼狽し、焦りを見せる金髪の美女に、俺は勝ち誇ってその身体を凝視する。暴力的な胸の膨らみ、怒りで上気した頬と汗で透けたブラウス。逃げることはできず、抵抗もできない。胸を触られても対処のしようがない。やれることと言えば、精一杯の虚勢を張ることだけだ。

「じろじろ見るなキモい！ まじでキモい！ つつか何？ ここラブホっしょ？ 訳わかんないこと言っつて、こんな所に連れ込むとか犯罪なんですけど。お前みたいな奴とこんな所来たの誰かに見られてたらマジで人生終わるんだけど、どうしてくれるわけ？」

ぴいぴいと口うるさい女め。次から次へとよくも口が回るものだ。意識を戻してやったことに感謝するでもなく、罵るとは、自分の置かれた立場をまるで理解していない。だが、どれだけ騒ごうとも、この場を支配しているのは、俺だ。

「ちょっと聞いてんの！？もうサイ……」

「五月蠅い女だ。コレを見て、催眠状態になれ」

「……アク……」

再び、アプリの画面を顔に押し付ける。不快な音と光の明滅が、瞬く間に四ノ宮の意識を奪う。便利な道具だ。どれだけ興奮していても、信用されていなくても催眠誘導ができてしまう。四ノ宮の顔から怒りが消え、どろんとした無表情に変わる。身体も、意識も思いのままだ。

「……はい……私は 催眠状態 になりました……」

「まずは……そうだな、俺にキスしろ。エロいキスだ」

「はい……キス………します」

言われるがまま、顔色も変えず、ゆらゆらと四ノ宮が近づいて来る。つやめく髪の毛から果実の芳りをまとわせ、圧巻の美貌が視界いっぱい広がる。

先程まで俺に毒付いていた口は、僅かにその形を尖らせると、俺の口へと押し付けられた。

「ん……ちゅぷ……う、ぴちゃ……♡は、ん……♡ん、ちゅる……ちゅぷ♡」

——脳みそがとろける、とはこの感覚のことを言うのだろうか。

唇を割って入ってきた舌に、口内を蹂躪される。舌先、上顎、歯茎、頬……見た目は最高の女が全力でディープキスしている事実がたまらない。負けじと俺も舌を伸ばし、濡れた口の中をまさぐる。

「は……ん……♡ちゅぷぶぶっ、んんう……!ん……は………♡」

鼻から抜ける四ノ宮の声は、想像していた以上にいやらしい。「エロいキス」という指示が効いているのだろうか。これだけのことをしてなお催眠状態から目覚めない姿に、歪な征服欲はいや満たされていく。

「……よし。それじゃあ次は服を脱げ。ブラもショーツも全部脱ぐんだ」

「ふぁい……あたしは……服を脱ぎます……」

さあ、いよいよだ。クラススの男どもが毎晩オナネタにする女のストリップ。クラス一の巨乳——カーストの上位に君臨する女が、俺の命令に従い、目の前で服を脱ぎ捨てるショーの開幕だ。

窮屈に胸を締め付けるボタンを外し、その内側にある肌があらわになっていく。ライトブルーのブラジャーが、重たげな巨乳を肩で吊り下げて揺れる。

やはりというか、驚異のバストサイズだ。学生らしからぬ巨大な胸を、黒い刺繍が施された下着が支えている。四ノ宮はそれすら平然と脱ぎ去ると、流れる手つきでショーツも脱ぎ下ろした。

「脱ぎました……」

圧巻だ。女風呂を覗きでもしない限り、絶対に見ることの出来ない裸が目の前にある。それも、相手は同級生ときた。

なだらかな肩、溶けたミルクチョコの肌質。なによりも、服の下に押し込まれていた凶悪な美乳。腰はクレバスよろしくくびれ、骨盤から尻にかけての丸いラインが悩ましい。

（本当に、身体はいい女だな）

自意識すらままならないまま、嫌いな男に素肌をさらす女にほくそ笑む。邪よこしまな煩惱が下半身に血を送り込みはじめていた。

「よし。じゃあ足を肩幅まで開いてオナニーしてみろ。自分がいつもやってるみたいに触れ」

「はい…足を肩幅まで開いて…自分で…触ります…」

肩幅まで開かれた股座の中心で、縦に割れたスジがぱくりと口を開く。鼠蹊部に浮かぶV字のラインをなぞり、細い指がするすると降りていく。反対側の手が乳首

の周りをうろつき、四ノ宮が悩ましげにもだえた。

「ん…っ♡は…っ♡んん…っ♡」

とん、とん。つん、つん。細い指先による乳首への愛撫。小さな突起の上で指がタップダンスを踊る。普段の態度が嘘に思えるほど丁寧で繊細な指遣いだ。

「ん、ん…っ♡だめ…っ♡ん…んん……あん……♡」

「っ」

強気なギャルの、弱々しく儂い声。だが、これがこいつの普段のオナニーだと思えば、こみ上げてくるものがある。小さな豆粒サイズの乳首は、何度も撫でるうちに大きくなり、固く主張を始めた。

「あっん、ん…っ♡」

「どうした、まんこの方は触らないのか？さっきから手が止まってるぞ」

「ん、あ…っ♡」

俺の横槍にも言い返さず、四ノ宮の左手が動き出す。完全に、オナニーに夢中になっっている。割れ目と陰毛を隠す指先が、つぶりと中へと沈んでいった。

「ん。そこ……っ、いい……♡ あ、んんッ……♡」

ねばついた水音が響く。淫肉を刺激する指の勢いと本数が増えていき、絶頂へ向けて加速する。前屈のまま内股気味に悶えるのは、どうやら『寸止め』をしているつもりらしい。

（なんだ、随分とむつつりじゃないか。ええ、四ノ宮？）

「あ：♡ クリ、だめ……♡ んっ♡ もっと、ゆっくり……♡」

右手が乳首を摘み、ぎゅうと強めにねじる。引っ張られて形を変える爆乳は釣鐘状に伸び、やたらと重たげだ。陰唇を撫で回す左手には愛液が滲んで、糸を引いていた。

「ん……そう、そこ……っ♡んっ♡あ、いい……う……ん♡」

エロい。俺の想像を遥かに超えてエロい。

愛らしい喘ぎ声と、誰もが認める美巨乳の美女。ギャルメイクと華美なアクセサリーも、こいつがすれば似合ってしまうのだから、素材様様といったところか。

『この女をモノにしたい』『俺だけのペットへと変えてしまいたい』……そんな薄汚れた欲望がますます肥大してしまう。

「ん……っ♡あ、い、く……いきそ……っ♡ん、あっ♡」

ピンク色の乳首の上で指がスタツカートを刻み、声にも余裕がなくなってきた。そろそろ絶頂が近いらしい。

「いっ♡く、いく……いっちゃんそ……っ♡あ……っ♡イク、イク……っ♡クリ、きもちい……っ♡いく、イ……っ♡っ♡っ♡」

ぴん、と反った背筋に吊られ、揺れる二つの膨らみが重力に従って円を描く。悶絶、興奮、断続的な絶頂——四ノ宮は今、俺の目の前でイッた。肌は汗ばみ、薄桃色に染まった頬に小さな涙の雫が落ちてくる。

(ふふ、最高じゃないか……)

見ているだけで満足しそうな光景だが、本番はこれからだ。はち切れんばかりにズボンを押し上げるモノが悲鳴を上げている。四ノ宮の股間と、そこから垂れた愛液が下着の中の一物を刺激する。

「よし……じゃあオナニーをやめろ」

「はい……オナニーをやめます……」

「四ノ宮。次にお前が目を覚ましたあと、お前は目の前にいる男とセックスする。

疑問は持たずにな。それと、男の命令には喜んで従うんだ」

「はい……次に目が覚めたら……あたしは……目の前の男性と、セックスします……」

疑問は持ちません……よろこんで……命令に従います……」

「なぜなら、目の前の男がお前のご主人様だからだ。お前は、ご主人様の催眠にかかった、催眠ペットになるんだ。いいな」

「はい……目の前の男性が あたしのご主人様です……あたしは……ご主人さま、の……催眠、ペットになります……」

さあ、四ノ宮。見せてみる。お前が俺に一度も見せたことのない顔を。倫理観も常識も歪まされて、みずから喜んで身体を捧げる姿を。

催眠を解除すると同時、またもや四ノ宮の瞳に光が戻ってくる。だが今度は——俺の姿を認めても一切逃げようとはせず、まして自身が裸であることにも動じない。ただ、きよろきよろと辺りを見渡すだけだった。

「あ……っ。あれ……あたし、何してたんだっけ？」

(……まじか……)

その、あまりの変貌ぶりに内心で驚愕せざるを得ない。先程まで「見るな」「近づくな」と騒ぎ立てていた女が、親しい同性の友人と脱衣場にいる時のごとく、裸

でいることを気にしていない。催眠のあまりの強力さには、いつそ恐怖さえ覚えてしまう。

「おいおい。忘れるなよ……お前は——」

俺は口の端が歪に持ち上がっていくのを自覚しながら、ベッドに腰掛け四ノ宮に話しかけた。

「え。…『俺をホテルに連れ込んで、セックスするところだった』…？ あ、そうそう…！お、覚えてるに決まってるじゃん！ はいはい、セックスでしょー」

俺の言葉を復唱し、得心いったと大きく頷く。それから、取り繕うようににじり寄ると、四ノ宮はにかつと笑った。

「で、どうするー？ なんかもう濡れてるし、さっそく挿れちゃう？」

「おいおい、生でやるつもりか。避妊具をつけるから待ってる」

流石にこの年で同じ年を妊娠させる気はない。言いながらベッドサイドに置いてあるコンドームをつけようとする俺を、四ノ宮が静止する。

「避妊具…？ あー、いらぬいらぬ」

「は？」

「だって要らないっしょー。あたしはご主人様の催眠ペットで、ご主人様はあたしのご主人様なんだし」

ギャル特有の邪気のなさで四ノ宮が笑い飛ばす。本心からそう思っていることが明らかかな、あっけらかんとした口ぶりだった。

「あたしが妊娠したらあたしが困るだけだし、ご主人様は関係ないじゃん。細かいことに気にしないでいいから」

「いや、だがな」

「ほら。もうそのままちんぽ出して、好きに生でハメていいよー。バックがいい？ それとも、お気に入りの体位があるなら、それでもいいけど」

—— 『疑問は持たず、目の前の男とセックスする。男の命令には喜んで従う』。たったそれだけの暗示でこれほどまで人間の思考を歪めてしまえるとは。どれほど俺を嫌っていても、暗示に囚われてしまえば、ただの都合のいい催眠ペットだ。

「よ、よし……じゃあ、俺の方を向いて、セックスしてほしいってねだってみろ。足は開いて、まんこがよく見えるように、だ」

「ん、正面向いて、足を開いておねだりすればいいの？ はいはい、ちょっと待ってねー」

明け透けで下劣な暗示にも、四ノ宮は動じない。自らベッドの真ん中へと移動し、体育座りの姿勢からぱっくりと足を両側に開く。その中心にあるぐずぐずに濡れた淫穴を手で割り開き、告げる。

「えーつと……んんっ！それじゃあご主人様。ぱっくり開いて、もう準備万端になったあたしのまんこに挿れて、いっぱい楽しんでくださいー」

どこかダウナー気味な、照れ隠しにも見える言い方。よく見ればその瞳は緊張に泳ぎ、俺の出方を伺っているようにも見える。

「……緊張しているのか？正直に言ってみろ」

「んー？そーだよー？ホントはすごくドキドキしてるけど、平気なフリしてんの。だって、自分から犯してほしいっておねだりするとか、エロい子みたいじゃん。ご主人様ひかない？」

（……くそ。たかがギャルのくせに）

目の前のこいつは、暗示で与えられた『催眠ペット』の役割を演じてるだけだ。にも関わらず、俺に好かれたい、俺に嫌われまいと上目遣いにねだる姿は、反則的に愛らしい。首を振り、四ノ宮の不安を否定する。それだけでホッとした様子で胸を撫で下ろす。

「……そう……？なら……いいけどさ……。ほら、わかるでしょー。もうここ、濡れてとろとろになってんの。早くご主人様が犯してくれないと、ベッドがべたべたになっ

ちやうし。あたしのことは気にしなくていいから、ご主人様の好きなようにセック
スして？♡」

ああ。うれしい。裸の四ノ宮を抱き寄せ、背中を撫でる。指先に感じる滑らかさと
鼻腔を抜ける香りが心地いい。俺のハグにうっとり目を細めた四ノ宮は、そのま
ま抱きつき返すと、耳元でつぶやいた。

「……ね？ごしゅじんさま、きて……？♡」

耳に入り込む最上級のおねだり。このまま犯してもそれは素晴らしいだろう
——が、折角『催眠』という面白いオモチャを手に入れたのだから、使わない手
はない。

「……今から指を鳴らすとお前はいつものお前に戻る。俺の事が大嫌いで、腐して
いたお前にな。だが、お前に与えた動けない暗示はそのままだ」

表情の変化は見ものだった。喜色満面の笑みから一転、驚愕——恐怖、そして激昂。先程の怒りが生易しく思えるほど強烈な感情を宿し、四ノ宮が吼えた。

「——えっ!? ちょっ…、近いっ! キモい!!」

「…フン。さっきまでアレほど可愛げがあったのに、随分だな」

「ってかあたしの服返せよっ!! お前マジで犯罪なのわかってる? キモい上に性犯罪者とかガチで終わってるじゃん。ウザすぎ…っ、じろじろ見んな、もう最っ低! ほんときもい!!」

言われるまでもない。女を連れ込み、裸に剥き、迫る男。どう見ても社会的にアウト——だが悲しいかな、その男に着いてきたのも、脱いだのも、あるいはいやらしく誘ったのも、全て四ノ宮本人だ。

以前の俺であれば反射的に謝っていたかも知れないが、目の前の獲物は所詮、俺の催眠で弄ばれるメスガキに過ぎない。

「何っニヤニヤしてんの。お前こんなのが許されると思ってたの? もう絶対許さな」

「いいから黙れよ。『さっきの続きをやるぞ』」

——ほらな。たったこれだけで、こいつは終わる。

催眠アプリを見せて、一言命令する。それだけでいい。こいつの人生を終わらせるのは簡単だ。この小煩い小娘に対するルサンチマン的な鬱屈も、今なら晴らし放題だ。再び相合を崩し、にへらと抱きついてくる四ノ宮に、万能感が込み上げる。

「あ………っ♡ ご主人様、ほら、はやくセックス、しよ？♡ もうあたし、ご主人様のちんぽが欲しすぎて……っ」

俺の服を脱がせるのを手伝わせ、薄暗い部屋の中、互いに素っ裸になる。

（甲斐甲斐しいもんだな。男には意外と尽くすタイプなのかも知らんが）

異常なやり取りコミュニケーションにすっかりあてられた俺に、四ノ宮の目線が下へと下がる。

わざわざ言うまでもない。腰を突き出し、くい、と顎で指示をする。それだけで全てを察した四ノ宮が、ベッドの中央へと俺を誘った。

「先に、ちんぽしゃぶって準備しろ……？もー、わかったよー。じゃあ、もうちよつとこっちにきて？♡」

今のこいつに、俺の命令に反抗しようという考えは出てこない。喜んで指示に従う操（催眠）り人形（人）だ。

「それじゃあ、いたらきまーふ……ちゅぷ……ぴちゃ……♡」

尻を高く突き上げ、四つん這いになった女が、膝立ちになる俺の一物へと顔を近づけ——ペろりと先端を舐める。電流に似た強烈な快楽が下半身に広がった。思いがけず身じろぎするその反応すら嬉しい様子で、四ノ宮は勃起した物に手を這わせた。

「んふ、……ちんぽってすごく固い……それに熱い……っちゅぷ、これっ、じんとくる……♡ちゅぱ……」

手コキ、フェラチオ、玉揉み。俺に傅き、献身的に性奉仕に励む姿に、一層虐めてやりたいという気持ちが湧き上がってくる。

「く……っ、四ノ宮。もっと……」

「もっと奥まで啜えろ……？♡わかった……やって、みる……。んぶっ、んん……っ、ぢゅるっ」

それは、異次元の快感だった。唾液が溜まった口内に吸い込まれていく感覚。歯を立てず、喉元まで啜え込むクラスメートの口淫に、快感の火花が散る。

「じゅぶ、ぢゅる、ぶぶっ、ふあぷ、んっ、んぐ、んむう」

「くっ……そこ……」

「っ♡おひんぽ……おおひくて……アゴが外れふおう……♡でも、おいひい……ぷあ♡」

嘘だ。美味しいわけがない。だが、まるで世界一のスイーツを食べているように俺のモノを舐めしゃぶり、手コキをお見舞いする。美しい金色の髪を耳にかけ、ふうーと息を吹きかけてくる。不意に見せる仕草まで艶めかしく、俺の欲望に火をつけていく。

「ご主人様のちんぽ、反り返っててめっちゃエグい形じゃーん：♡ 大きいだけじゃないって形もエロいとか、挿れたらマジでやばそー……んぶっ♡」

「おい……っいきなりそんな強く……」
「じゅっ、じゅぞぞっ、ぶじゅるっ♡ んぐぶぶっ、んっ、あぶ、んぶっ♡♡」

鼻の下の皮膚が伸びるほど強烈に吸い上げ、舐める。先走り汁と唾液が混じり合っつて、独特の匂いを放つ。瑞々しい四ノ宮の唇は、すっかりべとべとになっていた。

「ひんぽっ、ひんぽっ……♡ ひんぽひゃぶり、おいひい……っじゅずうっ、じゅぶぶぶぶ♡」

「おい、それ以上は……」

「んぐ、んばっ、ぶぶっ、んっ♡んふーっ、だひひゃ、らめらよ……♡だふときは、こっひじゃはいと……♡」

言いながら、空いていた片手で四ノ宮が自らの淫孔あなを弄り始める。背中越しには美しく盛り上がる四ノ宮の尻の輪郭しか見えないが、その中心からはベッドを汚す大量の愛液が滴っている。

「ちゅばっちゅぶっ、んぶっ、んん……っ♡ぱっ♡へへ……完璧♡すっかり勃起した男前ちんぽになったじゃん♡ほら、じゃあえっちしよ？あたし、ご主人様のちんぽしゃぶりまでさせてもらえて、もうぐしよぐしよになってるから、前戯ナシで突っ込んで……♡」

言葉ひとつひとつに淫語を織り交ぜ、男を立てることも忘れない。どうやら誤解していたが——元々『仲間』には優しい性格なんだろう。伊達で学年のカースト上位にいる訳ではないらしい。

「催眠ペットのアスカのどろどろおまんこに、ご主人様のアツアツちんぽを突っ込んで……ずぼずぼハメて、射精して？♡」

据え膳食わぬは何とやら、本人が誘っている以上、俺が断る理由はない。フェラをさせ、喉奥まで突っ込みデープスロートをさせ、限界まで勃起したモノを、正常位の姿勢で待ち受ける四ノ宮にあてがう。完全に濡れきった『入り口』にカリ首をぐいと押し込み、中を突き進む。

「あ、くう……っ！」

——その瞬間、四ノ宮が痛そうに顔を歪めた。

「ん……っ、そう、そのまま、お、く、まで……っ♡」

背中に回された手が強烈に爪を立てる。鋭い痛みを感じるが、その程度ではもはや止まれないほど、俺も興奮している。

「ん、んっ、あ、あああ…っ♡ はい…って、き、…ああっ…♡」

ぽろぽろと、女が目じりに滴が溢れだす。くしゃりと歪んだ笑顔は、どこか犬を思わせた。

「はあー…、はあー…、ごしゅ、じんさまのちんぽ、でかすぎ…みっちり埋まってる感じするし…っ」

男性器が根本まで埋まり、完全に俺達はひとつになる。四ノ宮の具合腔中は素晴らしく、その強烈な熱さに火傷してしまいそうだ。

「なんか、ヘンな感じ…♡ はあ…♡ でも…っ♡」

息も絶え絶え、とはこの事だろう。あからさまに肩で息をしているくせに、にへらと笑い、俺の後頭部に手を回す。

「よかった…あ…、ちゃんとセックスできて…♡ それに…ハジメテなのに、ぜんぜん痛くない…っ♡」

嘘だ。まさか、そんな筈はない。てっきり、とつかえひつかえ男遊びをしているのかと思っていたのに――。

「は…？お前…まさか、処女だったのか？」

「ふえ…？そーだよー？ご主人様がはじめて…♪ あたし、処女だったもん。ギャルっぽい格好してないと、舐められちゃうから、こんなハデな見た目にしてただけどさ…っ」

ならば、なおさら嘘だ。明らかに泣いているくせに痛くない訳がない。返す言葉に詰まる俺を見て、四ノ宮は下腹部を撫でながら静かに微笑んだ。

「あ、くう…んっ。でも、お…♡ うれ、しいよ。あたしのハジメテ、ご主人様にあげられて♡」

「いや、でもお前……エロに慣れてる感じだっただろうが……てつきり、ヤリ慣れてるもんだと」

「とー、ぜんじゃん……♡ あたしはご主人様の……んっ、エロエロくな……っ催眠ペットだもん。今日だって……はじめてだったけど、ご主人様だって思うと、嬉しいのが勝つっていうか……♡」

催眠をかけてレイプ紛いのことをした俺を、四ノ宮が力強く抱きしめてくる。巨大な胸の丸みが押し当てられると、動揺しながらも興奮してしまうのだから、俺もどうしようもない。

「……にひひっ、ありがとーご主人様。あたしのこと、犯してくれて♡」

目の前の催眠ペットはどこまでも嬉しそうに、にこやかに礼を言った。

「ほら……♡ もう動いていいよー。男の人ってたくさん腰振って、気持ちよくなんないと出ないんでしょ？あたしの身体で良ければ好きに使っていいから……ん、あああっ♡」

ここまで来たなら仕方ない。というより、既に罪を犯した以上、開き直るしかない。毒を食らわば皿まで、悪党になった方が互いに楽しめる。腰を引き、再度膣中に突き入れ、喘がせ、昂る。俺にアプリを渡した女の真意はわからない。だが、こんな『力』を渡されて使わない方が馬鹿馬鹿しい。あの女もそれを望んでいたじゃないか。催眠万歳、それで世はこともなしだ。

「あっ♡くふっ、んっあああっ！」

「フフ…：いいのか？お前みたいなのカーストのトップにいる人間が、学校帰りにこんな事をして…：相手が俺だとわかってるだろ？」

「俺なんかと…んっ、セックスして、ホントに良かったのか、って…？何、いってんのっ、はうっ♡ご主人様なんだからっ…：いいに決まってるじゃ、あっ♡んんっ♡そこ…：いいところ、当たって…♡」

挿れて、引いて、押して、戻して。ぐぼぐぼと空気を孕んだ水音が、二人が繋がった場所から響く。愛液がさらに量を増して、肉襞の滑りを良くする。

「ペットって、あうっ、そーゆーもん、んっ♡でしょっ。つか、ご主人さままじで……っそのちんぽ、やば、やばいって、え、ええ……っ♡♡」

何度もピストンを繰り返すうち、破瓜の血が膣の外に漏れ出してきていた。

指を絡ませ、舌をねぶり、背中をかい抱いて強く密着する。豊満に育ったおっぱいを揉みしだき、乳首をこねくり回し、吸い上げる。四ノ宮の両胸の先端は種子のように固くなっていた。

「あっ♡ぐりぐり、いいところ、あたっ♡当たって、ん……っ♡ナカ、これ、んっ♡すぐ、っ♡すぐイクっ、イクっ♡あっ、イキそ……っ♡」

「俺もだ。どこに射精すればいい？」

「あっ♡べ、別にな、好きにすればいいじゃんっ……んっ、んうっ♡あたしは催眠ペットだし、拒否権とかなないから……っ♡ナカダシされても、文句言わないからあっ♡」

ああ。催眠は最高だ。

さっきまでの逡巡も葛藤も頭の中から吹き飛んで、全力で目の前の雌に腰を振る。そうだ、俺には催眠がある。いざとなれば、周りの認識を変えてしまえばいい。

「あっ♡それダメイク、っ、イク♡イクイク……っ♡♡イク……うっうっうっ
……♡♡」

頭が焼き切れるほどの快楽に痺れ、股間に集まる欲望を勢いそのままに放つ。四ノ宮アスカの——クラスで最も価値の高い女を自身のセックスでイカせ、更に膣内射精する。

たっぷり五秒以上。失禁と勘違いするほど強烈な射精を肉膣に放ち、最後まで出し切る。目を閉じ、ベッドシートを掴み、自身の子宮に投げ出された精液の感覚を、四ノ宮自身も味わっているようだった。

(……ダメだ。まだ、治まる気がしない)

射精はした。だが、全くもって治まらない。出し切ってなお、獰猛な性欲に頭が支配されている。

「……………っ」

「んんっ！！♡ はあー……………っ♡ はあーっ♡ ……ご主人様…んんっ！！♡ あう、あたし今、イッたばかり、ひいいっ！？♡」

「悪いな。だが、まだどうやら射精できそうだ。お前も付き合え」

「あ、っんっ♡ んんんっ！？♡ そこされるとまたすぐイクっ♡ イっひゃうっ♡ イヒまくるからやめれっ♡ ひぐっ！！！？♡♡」

まるで餅つきのそれだ。突いて、混ぜる。ピストンごとに、精液で汚れた膣を掻き回す。まとわりつくヒダを押し分け、ぶちゅぶちゅと音を立ててセックスする。四ノ宮は、押し寄せる快感に壊れ始めていた。

「あゝあゝあゝあゝイクグっまだイクっイクっではああああっ！！♡♡イク、イ、ツク…イクの止まんゝなゝっ」

「何回でもイケよ。お前のまんこと俺のちんぽは気が合うんだろ」

「あぎいっ♡このちんぽつつよす、ぎっ♡ちんぽっ最強っすぎ、やばっ♡あうっ♡
んっ♡ あたし初めてにゃのに、っ、ご主人様のちんぽと相性、あうっよすぎてイク、イク、イグううううううう……!!♡♡♡」

甘い声に濁音が混じり、時折溺れたように息を引き攣らせる。

「おい。そんなに締め付けられたら、また膣内射精することになるぞ」

背中側に回された足のせいで、まるで自由に動けない。仕方なく、更に奥に、奥にと突きあげる。ヨダレで汚れた口周りをキスで吸い上げ、二度目の射精へ加速する。

「あひっ!?!う、うん、だして♡だしてだしてっ?いっぱいまんこにしゃせーしてえっ♡あたしの、あうっ、まんこにどばどば出してっ♡♡ごしゅじんさまのつよつよ精子っ♡ぜんぶ注いでいいから、っ、ああ♡」

「く……イクぞ、四ノ宮……っ！」

「ああああイグっ、しゃせーっ♡なかだしっ♡ご主人様のちんぽに突がれてイグ、ごしゅじんさまっ♡のーこーオスさませーえきどぴゅどぴゅしてあたしをイカせてええええっ！！♡♡♡」

一度目を遙かに超える、更なる快感が上塗りされていく。頭に血が上り過ぎて視界がぼんやり赤く見えてくる。凶悪な性欲で目の前の女の心を、身体を犯し尽くす。対する四ノ宮も、ホテルの壁を貫く声を上げて絶頂し、俺の精液を受け止める。血も汗も身体の手すべてがばらばらになり、二人でひとつの存在に溶けていく。

「……はあーっ……はあ……はあ……あひ……んっ、あはあ……♡」

「……ふう……」

（まったく、最高だよ。お前は……）

今まで四ノ宮に抱いていた評価を改める。口さがなく、ただ鬱陶しい女だと思っていたが——、

「フフ……お前はまた使ってやる。ようし、これを見ろ」

「え……つご主人、さま……どうしたの……それ……なに……？」

いずれ、こいつを催眠暗示だけではなく、本心から屈服させる。

俺の催眠ペットになるよう躡けて、こいつそのものを作り変えてやろうじゃないか。

にやつく俺が差し出したスマホの画面を直視し、またしても四ノ宮がフリーズする。

「あ……っ」

お楽しみはまた今度にしよう。あまりに遅くなり過ぎて、周りの人間に怪しまれてもまずい。早く解放して、こいつを『元の状態』に偽装させなければ。

「はい……四ノ宮アスカは 催眠状態 になりました……」

「よし。次に目を覚ました時、お前は俺とここで居た事を忘れる。身体が気怠い気もするが、違和感を覚え家に戻れ。ラブホにいることも疑問に思わない」

「はい……あたしは……目が覚めたら……今日のことを忘れます……何も違和感はないで、家に帰ります……ラブホにいることも……疑問は、もちません……」

「それと、お前はもう催眠状態の気持ちよさを知ってしまった。次からは俺が命令すれば、すぐに今みたいな催眠状態に落ちることが出来る。その時のお前は、俺の催眠ペットとして俺を誘え」

「はい……あたしは……いつでも催眠状態に落ちて、今日みたいに、ご主人様を誘います……」

「だが怪しまれるようなことはするなよ。普段は俺との関係は忘れたまま過ごすんだ。いいな？」

「普段は……忘れたまま……過ぎします……」

完璧だ。次への布石も打った。また直ぐに使ってやろう。こいつの抱き心地は、紛れもなく最高だった。

「よし。目が覚めた時、お前は俺に気付くことはない。そのまま自然な気持ちで着替えて部屋を出ろ」

「はい……………ご主人様に気付かずに……………部屋を出ていく……………わかりました……………」

——パチンっ！アプリの画面を閉じて、そつと部屋の端へと移動する。長い命令や暗示であれば、その分覚醒までに時間がかかる。その瞬間を、緊張の面持ちで待ち続ける。

「……………あ、あれ？」

ぱちり、目を開けた四ノ宮はしばし呆けた。

「……………あたし、なんでこんな所にいるんだっけ。ってゆーか、時間やば！？なんで……………まあ…いつか」

『目が覚めれば今日のことを忘れる』 『違和感を覚え家に戻る』 『今自分がこの場所にいる事に疑問は持たない』 ……そして、俺の存在には気付かない。

「ふああ…なんか全身だるいし…帰って早く寝よーっと。ってか、服まで脱いでるとか、ほんとイミフメイだし…疲れてたのかなあ…」

抱き合った痕跡を意に介さず、汗や愛液の跡もそのままに、四ノ宮が衣服を纏っていく。汗に濡れる素肌が下着に隠され、何事もなかったかのように制服の下に見える。

「ん……とりあえず、これでいっか…。よし、それじゃあ、かーえろ。はあー、お腹すいたあ……どこかでご飯買って帰らないとなあ…」

あくびを噛み殺した四ノ宮が部屋を出ていくのを見届け、俺もその後続いた。

三、【二日目】生意気ギャルアスカの催眠エロペット宣言！

「ふあ……あああ」

「アスカ。今日はずっとあくびしてるじゃないか。昨日そんなに夜更かししたのか？」

放課後の廊下で、聞き馴染みのある声が聞こえてくる。生あくびを繰り返す四ノ宮とその親友、三澤シオリだ。

窓枠で器用に頬杖をつくダウンナーな女生徒に、凜とした生徒会長が四方山話よもやまばなしに華を咲かせている。なかなかどうして、まったく違うタイプ同士気が合うらしい。だが、どれほど仲が良くとも、よもや想像はできないだろう。今、目の前に居る相手がラブホテルにしけこみ、処女まで散らしたなど。

——ましてその相手が俺であるなど。天地がひっくり返ろうと気が付く訳がない。

当の四ノ宮は、その時のことをまるで覚えていない様子で、むにやむにやと謔言をつぶやいている。生あくびと伸びを繰り返しても眠気は醒めないようだった。

(くく……圧倒的優越感だ……っ)

「ん……むしろ超ぐっすりだったんだけど……ふああ……眠すぎ……」

「ほらほら、寝るならせめて家に帰ってからだよ。学校で寝てたら先生に怒られる」

嫌いな相手に処女を切る羽目になり、疲労が蓄積したのだろう。無論、仕向けたのは俺なのだが——兎にも角にも、四ノ宮はグラウンドを見下ろしながら、うつらうつらとするばかりだった。

「ん……あたしちょっと休んでから帰る。しおりん今日は先に帰ってて？」

「アスカ……本当に大丈夫か？保健室で少し横になるとか……」

「あーだいじよぶ、だいじよぶ。そこまでじゃないし。ホントにちよつと休むだけだから……」

そこまで言われて、生徒会長も口を詰まらせる。本人が断る以上、無理強いもできない。一人でゆっくり休むことを望む親友を不安げに見ながらも、黒髪の美少女はやおら頷いた。

「そ、そうか……わかった。アスカも無理しないで、ゆっくり休んでくれ。また明日」

「んー……ばいばーい……。ふあああ……」

廊下の曲がり角に三澤が消え、がらんどうとした廊下には四ノ宮一人が残される。週末の学校に好き好んで残る奴は精々、部活か補修が大半だ。アンニュイな空気の中、成り行きを見張っていた俺は揚々と近づいた。

挨拶など必要ない。ただ目の前に催眠アプリを差し出し、見つめさせる。驚愕・緊張・弛緩——『落ちる』ことに慣れた四ノ宮は、それだけで素早く催眠状態へ

と入り込み、力なく窓枠に体重を預けた。

「あ……………う……………」

「よし、四ノ宮。『昨日の続きだ。お前は本当の自分を思い出す』……………さあ、どうだ？」

「……………はい。アスカは……………ご主人様が大好きな……………ちんぽ奴隷の催眠ペットです……………ご主人様の言葉には……………絶対服従です……………」

「……………ははは。笑いがとまらない。これが、あれだけ俺を嫌っていた女のセリフだとは。」

ラブホテルを出てしばらくの間も、四ノ宮を尾行していた。その別れ際、追加で埋め込んだ認識がこれだった。

『自分のご主人様が大好きで、彼を無条件に信頼している』『自分のご主人様のちんぽ奴隷であり、催眠によって変えられたことを自覚しながらそれを受け入れる』『ご主人様の命令には絶対服従し、一切疑問を持たない』

学舎にいながら、クラスメートを淫靡な催眠に落とす背徳感もいい。ましてそれがクラス一の美少女なら尚だ。

「はっ…!?!? …あうえ…?」

目をぱちくり。何度も瞬かせたカーネリア色の瞳が、不意に俺を捉える。昨日あれほど罵詈雑言を吐き、純潔を奪われた女は、俺を見るとぴたりと停止した。

かたや加害者、かたや被害者の関係…犯人である俺を面罵し、怒り、あるいは怯えて誰かに助けるのが定石——なのだが。

「あっ♡ ご主人様じゃーん♪ なになに、今日もあたしを使ってくれんの?」

女は周囲に誰もいないことを注意深く確認すると、スカートを翻らせて抱きついてきた。胸の谷間に俺の腕を挟み込み、にやにやと好色に笑う。

「ああ。せっかくだからお前を犯してやろうと思ってな」

「いいよー。だってあたしは…四ノ宮アスカは…ご主人様の催眠で洗脳済のペ
ット…オナホみたいに使ってオツケーだよ♡」

ここが学校であることも正しく認識している。そのうえで、自分が暗示によって操られた催眠ペットであることを受け入れている。自分が「催眠ペット・アスカ」と信じ込む……ぼっちりと暗示に入り込んでいる。

「ところで三澤とさつき話してたみたいだな」

「しおりん？うん、先に帰ったよー。だって、『普段のあたしのまま、適当な理由をつけて帰ってもらおう』命令だったでしょ。あたしも、しおりんよりご主人様と一緒にいたいし……♡」

（なるほど、興味深い。催眠中に与えた暗示が、実際の四ノ宮の心理・行動にも影響を与えたのか？）

俺は、『今日の放課後一人になるよう』に命じただけで、その方法までは指定していなかった。つまり『眠たいから休む』という言い訳は——半分は事実だろうが——四ノ宮が深層意識で自発的に考えだしたものだということになる。

背筋にぞくりとした感覚が走る。やはり、この催眠アプリは人の本来の意識にも影響を及ぼす力がある。通常の催眠や暗示の影響力をはるかに超えた、強烈な支配力が……一人の人間を破滅的に狂わせる力に——心が愉悅する。良心はいたむどころか、その未来を見たいと強烈に欲している。

爛れた内心をよそに、自らの豊満な肉体を押し付けてきた四ノ宮は、ピンクダイヤモンドのように目を輝かせて俺を見上げていた。

「ほら、何ぼーっとしてんの？目の前にどんな命令にも絶対服従のエロい女が居るんだよお。何したい？何、させたいかな？」

ネイルを施した可憐な指先が、ズボン越しに俺の下半身を這う。熱と固さで苦しむソレに、四ノ宮は嬉しそうに舌なめずりをしてみせた。

「あは♡ご主人様のちんぽバキバキ……♪めっちゃ勃ってんじゃん……♡ズボンの上からでもわかるよー」

「お前にそうやってくっつかれて囁かれれば、そりゃあ勃起もするさ」

「……あたしの声、好き？」

「ああ。好きだぞ」

「……そっか。にひひっ、嬉しい♡ ねえねえ、早速ホテル行こ♪ お金もゼンブあたしが出すから、一番いい部屋でセックス……しよ♡……ちゅぷっ……♡」

おっぱいが歪むほど強く抱きつき、熱いキスの雨を降らせる。たまらずその胸を揉みしだくと、四ノ宮は身を振りながら悶えた。

「ホテルまで我慢できるのか？お前ならここでも嬉しいくせに」

「もう、ダメだよー……♡ あんっ……ん、ここでシたら、あたしがご主人様に操られて自分からちんぽ欲しがつてる女ってバレちゃうじゃん……♪」

「ふふ……人気者のお前が俺専用のエロ女だってバレたら大騒ぎになるからな」

「……うん、そうだよ。あたしがエロくなるのは、ご主人様の前だけ……ご主人様が卑劣な催眠術で操ってるのがバレないように……普段は忘れてるだけだもん……。ねえねえ、早く行こ？♪ ゆっくり二人つきりになれる場所であ……ご主人様のカタくてぶつといで気持ちよく……して……♡」

ここまで情熱的に誘われて折れない男は居ない。俺達は校舎の裏門から悠々と抜け出すと、再び昨日のラブホテルへと繰り出した。

ホテルに到着するなり、四ノ宮は迷わず最上クラスを示す部屋のパネルを押した。貧相な俺に腕を絡め、耳に舌を入れて煩惱を刺激してくるおまけつきだ。おかげで、部屋に着く頃にはすっかり脳が沸騰してしまっていた。

「えへへ。一番いい部屋って、こんな感じなんだ？ひーろーいーっ♡」

ハイテンションを隠さず、女がぴよんぴよんと飛び跳ねる。なるほど、今回の部屋は昨日のものとは随分趣が違うらしい。一・五倍は広く、露天風の風呂にシアタースクリーンと随分寛げる空間になっている。どうやら寝具も勝手が違うようだった。

(尤も、どうせやることをやるだけなんだがな)

「お前。昨日の部屋の倍くらいはするぞ。良かったのか？」

「うん？もーご主人様はお金の心配しなくていいの。ってゆーか、ラブホ行きたいって言い出したのあたしじゃん？ご主人様は、あたしをどーやって犯したいか考えるだけでいいんだよ？」

最高の笑顔できっぱりとやってのけられ、返す言葉を見失う。しかも、相手はクラスの人気者だ。まるで自分がえらく高尚な存在に引き上げられた錯覚すら覚える。

「なんだ、そんなに犯されたいのか？」

「当たり前じゃーん。ほらほら、時間もったいないし、早速やる？あたしここに来る前からもうムラムラしてやばいんだよねえ…♡」

銜いも躊躇もない、直球な誘い文句。昨日でわかったが、気を許した相手には竹を割ったような快活な性格の四ノ宮だ。正気の時の態度の悪さは、単純に俺が嫌いなだけだからこそ……認識を変えれば、こうも態度が変わる。

「ほら、まずはキスしよ……抱き合いながら、ちゅーって……♡んーっ、ちゅぷっ……ちゅ……ちゅぷっ♡ごしゅじんひやま……っ♡らいしゅき……♡」

ああ。学校の奴らに聞かせてやりたい。こいつの友人は一体どんな顔をするだろう。こいつを狙う男共はどれだけ嘆くだろう。俺の唇を啄み、舌に吸い付き、唾液を啜るスクールギャルの女王様。じゅぶじゅぶと音を立てる今のこいつを、知らしめてやりたい。

「それで、本当に三澤にはバレてないんだろ。あいつにお前を操ってるのがバレたら面倒だぞ？」

セックスの痕跡は念入りに消させたし、学校にいる間はその記憶も封じた。よしんば思い出したとしても喋れないよう暗示も与えてある。それでも、女の『勘』は

バカにできない。付き合いの深い親友に万が一にも『催眠ペットの四ノ宮アスカ』を勘繰られたら面倒だ。心配して眉を顰める俺を、四ノ宮がにやにやと見ていた。

「…にひひっ、だーいじょうぶだよ。しおりんにはバレてないから。昨日あたしがご主人様に催眠掛けられたのだって、まったく気付いてなかったし♪」

「フフ：お前。俺に操られていいように使われてるってわかってるのか？」

謂わば今のアスカは、自分を正気と思い込んでいる、狂気の間人だ。

「え？…催眠掛けられて、操られてるのがイヤじゃないのか…？…って？催眠ペットのあたしが、ご主人様にハンタイとかするワケないじゃん？ご主人様は、いつでもどこでもあたしを使って、えっちなこととしていいんだよー…♡もちろん、あたし以外だって…♡」

ぶる、と身震いする。操って言わせていると分かっているけど、その発言は刺激的すぎた。

「ね、ご主人様、想像して：♡ クラスのみんなに催眠かけて、みんなの前であたしにナカダシ孕ませセックス：♡ おまんこぐちよぐちよってエロい音立てて、あたしはご主人様に『ナカダシしてください』ってお願いするの：♡」

それも悪くない。右耳から滑り込む蠱惑の響き。墮落が鼓膜を突き抜け、脳髄に染み込んでいく。クラス全員を催眠の支配下において、全員の目の前でこいつを犯す。ただの低俗な妄想と切り捨てていたそれも、今は違う。

この催眠アプリがあれば、それも不可能じゃない。

「それともお：あたしのパパとママに催眠かけて、お家の中で両親公認種付けセックスの方が好き：？もちろん、あたしは：いいよ？ だって、あたしはご主人様のちんぽを突っ込まれるための、催眠オナホペットだもん：♡」

催眠モノのエロゲに出てくるようなシチュを並べたて、四ノ宮が笑う。はたしてこいつがそんなゲームを知っているかは定かでないが、『俺が好きそうな』シチュエーションを考えた結果、そこに行き着いたらしい。

刹那、下半身に鋭い刺激が走る。どうやら気付かない内に、器用にも俺のモノをチャックの間から取り出していたらしい。灼熱の棒が外気に触れ、天井目掛けて聳え立つ。

「にひひっ、コーフンしすぎ♡ さっきからエロい匂いさせまくりじゃん。いいよー。手でシコシコする？それともお尻で挟んでコイてあげよっか？ご主人様なら、なんか思いつくんじゃない？」

煌びやかなネイルをつけた指先がちんぽを包み込み、先端を捏ねくり回す。強烈な刺激に逃げようとする腰は、四ノ宮にしっかりと掴まれ動くこともままならない。このまますぐにイッてしまうのは、あまりに勿体ない。

「く……っ、いきなり飛ばしすぎだ。そうだな……お前から俺を誘ってみろ。できるだけエロい言葉で、お前が可愛いと思うセリフでな」

苦し紛れに出した命令に、女は恥ずかしげに頬を掻く。自分から淫語を言うのは平気なくせに、改めて言われると少し勝手が違うらしい。

「えっちな言葉で可愛らしく誘え…？ それ、言われてからやると恥ずいやつじゃん…。んー、どーしよっかな…」

逡巡すること数秒。意を決したように四ノ宮が俺の正面から抱きつく。甘い香水の匂いは汗と混じり、鼻腔に流れ込んでくる。

「ん…っ♡ ごしゅじんさま…ベッド、行こお…？♡ おたがい裸んぼになって、ハグしたり、エロいキスしたり…あたしのこと……気持ちよく、して…♡」

「…っ。俺の好きにお前を犯してもいいのか？」

「うん…ご主人様なら…いーよ…♪ ザーメンぶっかけてもいいし、膣内射精も全然おっけーだから…♪ 今日はおたしと……寝よ？」

たまらずズボンに突っ込んでいたスマホを取り出し、カメラモードを立ち上げ

る。録画待機状態がオンになっていることを確認し、眼前の美女に向ける。

「それじゃ：服、脱ぐね？：脱いでる姿を録りたい？いーよお。四ノ宮アスカのヌキドコロ満載のエロビデオ、ご主人様だけは好きに録っていいんだからね。……ん、しょ……っ♡」

ピロン、と軽い音がして、ストリップショーが幕を開けた。徐々に顕になる肌を網膜とレンズに焼き付けていく。腰を捻り、制服に指をかけ、腕をクロスさせて器用に脱ぎ去る。まるで踊り子だ。

「はい、脱いだよー。えへっ今日のブラ、かわいいっしょ。あたしのお気に入りなんだあ♪下とお揃いの、ミントグリーンの、花柄なの。ご主人様はもっとエロい方が好き？」

目の前の女に抱く歪な思惑を抜きにして、それは美しいと思うに足る姿だった。夏らしい健康的な美肌に、大切な部分を隠す上下セットのランジェリー。巨大な球

体は薄い緑色のブラジャーでその半分を覆われ、上品な花の柄が咲く。

「これも、いい？ やったあ…♡ ご主人様にそう言ってもらえるのがあたし、一番うれしい…♡」

「…四ノ宮…」

こいつの肢^{カマ}体^{ラダ}の前ではただの飢えた獣になってしまふ。理性をかなぐり捨てて飛び掛からんとする狼を、だが女は妖艶に笑ってひらりと躲す。

「この、ナカ…？ もう、せっかちは嫌われるよー。あたしが、ご主人様を嫌いになることなんて、絶対有り得ないケド…♡ せっかくビデオ録ってるんだし、まずは、このままの姿で、あたしにキス、して…？」

果たしていいように弄ばれているのは俺か、こいつか。俺を挑発し、『焦らす』ことこそ最も興奮を高めるのだと理解しているらしい。

「ちっ♡ちゅぷ…っんっ…♡ごしゅじんさま…んんっ♡ちゅぱ…っ」

いきり勃つ陰茎を露出した男と、下着姿の女が抱き合い、何度もキスを交わす。剥き出しになったハリのある尻を揉み、胸を掴む。「くふっ」と漏れる声が、甘さを増して耳に響いた。

「んっ、はあ…♡ごしゅじんさまのキス…好きだよ…っ♡好き、だいすき…♡んんんっ、はう…ちゅぷ…♡」

「…四ノ宮…」

「ん…♪好きって言われるの、いいんだ…？♡ちゅぷっ…好きだよ、ごしゅじんひゃま…っ、ちゆる…すき…すき…だあい好き…っ♡」

『好き』の豪雨に耳がマヒする。魔性の囁きと握られた下半身を扱かれる度に、堪えきれず呻く。

「…♡もつとちんぽ…固くなったね…あたしでコーフンしてくれたんだ…♡ちゅぱ…っ、ぷちゅる…っ♡」

これはよくない。このままだと挿れる前に射精してしまいかねない。

「ん？…次は全裸M字開脚して、カメラに向かって、これから何するか宣言しろ？…いいよお♪ご主人様の言うことはなんでも聞いてあげる…♡」

——つまり、ハメ録り。四ノ宮自ら協力させ、AV顔負けの俺専用のエロビデオを作成する。再びスマホを向けた俺に、金髪をひらめかせながら半回転した女は下着も全て脱ぎ捨てていく。肩甲骨のくぼみと安産型の臀部を魅せつけ、ベッドの上で言われた通りのポーズを決めた。

両足を身体の横に、まんこを両手で割り開いた破廉恥極まるポーズ。おっぱいはもちろん、勃起した乳首もへそも、股でぬらつく陰唇も全てが丸見えのエロ過ぎる姿勢…女の尊厳などまるでない卑猥な体勢で、四ノ宮は宣言した。

「こほん……じゃあ、言うね……？ やっほ、四ノ宮アスカだよ。今日は、あたしの
だあい好きなご主人様と、いちゃいちゃしたり、カメラの前で生ハメセックスしち
やいまーす♪ あたし、ご主人様の催眠で操られて、絶対服従の催眠ペットにされち
やった♪ ご主人様の命令ならいつでもセックスするし、今日もこうしてご主人様を
ホテルに連れ込んで、どエロいことしちゃう女なんだあ。にひひ♡ それでえ、今
からご主人様にたーつくさん気持ちよくしてもらおうの……たのしみ♡ ね、ご主人様
……催眠ペットのアスカのココ、気持ちよくして？♡」

ああ。お前は俺の予想以上だ。自分を破滅させるビデオ録画を、操られていると
はいえ全力で遂行してしまうお前が面白くて仕方がない。

「ほらほら、おいで♡ ご主人様のちんぽ、ちゃんとあたしが受け止めてあげる。い
たあいくらいに勃起したカッコいい男の子ちんぽで、エロペットのあたしをやっつ
けて？♪ しっかり狙って……んっ、あ、ああ……♡ そこ、はいつて……♡」

サイドテーブルにスマホを立て掛け、ビデオは回したまま。柔な素肌を押し倒

し、そのまま正常位で挿入する。どろどろとした愛液を尻にまで垂らした淫膣は、昨日よりもスムーズに俺を迎え入れていく。

「ん…っ♡ はああ♡ お、お、お…♡ ……前戯なくても、奥まで挿入っちゃった♡」

喘ぎ声に濁りが混じる。肉壁に包まれる感覚に唸る俺を差し置いて、四ノ宮は早くも絶頂した。

「……締めすぎだろ……っ」

「♡……っ、やっぱあたしとご主人様の相性バツグンだよねえ。ほら見て？あたしの中押し分けて、中からメツチャノックしてくんの。これ、超、気持ち、いい…っ♡」

限界まで屹立したモノが、膣肉に埋まってぎちぎちと締め付けられる。気を緩めば直ぐに射精してしまいそうな桃源郷が、俺を容赦なく攻め立ててくる。

「ん：♡じゃあ：動くね？ 大丈夫だってえ、もうめちゃうくちや濡れてるから♡それに、あたしの身体はご主人様に使ってもらってこそじゃん？ 好きなだけ犯して、あたしのこと孕ませちゃってもいいんだよー：んっ♡」

——だから、少し遊んでやることにしよう。

「四ノ宮……『目を覚ませ』」

うっかり果ててしまわないよう腰に力を入れながら、四ノ宮の催眠状態を解除してやる。とろけきった睨が硬直し、充血し——恐怖に濡れる。

「え？は？……はっ、えっ、な！！？」

「よお、起きたか。お前のまんこ、中々いい具合だぞ。フッフ……」

「や、うそっ、えっ、はっ！？やだ、何これ！あたし、どうなってっ！」

困惑と焦りの極致だろうか。活火山のごとく怒り、反発する四ノ宮がどうにかもがこうと暴れ————られずに、わなわなと口を震わせた。

「や、やだやだやだやだ！は、離れろくそっお前、何して！！」

「ほら、逃げられるもんなら逃げてみろよ。そんなに腰を動かして、俺とセックスしたくて堪らないってところか？」

「ちがう！あたしじゃない！誰があんたなんかとこんなっ、こんな…っ！」

「なら動くのを止めろよ。言っておくが、今動いているのはお前であって、俺じゃないからな」

「やだっ身体、とまってっ！お前なんかとセックスしたくないっ！！やだ、止まれってばっ！」

身体の自由は奪ってある。心だけ元に戻してやれば、やはりこんなものだ。身動き出来ず恐れ慄く四ノ宮を、我が身勝手に蹂躪する。胸を握り締め、尻を執拗に撫でるたび、俺のモノを啜えた膣肉が湿りを増していく。

「ひぐっ！！？ いや、おっぱい、揉むな…っ、お尻、触んなあ…っ！」

「おい。そんなに暴れて刺激されると出るぞ。フフ……このままだと、ナカダシ確定か」

「ホントに、やめ、やめて……！今、だ、だめだめだめっ、イク、イク、イツちゃいそうだから……っ」

「好きなだけイケばいいさ。どうせ逃げることも出来ないんだから、諦めて快感を受け入れた方がいいぞ」

「やだやだ、だめっ、いや、とまって！からだ、勝手に……！お願い、とめて、とめて……！これもあるたの催眠なんですよっ、お願い、お願いだからやめて……」

「そう大きな声を出すな———フフ、四ノ宮。『本当の自分を思い出せ』」

紅潮した頬をぶんぶんと振り、どうにか快楽から逃げようとする。だが、そんな必死の抵抗もアプリの前には無力だ。『後催眠暗示』———一定のキーワードを媒介に、被暗示状態を行き来する。どうやら繰り返すほど、そのかかりは深くなっているように感じた。

アプリに歪まされた四ノ宮が、今度は足をカニのように折り曲げ、俺にしがみつ

「：えへ〜♡ご主人様だーいしゆき！♡とりあえず一回、出しちゃう？ギャルオナホに膣内射精して、オス様のカッコいいところ見せて？♡：ん、ああっ♡ああっ♡！！♡」

「フフ：：：ならお望み通りこのままイクぞ。お前もイケ」

「あ：そこいい、そこっ♡イ：ク、イクイク、イクっ！これ来るっ♡きちやう♡マジ頭びりびり：イグイグっ♡イ：グう：：う：：あ：：っ♡♡♡」

快感で脳が焼かれ、目がグルンと白目を剥く。動物の喧嘩に近い低い声を上げてイキ散らす。普段のカリスマも輝かしさもまるでない、性欲に支配された姿だ。

「：：お。おおお、お、お：：：っイ：：グ：：：イ：：グ：：：：：：っ♡」

ふしゅう、と派手に潮を噴きながらも、目の前の肉の塊は拘束を解こうとしない。それどころか、無責任にも膣内射精を果たした俺を愛おしそうに抱きよせてさえる。

「……あは♡」

——そして、笑った。

「…ん♡ まだ…抜いちゃダメだよ…♡ ちゃんとあたしのまんこに、最後の一滴までしゃせーしないと…♡ ん…♡ にひひっ、そうそう、えらいえらい♪ ペットまんこに全部出せる優秀なオス様精液、ムダにしたらもったいないもん…♪」

俺の頭に手をかけ、聖母のように穏やかな笑みを浮かべている。女の魅力を振り撒くペットを前に、射精後の虚脱感が何とも心地いい。

「あん…♡ あは、ご主人様、ベトベトじゃん…あたしの大好物の精液、いっっぱい注いでくれたんだよねえ。ごちそーさま…♪ ん…垂れてきた…♡」

繋がったままの肉穴の隙間から、どぷりと濁った二人の体液がこぼれ出す。尻へと流れていく白濁液にそっと手を這わせた四ノ宮は、幸せそうにそれを弄ぶ。

「ほらどーお？あたしの指、ご主人様の精液で糸引いちゃってるし♡ね、でもまだこんなモンじゃないよね。次はあたしのこと、後ろから犯して？♡」

たった一度で終わる訳はないだろう？と。自慢の桃尻を艶かしく左右に振る。その所作だけで、俺の中で精液が『次』を求めて渦巻く。

「ほら、ふりふり〜って♡ エロい？ご主人様のこと、うまく誘えてるかな？ こうやって：お尻振ってえ、バックで犯してほしいっておねだりしちゃってるの♡」

尻穴まで垂れていた精液が、バックの姿勢になったことでまた逆戻りする。呆れるほど射精してもまだ、互いに「もっと」と求めているのがわかる。

正常位で、後背位で、更なる快楽を得るべく、またしても挿入を開始する。

「あ：キ、タ：♡ また、挿入って、きたあ：♡」

まるで犬の交尾だ。後ろから美巨尻を捏ね、子宮口を突きあげる。背中の曲線も、アイドル顔負けのくびれた腰も、すべてを見下ろせる最高の景色^地で美女ギャルを犯しつくす。これだけでも他に代えがたい愉悦だが、俺にはそれを超える『力』がある。

「四ノ宮、『目を覚ませ』」

「……は……っ！！？」

ああ。面白い。快楽からの絶望。またしても俺にいいよう操られていたことを理解し、怒り狂う。

「ちよ、まじ……マジでいい加減に……っああ!？」

「ほら、もっと腰を動かせよ。自分で言ったんだぞ、後ろから犯してってな」

『正気に戻れば身体は動かない』……だが『操られれば自由になる代わりに自分から求めてしまう』————ただしく悪夢で、その反復運動を繰り返す内に、快感はど

うしようもなく蓄積する。

「ほら、お望みのバツクだ。気持ちいいだろう、よかったな」

「うご、かない、でよ…っ、やめ、ホントにやめ、て…っ…あだま、…痺れ…」

「お、すごい締め付けだな。またイッたのか。そんなに俺のちんぽが良かったか？」

「その汚いの、抜い…て…っ！！まじでキモ、い…っ…んあ♡」

散々な言われようだ。俺自身、悪役を楽しんではいるが。

「おいおい。せつかくイカせてやってるんだから感謝くらいしろよ。お前、まだ自分の立場がわかってないのか」

「あ、んっ♡やめ、ろ…っそれ以上はやば、いから…お、お…お…っ…♡ぬい、抜いて…っお願いだからやめっ、ちよ、あ、イク…っ♡」

「仕方がない———ほら、『本当の自分を思い出せ』」

———浮いては沈み、沈んでは浮いて。四ノ宮の正常正な意識意は何度も揺さぶられる。天国と地獄をシャトルランしている心地だろう。

「あ♡ まだイグ、イクっ、イツちゃう♡ ご主人様のちんぽでイカされる♡♡ もつと突いていいよ♡ ズボズボして♡ ご主人様なら何回びゆるびゆるしてもいいカラ♡ あっ♡ あたし♡ ご主人様専用の精液タンクになる、からあ♡♡」

「そうだ。お前は俺専用の精液タンクだ。イケっ！」

「お、お、お、お：イク、またイク、あたし、またっイグっイグ！！！！！」

———そして、催眠解除だ。

絶頂と同時の、意識の急降下。だが、腰の動きはやめない。さらに四ノ宮をイカせるために、最もこいつが喘ぐ部分を執拗に擦り上げてやる。

「『目を覚ませ』」

「ひっ!? お♡あ♡ これダメ、イク…おっ、お、お…イクイク、イグ…ツ♡ ちく、び、つねならないで…♡ もう、やめてっ…♡ あんたに怒ったこと、謝る、謝るかりゃ!! つねえ、イグ、もうイクう、イクっイツちゃう、ああああイグう、イク、もういく、イツ…グううううっ!!?」

びいん、と海老反りになった四ノ宮がイク。わかりやすく全身を痙攣させ、まんこから飛沫を撒きながら、深くイク。

(ついに、こいつから『謝る』という言葉を引き出した。フフ…もう限界か?)

それはつまり、こいつの心が折れかけていることの証明だ。俺には敵わない、どう足掻いても勝ち目がない。ただ『やめて』と懇願し、謝る以外に自分出来ることとはないのだと、理解し始めた証左だ。

「イ…カハっ、ひ…♡ は…っ、はあー…♡」

ベッドに倒れ込み、ぶるん、と尻をびくつかせて絶頂の余韻に浸る。四ノ宮の目

からは、またしても大粒の涙があふれていた。

「……なんだ、泣いてるのか？」

「ひぐ……っ、うそ、だよ……。やだあつ、ひっぐ……っなんで、なんでえ……っ？」

なんで、どうして。どうして、自分がこんな目に。思いもしなかったに違いな
い。自分がまさかこんな目に遭うなどと。カースト最下位の俺にいいように弄ば
れ、犯され———挙句、何度もイカされるなど。

「あた、あたし……最初は好きな人として想ってたのに……っ」

考えもしなかったに違いない。疑いも臆面もなく、普通の未来を歩めると思って
いたのだから。そこそこに好きな人と出会い、いずれ結ばれ、働くにせよ子を生む
にせよ、人並みの幸せを手に入れられると思っていたのだから。

残念だったな。四ノ宮。もうお前は俺のペットになる以外の人生など有り得ない
んだよ。自我を根っこから奪い取り、尊厳を徹底的に踏み躪る。こいつが考えてい

た権利も人並みの幸せも踏み潰し、捻り伏せ、屈服させる。

これこそ『愉悦』だ。

「ひどい……ひどいよ……っ。サイアク……つぐず……っ」

もはや俺を見ることもなく、ただ泣きじゃくる。そこに居るのは、輝かしいクラスカースト一位の女ではない。惨めで、無様で、無力な一匹の雌犬だ。

「フフ……まあそう泣くな。ほら、『本当の自分を思い出せ』」

「……あ……♡」

優しい俺が、もう一押ししてやるとしよう。

泣いて、許しを乞うて、自暴自棄を起こしても、逃がしてもらえない。『四ノ宮アスカ』の存在も、人生さえ俺の手のひらの上だと認識させねばならない。

またしてもペット状態に墮とされた女が、恭しく俺をベッドに横たえる。そのまま自らが足を開いて跨り、未だ勃起したままのモノに手を添え、狙いを定める。下から眺める乳が、腰に感じる尻肉が、鈴口を擦る愛液が、どれも灼熱の快樂へと誘う。

———圧巻の騎乗位が始まった。杭打ちという言葉がぴったりの、大きく、深いピストンで俺を膣肉の中に飲み込む。

「ご主人様……♡ ちゃんと見えてる？ あたしのおまんこに、ご主人様のちんぽが挿入ってるの……♡ こうやってグリグリした、り……あん……♡ 身体を持ち上げて……え……♡ 一気に落と、すっ……♡ イ……ッ！！？ひ……っ！？！」

どすん、と、自らの体重をかけたセックスに、瞬時意識が飛んだらしい。息を引き攣らせ、首をガクンと折ったまま絶頂する。

「……えへ……また、イツちゃっ……たあ……♡」

「……それは良かったな。よおし、次の命令だ」

さて、宴もたけなわだ。そろそろファイナーレと行こうじゃないか。最後は俺が最も興奮する……同時に女にとっては屈辱的なポーズで、セックスをしよう。

「え？まんぐり返しで媚びてみる……？自分でまんこ開いて誘ってみる……はあい♪
ご主人様の命令はゼツタイ、だもんね……♪じゃあ、ちよつと待ってね……♡ん、しよ……あ……♡」

卑猥な俺の命令も、催眠ペットにとっては喜ばしい『最優先目標』に変わってしまふ。挿入をやめてベッドに寝転がり、女体の柔らかさを感じさせる芸術的なまんぐり返しを披露する。

「……はい♪ いっぱい見て？ご主人様専用のハメ穴、精液コキ捨てるば・しよ♡
さつき出された分じゃまだぜんぜん足りないの。もっと好きナだけ突いて、壊れるくらい犯してくれる？」

涙に濡れた笑顔で、腫れた乳首を誇示しながら、自分の股間にある前後の穴を見せつける。潮も、愛液も、精液も、汗もあらゆるものが混ざり合った液体を溢れさせ、自らを卑しいハメ穴に貶めていく。

「ほーら、また挿れちゃお♡ ご主人様専用催眠ペットのザーメントイレで気持ちよくなって、おしゃせーしちやお♪……………ん、んはああ♡♡♡」

正直に言って、俺も限界だ。まんぐり返しの女の両脚を掴み、もはや今日何度目かわからない結合を始めた。

「また直ぐにイキそうだな……………！」

「おっ。やっぱゴレ……………ッ深くて気持ちいいトコ、当たって♡♡ あ♡ あ♡ あっ♡♡♡ん、またすぐイク、イク、イクから、イクのっ♡♡ イク……………ッ！！」

「俺ももうイク。お前も準備しろ……………！」

何度も何度も何度も何度も何度も——………時計の長針がぐるりと一周する頃には、四ノ宮は正気に戻しても俺を「ご主人様」と呼び、ちんぽを求めてイキ狂うまでになっていた。

「あはっ…あははははっ…ハハハハはは♡♡ あははっ♡ きもちー♡ きもちいの♡♡♡ ご主人様サイコー♡♡ あんだのちんぽしゅごいの♡♡ カッコいい♡♡♡ カッコイイ♡♡♡」

「そうか。俺のちんぽはすごいか。だったらイケ！」

「あたしを犯してるご主人様すごくカッコいい、よお♡♡ イグっ♡♡ イグ、イギ続けてりゅ♡♡ もっ♡♡ ムリらっればあ♡♡♡」

催眠で感度を上げ、絶頂から降りられなくし、気絶もできなくした。ペットとして調教し、犯し尽くした。これで、とどめだ。

「ほらアスカ—— 『本当の自分を思い出せ』」

「…っ♡♡ ごしゅじんさまっごしゅ、じんさまあっ♡♡ 好き、だいすき、イグ、っ、あ、イグのっ♡♡ も、もうわかんにゃ♡♡ わかんにゃい♡♡ ずっとイギっ、イギっ

づけてるの♡ あは、あははは♡もういい♡もうなんらっれいいの♡♡ごしゅじん
しゃま♡ごしゅじんしゃまああ♡♡あたしのコトコワシテ♡♡ぶつつぶして♡♡
好きなだけ催眠れ操っれ♡ アスガをエロ催眠ペットにして飼っれください♡♡あ
♡ア♡イグいぐいぐいぐイグ、イっ……グうううううう……!!
♡♡」

壁を劈く絶叫。もしかしたら隣に響いたかも知れない。あらんかぎりの絶叫をお見舞いしたアスカが、最高のエクスタシーに酔い、沈み、圧壊する。

俺の精液を受け止め続けた膣から大量の尿を漏らし、涎と汗まみれの肢体を激しくうねらせる。

「は……♡ あ……♡♡ あ……♡ んん……♡♡」

そして、女は犯された姿勢のまま前方へ倒れ込んだ。尻を高く突き上げ這いつくばり、膣口から大量の体液を垂らしたまま動かない。

四ノ宮アスカの威光は消え失せた。こいつはもうただの生体オナホ、性欲処理用肉便器だ。

「アスカ……『目を覚ませ』」

そして、仕上げる。俺が作り出したおもちゃ。俺だけのペットの誕生だ。

「んあっ!?!?……えっと、……あれ……?」

息は切れ、肩を大きく上下させ、それでもなお目は爛々と輝く。全身は体液で汚れ、足は自らの失禁した水溜りで匂い立つ凄惨さにも————嬉しそうにその身をくねらせた。

「あたし……あたし……ん……♡ あたし、もう……っ♡」

そして、遂にその時が来た。

「あは、はは…っ、ははははっ…♡」

隠すものがない滑らかな腹を押さえて、ケタケタと笑う。犯され、穢され、気が触れたような表情で。だが、そこにもう、俺への敵意は一切ない。

「うん…：…なんか、わかつちやったあ…♡ あたし、もうとつくに堕ちてたんだって…♡」

「…：…：…：…：…」

「やだー、とか言いながら、ホントはずーっと、あんたに犯してもらえるの待ってたんだなーって…：…催眠で操られて、イっちゃいたくて…：…」

じり、と脚を摺りながらにじり寄り、俺と膝立ちで相對する。

「ね…：…？こっち向いて？ちゃんと顔、みせて…：…♡」

両手で顔を掴まれた——鼻先が触れるほどの距離で、最高の美女が頷き、微笑む。

「…なあんだ、よく見たらかわいいし、カッコイイ顔してるじゃん…♡ん…♡ん…♡ん…♡ん…♡んっ…♡」

バードキス。相手を慈しむように優しく、親密な者同士がするキスを四ノ宮——否、俺だけの催眠ペットであるアスカがお見舞いする。

「アスカ…」

「あ…あたしので、あんたの…ご主人様のちんぽ汚しちゃった…お掃除…するね…♡」

俺は何も命じていない。だが、まだ半勃ちで留まるソレを見て、アスカは自発的に顔を低くし、舌を出して舐め始める。

「ちゅぷ…んん…、ぢゅぶ、ぴちゃ…れう…ちゅぱ、んぐ、んぶつ、んつ、ん…
♡」

「アスカ……っ」

「……♡」

『目を覚ませ』……四ノ宮アスカに与えた『正気に戻す』ための暗示。俺は確かに言った。だから今、俺の目の前で、愛おしげに俺のモノに舌を這わせる女は、本来の人格のまま、フェラチオに励んでいることになる。その事実が、またしても俺の魂を震わせた。

「アスカ……そこで土下座してみろ。俺に服従すると意思表示するんだ」

「ぢゅる…んん、ふん…っ…ん…服従の土下座…？ はあい…♡」

四ノ宮アスカは、躊躇わない。ほんの一瞬たりとも迷わない。

ちゅぽん、と音を立ててフェラをやめるや否や、その場ですぐさま頭を下げ、床に擦り付ける。それは、紛れもなく屈服の印だった。

「：あたしは：四ノ宮アスカは：：ご主人様の催眠ペットです：：っ♡」

「：：お前はどんな存在になったんだ？」

「あたしの身体はご主人様専用の：フリーセックスオナホールです：♡ おっぱいでも、髪の毛でも、お尻でもおまんこでも、どこでも自由に使ってください：♡」

土下座、隷従の宣誓：：自らの肉体をも差し出す。人間が堕ちる瞬間を、俺は目の当たりにしている。

「それがお前の望みか？」

「はい：！あたしがそうして欲しいんです：！大好きな：かっこいいご主人様にセックスしてほしいくて：催眠で操ってほしいくて：：♡」

「だが、お前は随分俺に反抗的だったじゃないか」

「酷いこと言った分、心を入れ替えてがんばります：♡ ご主人様に尽くします：っ

♡」

額の皮が擦りむけるのではないかと心配になるほど、アスカが勢いよく土下座する。気持ちのこもった、心の底から敬意を表した所作。そして——突如、何かおかしいのやら、アスカは吹き出した。

「…にひひ…っ♡ 土下座、しちゃった…♡ 誰かに土下座したの、初めて…♡ ご主人様なら、あのままアタマ踏んづけてくれてもよかったのに…♡ 優しい…♡」

…もしかすると、こいつは本質的にマゾヒストだったのかも知れない。あるいは、そんな素質が芽生えるほど、今回の出来事が堪えたか。

「お前が今みたいにお利口にしてれば、また気持ちよくしてやる。ほら、今度はキスしてみせろ」

「ん…ちゅぷ♡ ご主人様…♪ だいすきだよ、あたし、ご主人様のことがいすき…♡」

何はともあれ、これでもうアスカが俺に反抗的な態度をとることは二度とないだろう。催眠状態であってもなくても、俺を主人と敬い、俺に服従することを自ら誓った。これからは俺のオナホとして、あるいは使い勝手のいい駒として動いてくれるに違いない。

「これからはどんな恥ずかしいことでも、ちゃあんと言うこと聞くから……アスカのこと……好き放題に犯してください……♡」

書き下ろし幕間

アスカ編

自分で言うのもなんだけれど、あたしは超絶カワイイ。ぶりっ子はニガテだから、どっちかといえれば同性ウケするタイプの可愛さだけど。ちな、男子にもモテるけど、それは割とどーでもいい。

とにかく、そのおかげで、みんなあたしをチャホヤしてくれるし、あたしだってまんざらでもないから受け入れてる。セクンター？しよせーじゅつ？わかんないけど、そーするのが賢いって分かってるから。

毎日てきとーでいいじゃん。楽しかったらそれでいいじゃん。ムズカシイこと考えてもなるようにしかならないし。

だから人並みに進学して、就職して、誰かと結婚したりすんのかなー、とか。漠然と思ってた。

そう。思ってた。

『これからはどんな恥ずかしいことでも、ちゃあんと言うこと聞くから……アスカのこと……好き放題に犯してください……♡』

ある日、その日常が壊れた。同じクラスにいた『ご主人様』が、あたしを怪しげな催眠アプリで操って、嫌がるあたしと無理やりセックスした。

考えなくてもわかる。あれレイプだし。あたし、別に許可してなかったし。

ご主人様は目立たないし、なんか暗いし、いかにもモブキャラって感じで、正直、操られるまでは認識すらしてなかった。

はつきり言ってハズい。自分、マジで見る目ない。

あんなにステキでカッコいいご主人様に操ってもらえるとか、考えなくてもサイコーじゃん。ご主人様の好きなようにココロもカラダも弄られて、エロいこといっぱいさせられて。

初めて操られた時はワケわかんなかったけど、ご主人様に完璧に操られてる今なら、それがあたしにとって一番嬉しいことだって思えるようになった。

ご主人様ヤバイ。マジですごい。人の考え方をムリヤリ捻じ曲げて、自分に都合のいいセックス奴隷にするとか、超イカしてる。さすがご主人様。

あたしみたいなのヒトメスを犯してハメ撮りしてくれるし、いっぱいエロいこと教えてくれるし。この前はペットにしてもらった記念に放課後の女子トイレで気絶するまで犯してもらった。ガチでコーションしたし、あれならまたしたいなーって♡

「アスカ、俺の前で小便してみろよ」

ご主人様があたしにおしっこするようにな命じてきた。もち、従うし。

「はーい♡ 四ノ宮アスカ、今からご主人様に見られながらおしっこしまーす♡」

あーもう。ホントやばいって。ご主人様があたしで興奮してくれてる。あたしのエロい身体が役に立ってる。それだけで、心がキュンと切なくなる。もっとご主人様に命令してほしい。もっとあたしのココロを操ってほしい。身体を使ってほしい。あたしをご主人様のえっちの道具みたいに扱ってほしい。

「……んっ♡ ぜんぶ……でた……♡ ちゃんと、見てくれてた……？」

あたしはご主人様の前でだらしなくお漏らしして、イッた。

「ご主人様……あ、んん……♡ あたしを生まれ変わらせてありがとう♡ いやらしいコトでコーフンできるペットにしてくれてありがとう。ご主人様だいすき。エロいこといっぱいしてくれるご主人様がだいすき♡ これ、ホンキだから……んっ……ちゅば……っ♡」

「なあアスカ。俺が他の女とセックスしたいって言ったらどう思う？」

「え……っ？他の子と……マジ……？♡ それ最っ高♡ 超カッコいい！♡ ご主人様、あたしに何かできることあれば言ってね！あたし、全力で手伝うしっ♡ 盗撮でも、騙して連れてくるのでも、何でもするから……っ」

何もおかしくない。フツーに考えて、女はご主人様に操られてペットになるべきじゃん？特にご主人様の好みの子は、ご主人様の催眠オナホペットになって、ご主人様専用のちんぽしゃぶり女に変えてもらうべき。世界変わるし。すくなくとも、あたしの日常は完全に変わった。

いつもあたしに話しかけてくるあの子とか、あたしに憧れてるらしいギャル友とか、そーゆー子達を性的な目で見るといった。

「あ、この子おっぱいでかいなー。ご主人様のダッチワイフにしたら喜んでくれるかなー」とか「このコの処女、ご主人様に捧げたら喜んでくれるかなー」とか。

もちろん、あたしがそうだから。あたしの全身はご主人様のモノで、あたしはご主人様に飼われるペットだから。いつでもご主人様の命令に答えられるよう、エロ

いこと考えて、アソコが濡れるようにしてる。お風呂で、トイレで、夜中のマンションの廊下で、こっそりする全裸オナニーは最近のハマリ。

「ご主人様あ…♡ さっきの授業中、ちんぽ勃ってたっしょ？♡ ほら、トイレ行こ？あたしがヌイたげる♡」

授業中はご主人様のアソコが勃ってないか、ちらちら確認。もちろん、ワザとご主人様に見えるようにパンチラしてたあたしが悪いから、責任持って犯してもらう。あたしの魅力でご主人様のちんぽイライラしてくれたら嬉しい。それを性処理ザーメンこき捨てオナホまんこのあたしにぶつけてくれたら最高すぎ。

ううん。恋するってこーゆーことなのかなー。ご主人様の催眠ペットになってなきゃ、こんな気持ちを知ることもなかったんだって思えば、ますますご主人様がかっこよく思えてくる。

だから。

だから——しおりんにも教えてあげなくちゃ。

「待っててね、しおりん。しおりんもあたしと同じ、ご主人様の催眠ペットにしてあげるカラ……♡」

そうして、あたしはご主人様と一緒にしおりん——三澤シオリを嵌める方法を考え始めた。

四、生徒会長シオりに催眠導入♪性欲処理は生徒会のおしごと♪

それからの四ノ宮アスカは『別人』だった。日中はクラスのアイドル人者であり、俺と別世界に生きる人間として。だが実際は、ひとたび命令を受ければ、いかに破廉恥な指示でも喜んで従う俺だけのエロギヤルだ。

性処理ペットの扱いに喜びを見出し、「ご主人様」と呼んで俺を敬う。ためしに女子更衣室の盗撮を命じたところ、何の迷いもなく従う姿を見て、俺はいよいよ笑うのを止められなかった。

仲のいい友人と話している最中でも、トイレに呼び出せばいそいそと抜け出し、イラマチオを披露する。バイブを挿れたまま体育の授業を受けさせ、公共施設で露出を命じ、限界まで尿意を我慢させたうえで野外放尿——いやらしい命令であればあるほど頬を染めて喜び、またそんな命令をする俺を「カッコいい」「最高」と讚える。

(ご主人様♡ はいコレ、クラスのみんなが着替えてる時の隠し撮りの写真!もつとアップで盗撮してほしい子がいたらあたしに言ってね?♡)
(ご主人様今日もちんぽガチガチ♡ にひひっ、やっぱ昼ごはんのあとはちんぽだよねえ…♡ おいしいデザート、いったただっきまーふ……んっ♡)

俺達は陰で繋がり、淫靡の限りを尽くす。そうして暫くが経った頃、俺はついに次の段階に行くために行動に出た。

「やっほー♪しおりん、今日もお疲れい!」

「やあ。お疲れ様。アスカは部活上がりかな?」

軽やかな声が教室の中を転がっていく。弾む声に、文庫本に目を落としていた生徒会長、三澤シオリが顔を上げて微笑む。

「正解♪ ずっと幽霊部員してたら顧問に怒られちゃってさー。逃げてきたトコ。っでさー、しおりんって今日これから時間ある?」

以前からほとんど部活に出ていないアスカだったが、最近は輪をかけて休んでいる。もっぱら、俺が放課後に性奉仕を命じているせいだが、そこまで気付いた人間は居ないらしい。

あくまで普段と変わらぬ様子のアスカに、三澤が肩をすくめて応じた。

「この後？…特に予定はないよ。何か用事かな？」

「うん、ちょーつとあたしに付き合っしてほしいなって。行ってみたい所があるんだー。ほら、そうと決まれば、行こ？♡」

「ちょ、ちょっと待ってくれ。まだ支度が…」

いつもと変わらず、だがいつもより少しだけ強引な親友の誘いに、いささか困惑気味に帰り支度を始める。アスカはその僅かな時間もじれったそうに身体をゆすり、三澤を急かした。

「んもー、急いで。——…：…：…：…あんまりご主人様を長く待たせちゃダメだから

…：…：…♡」

最後の呟きは、耳を澄ましていなければ聞こえないほど小さく、暗い。親友の無機質な瞳に気付くことなく、華の生徒会長は教室を後にした。

校舎が新調されたのは、今から五年以上も前のことだそうだ。以来、旧校舎は、行事に使われる時を除けば、人の立ち入りもめつきり無くなった。生徒の立入も禁止されており、教員ですら用事なく入ってくることはない。つまり——俺にとっては非常に好都合だった。二人に先回りして、誰にも使われなくなった教室へ忍び込む。

「ここだよー。入って入って♡」

「ここって……どうして旧校舎なんか……」

姦しい声が近づいて来る。最低限の保守清掃だけがされた校舎はすっかりと静まり返り、二人の声を響かせている。

(命令通りだな)

俺は、ほくそ笑んだ。

——アスカ。旧校舎二階奥の教室に三澤を連れてこい。そこで奴に催眠をかける。

——はい、りょーかい♡にひひっ、ご主人様の催眠見れるの、たのしみ！

——お前、奴に悪い事をしてるとは思わないのか？俺が言うのもなんだが、俺はお前の親友を犯そうとしてるんだぞ？

——そんなの、超サイコーじゃん♡しおりんもちんぽの良さを知れば、絶対ご主人様のペットになりたがるし……むしろ、イイコトづくめってカンジ？♡

今のアスカにとって、俺に犯されるのはどんなスイーツやプレゼントよりも嬉しい『ご褒美』だ。

「一般常識で考えれば、女と無理やりセックスするのは犯罪と思わないか？」と重ねて聞いてなお、アスカは俺の質問に笑ってみせた。

——そのためにご主人様のサイミン？があるんじゃない？
子なんか、それで操ればよくない？ 一番ダイジなのはご主人様が気持ちよくセックスできるかだし。ご主人様もあたし一人だと退屈するカモだし、犯せるおまんこは多い方がいいでしょ？♡

——あたし、しおりんは結構抱き心地いいと思うんだよねー。あたしに似ておっぱい大きいし、お尻だってイイ感じじゃん？♡ あ、ご主人様はお尻もスキ？今度、クラスのお尻の大きい女の子、リストアップして送ったげよっか？

——と、ゆーワケでえ。しおりんのこと、あたしみたいなちんぽ大好きの子にして、ご主人様専用のちんぽしゃぶり女にしてあげて？♡ しおりんもぜーったい喜ぶし、ご主人様のちんぽ大好きになるから♡

そこに良心の呵責や催眠に対する恐怖心といったものは無いらしい。人間、変われば変わるものだ。昏い忍び笑いを漏らしながら、二人がやってくるのを待ち伏せる。

「ちよつと中に気になるもの見つけてさー。しおりんは生徒会長だし、先生に言う前に相談？って感じ」

「一体ここに何が……」

がらがら、と。油が切れて滑りの悪くなった扉が引かれ、いよいよ二人の美女が現れる。一人はびくりと肩を震わせて、もう一人は楽しげに手を振り、俺を見た。

「……っ！？……君は確か……アスカのクラスメイトだったね。先日はすまなかつた。だけど、どうして君がここに……？」

「ああ、三澤さん。来てくれたんだ。ありがとう」

たじろぐ生徒会長の問いを無視し、軽く首だけを曲げて礼を言う。どちらかといえば、おざなりで不躰な応対に、三澤シオリの警戒度合いが一段階上がるのを感じた。

（聡いな。だが……ここまで来た時点で詰んでるんだよ、生徒会長さん）

「ここは旧校舎だ。私が言えた義理ではないが、生徒の立ち入りは禁止……」

——ガチャリ。

鍵を閉める音がセリフを遮り、気丈な生徒会長の顔に緊張が走る。誰の仕業かなど考えるべくもない。自らを連れてきた大親友がひとり、四ノ宮アスカその人なのだから。

アスカが軽快にステップを踏み、三澤を追い越す。小さな埃が舞う部屋の中、夕陽を浴びた金色の髪が跳ねる。女は窓際まで小気味のいい足音を立てると、俺の隣に立ち、その巨乳に俺の左腕を挟み込んだ。

「にひひ……♡ごしゅじんさまあ、これでいいですかあ？あたい、ちゃあんとしおりんをここに連れてきましたあ♡」

ああ——愉快的。ドツキリにしては低俗で、サプライズにしても笑えない。

アスカと俺のやりとり^衝を見ていた会長だからこそ効く。常に自由で、なびかず、憧れられていた女が、学園最下層のモブキャラに傳く姿。

「ア、アスカ……？ 一体何を……？」

「何って……ナニが？」

困惑する会長を前に、アスカがニヤニヤと笑いながらすつとぼける。まったく意味がわからない、といった様相だ。

「アスカ……何かあったのか？ その……その生徒と……」

「ナニかは……まあ色々あってねー。あたし、この人のこと誤解してたんだー」

「誤解……？」

「口で説明するより、見せたほうが早いかなー。こういうこと……ちゅっ♡」

腕に抱きつく巨乳美女が、俺の頬にキスをする。耳たぶを何度も甘噛みし、嬉しげに目を細める。露骨なスキンシップに三澤は驚愕し、いよいよ狼狽した。

「な、ななっ」

なぜ、どうして。そう言いたくもなる。アスカのおふざけは度を越している。半勃起した俺のモノをズボンの上から撫でつけ、まさぐり、まるでセックス前の前戯だ。昼夜を問わず性奉仕をさせたアスカのそれは、いやに慣れた手つきであり、幾度となく経験があることを三澤に暗示する。

「あたしねー。この人……ご主人様のペットにしてもらったの♪この人に飼われてるんだ♡　でさ、毎日休み時間とか放課後にエロいこと教えてもらって、今日もおっぱいだけでイけるように朝から調教してもらってたの♡」

「ア、アス、カ……？」

これは、いよいよおかしい。アスカが出任せを言っているように見えないのが、一層不気味に映る。毛嫌いしていた男に抱きつき、あまつさえ『飼われてる』など、冗談でも言う言葉ではない。戸惑う友人を前に、アスカの悪ノリは更に増す。

「だけどね。ご主人様があたしだけじゃなくて、しおりんのことも犯したいっていうから、……しおりんのこと騙して連れてきちゃった♪」

「論より証拠だ。アスカ、脱いでみるよ。俺のためにな」

「……っ♡」

ほどかれたリボンが指先でもつれて、机の上へ。手際よくボタンを外し、スカートも躊躇なく脱ぎ下ろす。際どい角度を攻めたビビッドカラーのショーツが、目に眩しい。男の俺がいるその真横で、女子更衣室のような気軽さで脱衣を始めたアスカがフロントホックに手をかけようとした瞬間、我に返った三澤が焦った声を上げた。

「ちょ、ちょっと……何言ってるんだ……なんで急に……」

「ほらほら、早くあたしみたいに脱ぎなよー♪ご主人様がちんぽばきばきにしてるのに、脱がないとかないっしょ？」

アスカは、止まらない。ブラジャーが抑え込んでいた美巨乳が、ホックが外れると同時に大きく揺れる。いよいよ、本来誰に見せるべきでもないモノが外気に晒され、ぴんと張り詰めた乳首があらわになった。

生徒会長が飛びかかり、肩を掴む。俺からその素肌を隠すように、親友の凶行を阻止しようとする。

「な、ななっ、何をしているんだアスカ！破廉恥なことはやめないか！」

「はあ、そのハレンチなことするためにここに来たんじゃない。大丈夫だって、ご主人様ならちゃあんとしおりんのコトも気持ちよくしてくれるから♪ぐちよぐちよに犯されて、ご主人様に従うことしか考えられないペットにしてくれるか、ら…っ！♡」

———だが。

(フフ…：悪かったな。そいつはもう俺の忠実なペットなんだよ)

自ら近づいてきた三澤を跳ね除けたが同時、アスカが返す刀で抱きつく。羽交締めよろしく両腕ごと抑えられた女は、反撃を予想していなかっただろう、親友の力ウンターに目を丸くする。

「な：離して……離さないかっ」

はたしてその拘束から抜けられる筈もない。催眠によって操られているアスカは、その見た目以上の『全力』を出せるように調整してある。万力のごとく、ギリギリと音を立てて締め付ける全裸の親友に、会長はいよいよ青褪めた。さて、茶番はもういいだろう。

「三澤シオリ。お前も俺の催眠ペットにしてやるよ。親友と同じようにな」

動けない会長の顔にスマホの画面を押し付け、アプリを作動させる。光が、音が三澤シオリの意識を捉え、無我の境地へとさそう。

「あ……う……あ……っ」

このアプリは、即効性の毒と同じだ。ものの数十秒でもがく力も失せ、理知的だった瞳から光が失われていく。その様子を、アスカは楽しそうに眺めたまま助けようともしない。

「……っ」

「……落ちたか」

「へえ、……そうやって催眠状態にしてたんですねえ。あたしのこともお、それで操ってくれたんですか？……にひひっ♡ あたし、ご主人様の催眠ペットになれて嬉しい♡」

羽交い締めをやめたアスカが、ぼうつと前方を眺める生徒会長を興味深そうに凝視する。目の前で手をひらひらと動かそうが、素っ裸のアスカがわざとらしく大股を開いて見せようが、まるで反応がない。どうやらすっかり、催眠状態へと落ちたようだった。

「：それで、これからどうするの、ご主人様？あたしの時みたいに犯したり、催眠を解いたりして絶望させる？それとも、彼氏だと思わせて自分から処女をご主人様にあげる暗示にする：？」

「ああ、それだがな。：：：アスカ、耳を貸せ」

三澤シオリの料理方法は、ほとんど決めてある。

有望で聡明たる生徒会長に相応しいやり方で、貶めてやることにしよう。

「：：：：はい♡ ご主人様の仰せのままに：：：♡」

俺の計画を聞いたペットが、口の端を限界まで持ち上げる。自らの大親友を狂わせる悪事を耳打ちされ、ぶると興奮に身を躍らせた。

「しおりん、今の気持ちいい状態のまま、よく聞いてね：：：」

三澤シオリ、お前もせいぜい楽しませてくれ。

堕ちた姿に妄想を迸らせる俺の前で、アスカはてきぱきと暗示を仕込むのだった。

「……りん………しーおーりん……！」

椅子に座らされた女が肩を揺さぶられている。『隙のない女』と渾名され、羨望や嫉妬の声を浴びる女の無防備な姿。ただ微睡んでいるだけでも絵になるのは、さすが美人といったところか。三澤は、親友の声にぴくりと眉を動かした。

「ん………っ」

「ほら起きて。起きてってば」

「ん、あ……れ……」

……うつすらと開いた目はすぐに栗ほどの大きさになり、辺りを見渡す。

授業中はおろか、休み時間にさえ仮眠をしたことのない生真面目な生徒会長の、よもやのうたた寝だ。顎に手を当て、気まずそうに目を瞬かせると、やがて会長は力なく眉を下げた。

「すまない。寝てしまっていたらしい」

「ホントだよー。いきなりふらーっとして寝ちやうんだもん。だいじょうぶ？ 疲れてんじゃない？」

心配そうな声色で気遣うアスカが、しかし目だけはこちらを見てにやりと笑う。「暗示はうまくいった」と暗に伝える仕草に、二人だけで通じ合い、ほくそ笑む。

「ううん……。そんなに根を詰めすぎていただろうか」

「だから生徒会の仕事なんて適当でいいんだってー。しおりん一人休んで回らなくなるなら、そもそもしおりんに任せすぎってことじゃん」

「む：それを言われると否定できない……。それで、一体何の話をしていたかな」

つい先刻、あれ程警戒していた俺の存在もまるで気にしていない。指先でくるくると髪を弄ぶ会長の背後に回り込み、頭を撫でつける。指先にまわりつく金木犀のフレグランスが鼻の奥へと抜けていく。それでもなお、会長はぼんやりと座ったままだった。

「もー。忘れちゃったの？今日はあ、『自分が催眠にかけられることに気づかないバカな生徒会長が、無自覚でえろーい自己紹介ビデオを録る日』っしょ？」

——催眠のトリガーが発動する。特徴的な切れ長の瞳が虚ろになり、美しい睫毛が不安げに揺れる。アスカに命じて与えさせた暗示は、三つだった。

『俺のする事を気にせず、何をされても不快には思わない』

『アスカの言葉はすべて疑いなく受け入れる』

そして——あとはお楽しみだ。

「あ……っ。そ、そうだったな……。確か、生徒会広報の一貫で、ビデオの撮影をしないといけないんだっただか」

「うん♪あたし、しおりんにお手伝いを頼まれてここに来てるんだから。ほらほら、もうカメラは用意してあるから、そこに座って♡」

「ああ」

教卓前にわざとらしく置かれた椅子へと座り直し、三澤が姿勢よく前方を見つめる。傍目には暗示に掛かっていると思えない、真剣な表情だ。手際よく三脚をスマホに取り付ける親友の指示に従い、静かに準備をする。画面の中央に映る被写体に焦点が合ったことを確認すると、アスカはぐつと親指を上げた。

(……さて、では楽しませてもらうぞ)

「……うん、じゃあ準備いい？もう喋る内容は決まった？」

「ああ。いつでも大丈夫だ」

「じゃあ、いくよー。3，2，1：きゅー」

軽やかな電子音とともに録画が始まる。まるで初めて生徒会選挙に登壇した時のように、三澤は大きく息を吸い込んだ。

「はじめまして。生徒会長の三澤シオリだ。今日は、生徒会の仕事と私の抱負について簡単に述べられたらと思う」

美しい声だ。聞き取りやすく、どこまでもまっすぐに伸びる声が、スマホのメモリに収録されていく。俺がその背後で三澤の胸へと手を伸ばし、無遠慮に服越しに膨らみを掴んでも、三澤の表情が崩れることはない。嫌がるどころか、少し脇を開けて、俺が胸を揉みやすいように姿勢を変える。

一つ目の暗示——『俺のする事を気にせず、何をされても不快には思わない』がきちんと発動している証拠だ。

「まず、生徒会の一番の仕事だが……ご主人様の性欲処理だ」

全校生徒に聞かせる時と同じように、どこまでも真面目に、会長が言葉を紡ぐ。常軌を逸した言動にも関わらず、ふざけている訳でもなければ恥ずかしがっている様子もない。今、三澤シオリはそれこそが『生徒会の仕事』だと、心から信じ込んでいる。

「これは校則や法律よりもっと大事な、生徒会の使命とっていい。さつきから：んっ♡ 私のおっぱいを揉んでいる彼の性欲を処理することを、何よりも一番優先している。授業や休み時間、放課後の別なく、彼が性欲を催した時はすべてを差し置いて彼のもとにかけつけ、彼に性的なご奉仕をする。これを忘れないでほしい」

胸のボタンを外し、大きな胸を持ち上げて外へ放り出す。アスカほどではないが、十分すぎるほどの巨乳だ。カメラの向こう側にいるアスカがにやりと笑い、目を細める。

「肝心の内容だが：あん：っ♡ 一番はやはり、セックスだろう。正常位や後背位、騎乗位といったメジャーな体位はもちろん、彼がのぞめば駅弁スタイルで犯されることもある。他にもフェラチオ、パイズリ：：は私くらいのおっぱいの大きさがある：んっ♡生徒会員のみだが、とにかく、彼の性欲を正しく発散するため、私は常に彼の性欲を刺激し、そして解消する崇高な使命を負っている：はああ：っ♡」

乳白色のブラジャーの下に指を差し込む。指先に伝わる弾力だけで爆ぜてしまいそうだ。暴力的でハリのあるおっぱいと、その先にある小さな突起を無遠慮に捏ね回す。その痴態の全てが、メモリに収められていく。

「：：ふふ。などと言ってきたが、実は私もセックスの経験はないんだ。明日、彼とはじめてのセックスをする予定で、そこで彼に私の処女を捧げるつもりでね。彼も、私を催眠ペットとして犯してくれるらしい。実は今からとても期待している」

どうやら、三澤にはまだセックスの経験がないという。ならばアスカと同様、自分から進んで俺に処女を捧げさせ、弄ぶよりないだろう。責任感の強い会長であればこそ、『仕事』は精一杯にこなそうとするはずだ。

「性処理催眠ペットは責任も大きく、大変な仕事だが、とてもやりがいのある仕事だ。私の抱負は……そうだな。これから彼に何度も犯されるうちに、催眠ペットとしての自覚をより深く頭に刻み込んでもらって、どうしようもなくド変態のどすけべ生徒会長になることだ。彼が望めばセックスでも、オナニーショーでも、野外露出でも、どんなことでも誇りを持って遂行する、最高で最低のエロペットになるのが私の夢だ。もちろん、これには皆の協力もなくてはならない。私が……三澤シオリが彼の催眠ペットになった暁には、またなにか皆に還元できるよう取り計らおう。……こんなものでいいかな、アスカ」

「うん、ばっちし。いい感じに録れてたよー。……クス♡」

散々な痴態を晒したビデオの撮影が終わる。自らを貶める淫語を並べ立て、嬉々として俺への性奉仕の素晴らしさを語る生徒会長の演説は、なかなか感動的だっ

た。いつか全校放送してもいいかも知れない。達成感を覚えた表情で頭を下げる姿に、撮影役の女は肩を震わせながら撮影の終了を告げた。

「さて、では私は明日の準備もあるし、そろそろ帰ろうと思うが：アスカはどうする？」

「あたしはこのあと、ご主人様とセックスしてから帰るから、しおりんは先に帰っていいよ。あっ、お家に帰ったらオナニーするの忘れちゃだめだよー」

「もちろんだ。立派な催眠ペットになれるよう、時間の許す限りオナニーをしよう。それじゃあアスカ、また明日」

「うん、ばいばーい♡…♡」

鞆を持ち、三澤が颯爽と旧校舎を後にする。

『生徒会の仕事はご主人様への性奉仕。自分は思いつく限りの淫語でその内容と素晴らしさを語り、宣伝しなければならぬ』——最後の暗示も、バッチリとハマっていた。

自分が何を言っているのか正しく認識できないまま、校門を出ていく姿に、いよいよ耐えかねたアスカが崩れ落ちた。

「…ぷっ、っ♡くく…あははははっ♡ ひーっ♡ はひっ…♡もーご主人様、おなか、いたいってばあ♡」

「フフ…おい、笑ってやるな。『友達』に失礼だろ」

腹を押さえ、俺の手を掴んで笑い転げるアスカにつられてしまう。笑みには悪意が滲み出しており、先程撮影したばかりの動画を再生しては失笑する。『楽しい』ことを『楽しめる』今のアスカにとって、さっきの寸劇はよほど『ツボ』に入っらしい。

「ぷっ…♡ てか、聞いた？生徒会の一番の仕事はご主人様の性欲処理だって…♡ しおりんにそんなこと言わせるとか、ご主人様趣味ワルくない？もー……そんなところがないすぎ、だよ…♡」

小悪魔と天使が混在した、蠱惑の微笑みでアスカがキスを求めてくる。仕掛けは万全、細工も流流、あとは仕上げをご覧じろ、だ。

「ちゅ…ん…♡ねえご主人様、しおりんのこと、絶対ペットにして犯してあげてね…♡」

約束された——三澤シオリにとっては最悪の未来に思いを馳せながら、俺達はまたしてもセックスした。

五、【一日目】生徒会室で処女喪失&エロハメ録り♪

『ご主人様今日もメツチャイカせてくれてありがと♪ ご主人様のペットになってから毎日楽しいし♡ ってか、もーご主人様眺めてるだけで毎日幸せーって感じ♪』

夜。見るテレビ番組もなく、だらだらとしていた俺のスマホに一通のメツセージが飛び込んできた。シオリを帰らせた後、アスカに性処理を命じたことを言っているのだろう。

蹲踞の姿勢で俺に股間を串刺しにされ、巨大な乳房を揺らす。お掃除フェラも、ハメ撮りも、騎乗位も、俺の望むまま甲斐甲斐しく奉仕するアスカは、すっかり恋する乙女といった様子だ。

学校では無関係を装わしている分、メツセージでは砂糖菓子よりも甘い糖分を投げつけてくる。

『話変わるケドさ、今頃しおりんひとりえっちしてると思う?? ♡♡ しおりんもペットにしたら、あたしと二人でオナニーショー見せたげよっか? ♪ あ、それと今日の動画はコレ! ご主人様のコト考えながらお風呂でオナつてみたんだけど、ちゃんと見えるかなあ?』

四方八方に話が飛ぶアスカから、怒涛のファイル送信がなされてくる。

受信にやや時間を要するほどの巨大な動画を、送られてきた順に視聴する。そこには、湯船に浸かった全裸のアスカがにこやかに手を振る姿があった。

右手でスマホの角度を調節しつつ、左手で身体をなぞる。おっぱいを寄せて上げ、意味深に指を口に咥え、ピンク色の乳輪を触る。何度も俺の名前を呼び、せつなげな流し目を送って身悶える女は、すっぴんとはまるで思えないほど美しく、そして淫らだった。

『明日のしおりんの処女カンツィ式、楽しみだね!』

全ての動画を見終えた俺に、催眠ペットからの悍ましくも優しいメッセージが送られてくる。その内容に思いを馳せながら、俺は眠りにつくことにした。

「では、これにて生徒会役員会議は終了とする。みんな、ご苦労様。あとは私がやっておくから、気をつけて帰ってくれ」

明くる日。会議室からぞろぞろと出てきた生徒達が、雑談を交わしながら学校を飛び出していく。どうやら会長一人、居残りをするのはいつもの事らしい。誰もが大した疑問も抱かず、校舎はふたたび静けさを取り戻した。

施錠されていないままのドアを開け、素早く中に乗り込む。ノックもない不躰な入室を、しかし件の美女は怒る事なく笑顔で迎え入れた。

「やあ、待っていたよ。それじゃあ早速始めようか？」

立ち上がれば、その佇まいに目を奪われる。黒いソックスが引き締めるふくらはぎ、スカートの下で光る絶対領域、シワ一つなく仕立てられた制服に、少し高めの位置で括られた黒髪のコントラストが映える。

アスカより更に撫で肩だろうか。マンガに出てくるような凶悪なプロポーションをしているアスカに対して、こちらは淑やかさと上品さを兼ね備えた、羽衣を彷彿とさせる曲線を描く。

『立てば芍薬 座れば牡丹 歩く姿は百合の花』とは、昔の人間は実にうまく喻えたものだ。

邪気なく俺を見遣る会長に、わざととぼけてみせた。

「始めるって、何をだったかな」

「何って……セックスだよ。今日は私の処女を君に捧げるシーンを撮影する日じゃないか。君のそのスマホで、私が君に抱かれる所を撮影する約束だっただろう？」

その一言で、部屋の空気が急激に淀み、歪む。一体、この部屋に何しに来たんだと言いたげに、にべもなく言っただけ。会長は挨拶をするような気軽さで言い放つと、それから思い出したように手を打った。

「ああ。とはいえ、私も性経験はないから、君をリードできる自信はなくて……君は経験があるのか？」

「あ、ああ……セックスの経験はそれなりにあるな」

「そうか……では、君の指示に従おう。ご指導、よろしく頼むよ」

再度の笑顔。そして、細やかな右手を差し出される。まともな会話も、自己紹介もしたことがない間柄の二人。だが、俺達は今、一つのことを成し遂げる「仲間」として、繋がりを持とうとしていた。

「それじゃあまず、何から始めればいいかな？ 恥ずかしながら、この手のことは雑誌で聞きかじる程度にしか知識がないんだ。性欲処理は生徒会の大切な義務だが、君はセックスの経験があるみたいだし、具体的に何をすればいいか教えてくれたら嬉しい」

謂わば、これも『生徒会役員の仕事』の一環だ。生徒会の女役員は、俺に性奉仕することが常識……：異常な思考に疑念を持たず、純粋な責任感で俺の性処理を申し出る生徒会長に、股間の劣情は膨らみ出していた。

耳打ちし、言わせたいセリフを告げる。その清楚な唇から絶対に漏れる筈のな
い、卑猥な自己紹介を。

「ふむ……なるほど、わかった……。ではそれで言ってみるよ。至らぬ点があれば
言ってくれ」

だが、三澤シオリは委細承知とばかりに頷くと、俺が取り出したスマホのレンズ
を正視する。まるで、面接試験に臨む志望者のような面持ちだ。

「こほん…っ！ 三澤シオリ、生徒会長兼ご主人様の催眠ペットとして、心を込めて
性処理します！！」

——ギリギリで吹き出さなかった俺を褒めてやりたい。

他の役員が聞けば泡を吹いて倒れそうな言葉を、よく通る美声で宣言する。

「身長167cm、バストは88、ウエストが57、ヒップサイズは86のFカップだ。オナニーはだいたい二週間か、三週間に一回くらいだと思う。昨日の夜は……実はかなりムラムラして、疲れ果てるまでオナニーをしていた。久しぶりで、すごく気持ちいいオナニーができたと思っているよ。それと……私にはまだセックスの経験はないが、プロポーションには気をつけているつもりだ。自慢は……そうだな。直接見せた方がわかりやすいだろう。少し待ってくれ」

『しおりんの仕事は、ご主人様の性欲を処理してあげるコト！その為にする事なら、どんなコトも恥ずかしいって思わないよ。むしろ、しおりんの全部をきちんと曝け出して、普段なら絶対しないようなえっちな仕草をする方がいいんだもん♡おっぱいも、おまんこも、お尻の穴も、しおりんの全部を使ってご主人様を魅せてあげてね！♡』

誰かが与えた凶悪な暗示が、目の前の美女の脳味噌を支配する。

しゅる、と衣擦れの音が鳴る。カメラを見つめたまま、学園中の憧れの生徒会長が制服を脱いでいく。上履きを、靴下を、スカートを……そして下着

さえ、躊躇わずに脱衣する。その堂々とした脱ぎっぷりに、何故かこちらの方が恥ずかしさを覚えてしまう。更衣室でもない部屋の中、異性を前に生まれたままの姿になった三澤は、自らの脱いだ物を行儀良く畳むと、翻って机に置いた。スマホには、突き出された色白の尻が大写しになっていた。

「んしょ……ご覧の通り、私の乳首は乳輪が少しふくらんだ、パフィーニップルといわれる形をしている。わかりにくければ、近付いて撮影してくれて構わないぞ」

再び前を向き、つんと胸を張る。Fカップの美乳が、支えるものがなくなり僅かに左右に広がる。録画中の画面をぐいと乳首に近付けると、会長は微笑みを深くし、乳首を摘んだ。

「オナニーをする時は、いつもこの乳首の外側から円を描くように撫でて、少しずつ高めていくんだ。その……いきなりこっちを触るのは怖くてな」

言いながら、手持ち無沙汰になっていたもう片方の手を、股間にするすると降ろしていく。本来、そこに生えているはずの陰毛は綺麗に剃毛され、背徳的な幼さを醸し出していた。

「それと、誰かに説明したことはないが……こうして、M字開脚すればわかりやすいだろうか。私のおまんこの左側、ふとももに小さなホクロがあるんだ。特段どうと言うわけではないが、資料として映像に残しておくから、君のおまんことして使ってくれたら嬉しい」

瑞々しく楚々とした唇から飛び出す淫語の数々に、心臓の鼓動は跳ね上がるばかりだ。おまんこ、オナネタ……普段は露ほどもエロい事をしないとされている美少女もの明け透けな物言いに、催眠暗示の強力さを思い知る。

「あとは……そうだな。おまんこの毛は、ご覧の通りほぼ剃り落としてしまっている。しっかり手入れしておけば痒くなることもないし、なによりつるつるした触り心地が実はとても好きなんだ。君も試しに触ってみるといい」

ほとんど魔法のようなアプリの仕業とはいえ、俺もアスカも会長の性格を変える暗示は入れていない。つまり今の会長は、彼女自身が『もしも生徒会が性欲処理のための会だったら』というシチュエーションのもと、自発的に考えだした言葉ということだ。

誘いに乗り、突き出された鼠蹊部を撫で回す。どうやら今朝も処理していたのだろう。産毛ひとつ生えていない恥丘は、凹凸がまるで感じられないほど綺麗に剃り尽くされていた。

「……んっ♡ どうだ？すべすべとして気持ちいだろうか？♡ あとは、そうだな。性処理をする以上、私は出来る限り拒むつもりはない。その……おちんぽを口で舐めたりしゃぶったりするフェラチオや、お尻での性行為も、命令してもらえれば対応する。ハメ録り用のビデオカメラを購入できないか、また先生に相談してみるから、君もどんなふうに私を犯したいか考えておいてくれれば嬉しい」

『君の性欲処理は生徒会の立派な職務なんだから、予算も降りるはずだ』と笑う会長に、後でしっかり記憶だけは消しておくことを決意する。全くの真面目な顔で職

員室に飛び込み、『ハメ録り用のビデオカメラの備品購入費をお願いします』などと言おうものなら、取り急ぎ会長が病院送りになりかねない。

前方から、横から、後方から。上から見下ろすアングルの次は、割れ目と尻の膨らみが見える脚の隙間から。生まれたままの姿を余す事なく映す間も、会長はおっぱいを触り、揉み上げ、恐る恐る細い指先を自分の膣中に挿し込む。

「……どうだろう？うまく撮影できていたかな。緊張してぎこちなくなっていたら申し訳ない」

この異常な状況に興奮しない訳がない。自らも引きちぎる勢いでズボンを脱ぎ捨て、会長に猛る棒を露出する。切れ長の目が眉ごと大きな弧を描き、口には喜悦を浮かべると、会長は自らの薄桃色の乳首をぴんと弾いた。

「……ふふふっ、どうやら杞憂のようだな。すっかりおちんぽを固くしてくれたみたいで、何よりだ。私の方も、さっきの撮影の間に濡れてきて、いい具合にほぐれている。もう少し君が指で弄ってくれば、すぐにでもセックスできるだろう」

アイドル顔負けの美女からそんなことを言われれば、どんな男でも堕ちる。

まして相手は学園のマドンナであり、品行方正の体現者だ。スポーツ万能で成績優秀……文武両道を体現する女に催眠をかけ、好き放題に操る。実に愉悦だ。

腹の奥底から温めるようなねちっこい前戯……アスカと散々乳繰りあったお陰で無駄に上達してしまった愛撫を披露する。

「ん……っ♡ そう、できれば……っいきなり奥に挿れずに……周りを撫でるように、あああっ……そうだ……♡」

会長の手に引っ張られ、近くにある椅子へと二人してもたれかかる。はしたなくも大きく足を開き、赤ん坊のような格好で俺を求める会長に、屹立した自分の物を押し付け、カウパーでコーティングする。

「やっぱり、君はこういうことに慣れてるみたいだな……んくっ、君に任せて正解だったよ。あふ……これからこの身体は君専用の性処理道具になるんだし、今のうちに君にしっかり試してもらわないと……あああっ♡」

性器の近くを執拗に責めたてていると、ぐちゅりと愛液が滲みだしてくる。それは瞬く間に2 cmほどのつらら状に垂れ下がると、やがて床目掛けて垂れていった。クリトリスへの刺激も、臍周りへの愛撫も好きらしい。

「くふ、んっ♡あっ♡そ、そこ…びくって…♡すま、ない……大きな声を出してしまった……それと、申し訳ないが……私の乳首を吸ったり、舐めてもらってもいいだろうか。……私の一番の性感帯は…あっ、その、ぷくって膨らんだ乳首なんだ…♡」

合点。芸術的なふくらみを持ったパフィーニップルを舐めての甘噛み。唇と歯を柔らかく当てて押し込んだ瞬間、会長の首がぐりんと勢いよく跳ねた。

「あぐっ!?!♡んあっ♡やっぱり、乳首…すごっい…頭が、びりびりっ……んっ、あく、そ、それ以上は、イ、イキ……イッてしまっうっ…」

両乳首と陰部を同時に攻略して、我慢のダムを決壊させる。本人の言うとおりに、一番の性感帯らしい乳首を強めにいじるたび、「はひっ♡」と情けない声をあげてイク。

「んっ♡んんんんっ!!?♡」

——やばい。ハマってしまった。まるで女に無縁の生活をしていた俺が、降ってわいた幸運によって女に困らなくなってしまった。それも、俺の知る最も美しい女を二人、やりたい放題にできている。

「……ふふっ、ありがとう。おかげさまで、椅子を汚してしまっくらい、濡れてしまった……♡」

普通なら学校に、親に、警察に通報される行いも、逆に感謝されてしまう。

「見てくれ……もうどうしようもないくらい、びしょびしょになっているのがわかるだろう？…君のおちんぽももう我慢できないはずだ。私の膣中に…このまま挿れてほしい…♡」

アスカをモノにしてまだそれほど時間が経っていないというのに、もう次を求めている。膨らんだ亀頭をあてがい、誘われるままに膣中へと沈めていく。まるで、美女のビュツフェを食い荒らしている気分だ。

「あ、はっ、……んはああああああああっ♡♡」

「……大丈夫か？」

「ん、ぐう……だ、大丈夫だ。ちよつと痛い……ガマン、しよう……♡んっ……」

苦悶に顔が歪み、整った顔に涙が滲む。注射器を遥かに超える異物を体内に挿入されているようなものだ。暗示で痛みを取っていない以上、涙目になって当然だ。

「ふ、ふふ……すまない。君に動いてもらいたいが……もう少しだけ……待つて欲しい……つ、ん、ふう……はあ……」

初めてを大して交流もない男に散らされ、膣口にはうっすら血が滲む。呻きとも喘ぎともつかぬ声で、どうにか痛みを堪えている。

「ん♡んん……♡はあ……♡はあ……♡待たせて、すまない……つ、少しずつ、動いても大丈夫だから……、君のやりたいように……私を、犯して……ほしい♡」

にゅぷ、にゆる。粘液を混ぜ擦り、体液のソースをつくる。静かな教室に淫らかな水音が微かに響いていた。

「あっ♡ん♡ん……♡はっ、んっ、んんっ、んはあ……♡♡んうっ♡君のモノが、こんなに、はつきり、わかる……♡っ♡」

肉襖の締め付けはきつく、アスカに比べて全く慣れた感じがしない。痛みのあるに俺を追い出そうとしているのか、それとも精液を搾り出そうとする女の本能か。

「乳首もっわかる、だろうかつ。もうこんなに、ツンと勃ってしまったってっ♡君の、君のおちんぽが、っ、こうさせてるんだっ♡君の、せいだ…っああっ♡」

上下に揺れる双丘を手で掴み、やや無理な体制で乳首を口に含む。ずっと吸いつきたくなる魅力的な餌性の象徴に目は釘付けだ。

「そう、だ…私のおっぱい、もっ、おまんこ、も…♡君の自由にして、いい…っ。だから、だから…君の思いのまま、私を犯して…っ楽しん、で…あはあ♡」

「くっ…三澤…っ」

「ん♡ん♡おちん、ぽが♡ずぼずぼっ♡ずぼずぼしてるっ♡あぁっ♡おまんこの音っ♡やらしいっ音で、すまない…っ♡激しくされたら…っ♡んっ♡ん♡もっど大き…っ♡」

上ずる声が鼻から抜けて、耳朶を打つ。湧き上がる射精欲を、刷毛のように擦り上げる膣肉がさらに高めていく。

「んあっ♡い、いきそうだ……ああっ♡君は、どうだ？っわ♡私のおまんこはっん♡君の性処理に、役立って♡いるだろうか♡至らなければ、いつでも言っ♡て♡♡」

「俺もイクぞ……このまま、膣中に出す……っ」

お前は俺専用の肉人形だ。生体オナホだ。まんこをぐちよぐちよに濡らした、俺だけの催眠ペットになるんだ。憧れの生徒会長に耳元でそう言い聞かせ、火を噴きそうなほど強烈に扱き上げる。

「ダッチワイフで、も♡オナホでも♡なんにでもなる♡ぐちよぐちよに濡らした、催眠ペットっ♡君だけの、おまんこ性処理生徒会長をっ、好きなだけっ♡犯して、なか、なかに……出してくれ♡」

「いく、ぞっ……！」

呂律が回っていない。催眠アプリを使った、通常では感じられない強力な絶頂。それは強烈に脳に焼きつき、三澤の深層意識に刷り込まれていく。

「んん……♡ どうし、て……こんな……あ、ああ………あああ………♡」

果たしてその「どうして」が意味するものは、なんだったのか。

自分はどうしてこんなことをしているのか。か、それともどうしてこんなに気持ちいいことを知らなかったのか、か。三澤は俺をその視界にじっと捉えて見つめたかと思うと、やがて糸が切れたようにぱたりと眠りに落ちた。

「すー……っ……すう……すう……」

「……………終わった？ご主人様♪」

部屋の中が静かになったことに気付いたらしい。外で見張らせていたアスカが扉を開けて入ってくる。今回の悪事のあいだ、誰も近付かせないよう目を光らせていた女は、俺を見るなりにこやかに手を振った。

「どうだった？しおりんのおまんこ♡ イイ感じだった？って、わー……ハデにやっ
たねえ♡」

床に精液まみれになって寝転がる親友を見下ろし、得意げに頷く。無惨に横たわる親友を自身のスマホで撮影し、「これを撮っておけば、あたし達の事がバレた時に脅して黙らせられるでしょ？」と嘯く。実に頼もしく、そして恐ろしい女だ。

「しおりんおまんこ開いたまま気絶してるの？ご主人様のちんぽが気持ち良すぎてアクメするとか、催眠ペットとして将来有望じゃん♡」

「おい、眺めるのもいいが、とりあえずそいつの服を直しておいてやれ」

女の服を脱がすのには慣れたが、着させるのには未だ慣れない。アスカは持ち込んでいたウェットシートで手際よく会長の身体を拭き上げると、元通りに制服を被せていく。着せ替え人形状態の女を尻目に、窓を開けて換気する。気付けば夕陽がビル群の向こうに消えるほど、時間が経ってしまっていた。

「しおりん、よかったね。あたしもこんなふうにならなくて、ペットになつたんだよ。気持ち良すぎて、ゼンブどーでもよくなつてさ。しおりんもこれからいーっぱい犯されて、ご主人様のちんぽの形に馴染むようにがんばろうね♪……ちゅっ♡」

その言葉は優しく、残酷だ。自らの経験を認識したうえで、親友も同じ目に遭うことを望んでいる。それも、善意で言っているのだから救えない。

「それじゃあ、あたしが後片付けするから、ご主人様スマホ貸して？」

まさか味方になればこれほど頼もしい女だとは思ってなかった。だが、悪事の隠れ蓑として、これほど優れた女もいない。今日もまた、アスカは俺のスマホを手に親友を陥れる次の暗示を与えていった。

「しおりん、よく聞いてね。目が覚めたら、しおりんはさっきまでの事を忘れるよ。頭の深い所にしまっちゃうの」

「ふかいところに……しまう……」

「しおりんは生徒会の会議のあと、居残りで片付けてただけ。何もおかしなことは起きてないの」

「なにも……おきてない………」

「しおりんのこれからの生活習慣で変わることはひとつだけ。これから毎日。朝と晩、授業中に休み時間、お風呂の時もずっと、体力の続く限りオナニーすること♪ 気持ちいいことに慣れて、恥ずかしいって思う気持ちをだんだん忘れていくこと

♪

「オナニー……恥ずかしいきもち……わすれる……」

ああ。女は容赦ないという言葉聞いたことがあるが、それは事実だと今ならわかる。アスカの与える暗示は俺以上に悪辣で、破滅的だ。

「イってイッてイキまくって、ご主人様のペットになる準備をちゃんと進めたら、あたしがまた声をかけてあげる♡」

「ご主人様のペットに……はい……」

「にひひ……っ♡ がんばってエロエロでさいてーの生徒会長になってねしおりん♡ あたしたち催眠ペットに恥ずかしいなんて気持ちはいらぬもん。ご主人様が遊び

たい時に遊んで、犯したい時に犯される。それだけで世界で一番幸せな女の子になれるんだから」

すべては俺のため。そしてそれが俺に操られる女の幸福だと説く。元の明るい性格はそのまま、俺の狂信者と化した。

「それじゃあ、今の言葉をしっかりと頭に刻み込んだら、目を覚ますことができるよ。あたしとご主人様は先に帰るから、戸締りよろしくねー♡」

「はい……………わかりました……………」

やがて『全て』が片付くその時まで、俺達は都合よく記憶から消える。元通りの姿に『隠蔽』された女は、それからきっちり三分後に目を覚ました。

「…ん……………あれ……………。うん……………？」

シオリは、目覚めてすぐ思った。またしても寝落ちした。だが、その明らかな異常を、どうしてか深く考えようとは思わなかった。

「つと、いけないいけない。もう下校時間を過ぎてるじゃないか。やっぱりアスカの言うとおりに、少しムリしているのかも知れないな」

そんなこともあるだろう。疲れ、ストレス、あるいは体調……責任感の強い者ほど、そういった心身の不調を無視して致命的な出来事を招く。それは、三澤シオリにも例外なく当てはまる。そう本人が思い込むよう、暗示を与えられている。

「とりあえず……今日は帰って……オナニーしないと。電車の中で四回、お風呂で三回、寝るまでに……六回くらいはイケるかな。明日学校に着くまでに二十回オナニーでイければ上出来だろう」

自らの思考が歪められていると知らず。本来のレールを踏み外し、道なき道へ転がり落ちていることも気付かず。

「生徒会長として、早く一人前の催眠ペットにならないと……。これでよし」

教室の鍵を閉め、いつも通りに職員室へ鍵を返せば、いつも通りの日常に戻ると信じて。

「ん……っ♡ はぁ……っ……セックスしたい……♡」

以前の彼女であれば決して口にしない言葉を放ち、三澤シオリは家への道を急いだ。

六、【二日目】生徒会長シオリの催眠エロペット宣言！

『ご主人様♪あたしのパパとママ、しばらく旅行に行って帰ってこないって♪ チャンスだよ！しおりんのコト、ちゃんとペットにしてあげて♡ もちろん、あたしのコトも忘れんなし♡』

アスカが嬉しげにそう電話をしてきたのは、夜の九時を少し回った頃だった。嬉しさが声から滲み出している。会長を催眠状態にして俺の家へ呼び出すことも出来たが、せっかく舞台のお膳立てまでされた以上利用しない手はない。

俺はアスカに命じて会長にいくつかの暗示を入れさせ、その日が来るのを待った。

「ただいまーおかえりー♪」

「失礼します……」

「ほらほら、ふたりとも上がって？ 今日パパもママもいないし、あたし達だけだよ♪」

「そ、そうか。では…お言葉に甘えて…」

扉を開けて先導するアスカに、会長が小さく会釈する。その後続く形で俺も滑り込む。清掃が行き届いた玄関に、仄かにカフエカフエを思思わせる系芳香剤の香りが漂う。壁に掛けられた額縁にはフェイクグリーンがセンスよく収まっており、住む者の趣味が見て取れた。

「あ…：…：…つと、いけないいけない。すぐ、準備をするよ」

———が、もちろん、ただの訪問である訳がない。鍵を閉めると同時に会長の顔が虚ろなものへと変わり、少ししていつもの凜とした表情へと戻る。玄関を上がるうともせず、いそいそと自身のブラウスのボタンを外し始めた会長を、アスカが底意地悪く眺めていた。

「そうそう、【お家にかかる時は靴だけじゃなくて、裸になるのがあたりまえ】だもんね。しおりん、覚えててくれたんだ♪」

「ああ。私の服なんかで汚してしまったら申し訳ないからね。ん…しよ、と」

『他人の家に邪魔する時は玄関で全ての服を脱ぐのが当たり前』

『恥ずかしいという気持ちは湧かない。異性の目も気にならない』

———アスカはしつかり暗示を埋め込んでくれたらしい。人様の家の玄関で突然脱ぎ始めたことも、俺が隣にいることにも全く違和感を持たず、堂々と会長は脱ぎ捨てていく。

「じゃああたしも脱いじゃおーつと…♡ ご主人様、あたしたち催眠ペットのストリップショー、楽しんでくださいね…♡」

「…どうしたんだ？君も脱がないと家にながれないぞ？家で服を着るなんて、いくらなんでも恥ずかしいことだからな」

アスカの両親は旅行に行ったきり、しばらくは帰ってこないという。つまり、ここで何をしてでもバレル心配はないということだ。澄ました顔で俺にも脱衣を勧める会長に吹き出しそうになりながら、殊勝に指示に従うことにする。

最初に脱ぎきったのは、アスカだった。巨大さがありありとわかるブラジャーをその手に握りしめながら、俺に背中を向けて尻を突き出す。

「はーいっ、あたしが一番乗りっ！ねえ見て♡ほら、後ろも丸見え♡」

爆乳も魅力だが、このぷるんとしたアスカの尻も捨てがたい。

左右対称の巨大な桃尻に見惚れていると、その隣には焦ったように声を上げる、もう一人の全裸美女が立っていた。

「わ：私だって。ほら、よく見てくれ。いつ見られてもいいように、綺麗にしてるんだ」

アスカに並び立ち、会長が腰を低くして臀部を見せつける。まるで尻の陳列棚だ。大きさはほぼ同じくらいだが、より引き締まった印象を与えるのは、会長の方らしい。どちらにしても、学校でも一、二を争う美女が二人して俺の前でヌードになり、尻を見せつけている光景はたまらない。

「ご主人様♪ じゃじゃーん♪ まんぐり返し♪ どお？ あたしのおまんこも、お尻もぜんぶ見えちゃうポーズ♡ この前教えてもらってから、お部屋で練習したんだよ♡ エロい？ コーファンできそ？♡」

更にアスカが調子に乗り、玄関のフローリングに寝転がる。そのまま脚と尻を持ち上げ器用に折りこむと、まんぐり返しの姿勢になった。歪にたわむおっぱいも、尻のまるみも、まんこも、その近くの窄まりも全てが丸見えになるポーズだ。鼻血モノの光景に鼻息を荒くする様子を見て、アスカの口角が益々持ち上がる。

「ご主人様ガン見じゃん♪そ・れ・に：♪ズボンの中でちんぽ、勃ってるっしよ？ エロい匂いがここまで伝わってきてる…。しおりんのエロい裸のせい？それとも、あたしのせい？♡」

「わ、私は別にエロい訳ではない……。ただ、玄関で脱ぐのは常識だから……」

「うんうん♪催眠ペットはご主人様にいつでもちんぽハメてもらえるように、家中では脱ぐのが当然……。だもんねー。よいしょ……。つと。はいブラ。ご主人様にあげる♡」

元の体勢に戻り、腕に巻きついていたブラ紐を解いて俺に押し付けてくる。アスカの体臭と、普段使っているであろう柔軟剤の香りが染み付いたブラジャーは、ひどく良い匂いがした。

「持って帰って家でシコってもいいよ？あたしの匂いがしみついた、現役女学生の生下着：♡ぶっかけて返してくれたら、あたしもご主人様のコトを思い出してオナニーできるし、好きに使って？」

「わ、私のも良ければ持って帰ってくれ。身体は綺麗にしてるし、そ、その……臭くはない筈だ」

白桃色にクリーム色の飾りが映えるアスカのブラに、清潔感のある水色の会長のブラまで手渡される。まだ体温の残るそれを躊躇いもなく捧げられ、苦笑する。アスカに急かされながら俺もいよいよと服を脱ぎ、玄関マットの上に捨て置く。

「むしろ甘い匂いしてるよねー。ご主人様……ほら、部屋にいこ？あたしとしおりんの二人で、精一杯ご奉仕するから」

「まだまだ拙いが、私なりに精一杯君にご奉仕させてもらう。ほ、ほら……まずはこうやって腕を組んで……」

すっかり準備万端の俺に、二人が左右からまとわりつく。素肌同士の接触がくすぐったさと快感を伝えてくる。アスカは左を、会長が右側から俺の腕を両胸に挟みこみ、耳元で囁る。

「おっぱい、ぎゅーって押し付けて…」

「あ、…んんっ！お、おまんこも…自由に触ってくれ…」

「あたしたちのお尻も、全身ぜんぶ触って…？」

「君に犯してもらうために、今日は準備してきたんだ…」

耳が、鼓膜が犯されていく。

「かわいい二人に囲まれて…」

「君だけのセックスオナホにしてくれ」

「どんなエロいご奉仕もするよ」

「君の言うことは何でも聞こう」

「ダブルフェラ…パイズリ…イラマチオ…あたし達の身体も心も、好きに操っていいから…♡」

「私達を、君の催眠ペットとして…可愛がってくれたら嬉しい」

素晴らしい提案で、抗いがたい声色だ。

（だが、会長さん。あんたはアスカと違ってまた自我の根っこから捕まえられた訳じゃない）

そう。既に催眠がなくとも堕ちきり、俺を心酔するアスカとは違い、会長はあくまで催眠アプリで「そういう設定」を暗示で与えられただけだ。見た目には違いがわからないが、そこには決定的な差が存在する。暗示などなくとも俺に服従するアスカと同様、忠実で淫乱な催眠ペットにするならば――

（三澤シオリの『自我』の根っこごと、摘ませてもらうぞ）

「あ……っ」

足元に転がっていたズボンからスマホを取り出し、その切れ長の瞳の前に押し出す。瞼がぴくぴくと動いてすぐ、催眠状態へと落ちる様子は、既に相当深い識閥下を侵略できていることを意味している。あともう一押しだ。

アスカは友人が墮とされる様子をにこにこ見守っており、止める様子はない。親友が『自分催眠と同じ催眠』にされる姿を見られるのが楽しくて仕方ないようだった。

「……はい、三澤シオリは催眠状態になりました……」

「よし。三澤シオリ。あんたは今から俺が指を鳴らすと今までの催眠が解除されて、元のお前へと戻ることができる。俺にされたこと、アスカにされたこと全てを思い出すことが出来るが逃げ出すことはしない。できない」

「はい……私は……指を鳴らすと催眠解除……私は全てを思い出す……でも逃げ出すことはしません……」

「それと、たとえお前が正気に戻っても、俺がお前のご主人様だということは意識の深いところで記憶している。お前は催眠が解けても俺の言葉には絶対に従い、逆らわない。いいな」

「はい……ご主人様の命令は……催眠が解けても絶対です……私はご主人様にはさからいません……」

「よし。じゃあ、目を覚ませ」

——さあ、二人目のショーをはじめるとしよう。

「……はっ!!?」

目をぱちくりと瞬かせ、一瞬の空白が生まれる。アスカ曰く、誤認や人格改変系の催眠は、単純に別人格になる訳ではないという。あくまで『与えられた暗示』のとおり思い込む自分がある——心の底からなりきっている感覚に近い。

であれば、今の会長はどんな気分だろう。性奉仕は催眠ペットの義務である、と——そう【思い込んでいた】本人の認識だけが、急激に正常に引き戻される。

「……えっ」

「やっほーしおりん、おはよー♪♡」

まだ現実に戻れず困惑する会長に、ひよこと俺の背中越しから顔を出したアスカが手を振る。一糸纏わぬ格好で、はちきれんばかりの乳房を押し付けてにやつく。

「アス……カ？どうして、ハダカ……」

「それを言うならしおりんもでしょー？素っ裸で、ご主人様にエっロくおっぱい見せつけてさー。今のしおりんもほとんど痴女みたいなカッコしてるよ？♡」

（ほとんど痴女というか、完全に痴女だな）

家の玄関でヌーティストよろしく真っ裸になり、同じく全裸の男に尻穴や乳首を見せつけて抱きつく姿。下着は男にくれてやると言い放ち、喜んで自ら催眠ペットとして犯されると言っていたのは、間違いなく三澤自身だ。

「へっ！？……つきやあああ……！！？」

「はいそこまで、大きな声は出せないよー」

自分の身体を見下ろした会長の認識が、ようやく現実を追いつく。卒倒モノの景色に飛び出した悲鳴は、敢えなくアスカの『指示』に摘み取られてしまう。

愕然と悄然で顔を青くしたまま、ぱくぱくと口を動かしてへたり込む会長は、酷く弱々しく見えた。

「……あ、アスカ。まさかそんな……」

「そーだよー。思い出した？あたし、この人のペットになったんだよねー♡あたしは彼に飼われるメスで、ご主人様はあたしの飼い主さま♡でね、ご主人様がしおりんのことも飼いたって！だから、今から一緒にご主人様のモノになるーね、しおりん♡」

「あ……な……っ」

「そんな怖がらなくてもダイジョーブだって♡ご主人様のアプリでびびびっ☆ってしてもらったら、しおりんもすぐにホントの自分になれるから♡ご主人様のためなら、喜んでアナルセックスしたりアオカんだってできる、どすけべエロエロペットになれるよ♡」

『価値観の違い』とは恐ろしい。

あるいは、同じ言語なのに話を通じない感覚か。かたや俺に犯されることを無上の喜びと考え、『破廉恥はステータス』と思っているのだから。

「ば、ばかを言うなっ。目を覚ますんだアスカ！その男に変なことをされたんだろ
う！？い、今すぐここから逃げて……」

「えー？じょーだん♡♡ ってかさー、しおりんなんか勘違いしてない？あたし、た
しかにご主人様の催眠ペットだけど、あたしは自分からあ、この人に操ってほしい
ってお願いしたんだよ？やらしいこともゼンブ受け入れて、この人に飼われたいっ
て、あたしが頭を下げてお願いしたの♡ ご主人様を心から愛してる飼い犬が逃げ出
すとか、ありえないでしょ？」

鶏が先か、卵が先か。「俺に犯されてすべてを諦め、今の状態を受け入れた」

……というのが俺の認識だが、本人にしてみれば『自分を幸せにしてくれる人に尽
くすアタシってば健気♡』くらいの気持ちらしい。

どちらにせよ、すべては都合よく俺に働いている。

「な、何を言ってるのか……」

「わかんない？ ホントに？ じゃあしおりんどーしてご主人様のを欲しそうにオナニーしてるの？ どうしてあたしを放っておいて逃げないの？ 自分一人逃げて、警察に駆け込んで、通報しちゃえばいいじゃん。悪い男に親友が犯されてますーって♡しないのは、どうして？」

「そ、それは……っ!？」

そう。それは三澤本人も気付いていない、明らかに変化だった。自身の股間に指を挿して、くにくにとまさぐる。暗示で逃走こそ出来ないように縛っているものの、オナニーする指示は与えてないのに、だ。

誰に指示されずとも、あるいは自分でも無意識のうちに、性器を触るのが癖になってしまっている……無意識が快楽を求めて、カラダを支配しはじめている。すぐに止められるはずなのに、止めなければいけないのに……三澤は焦った表情のまま、熱心に指は動かさっぱなしだった。そんな様子にアスカは頷き、前へと躍り出した。

「……じゃ、ちゃちゃつと済ませちゃお？ご主人様とセックスしたら、どんどん好きになることができるから。『絶頂するたびに彼を嫌う気持ちが消えて、愛する気持ちでいっぱいになってくる』の！心の底から従いたいって気持ちになる頃には、しおりんもあたしと同じ、立派な催眠ペットになれてるから♡」

「い、いやだ……いやつやめて、やめてくれ……！！」

ことようやくここに来て、会長の顔に明確な恐怖が浮かぶ。眦に涙が滲み、綺麗な歯がカスタネットのごとく鳴る。

「さて、と……じゃあ会長さん。いや、三澤シオリ。始めようか」

「あ、いや、くるな、くるなっ！お、お願いだ……！」

「怯えてもいいぞ。その方が、お前が俺のペットになった時に『ソソる』からな」

部屋の隅っこまで後退りする獲物に覆い被さる形で、勃起したモノをまんこの縦筋に押し当てる。本人の言葉とは裏腹に、その入り口は狭いもののしっかりと濡れてしまっており、男のモノを迎え入れる準備は整っていた。

「やめっ、そこはっ、ああああ……挿れないで、挿れない……あぐううっ
っ!!!?!!?」

既に一回犯され、受け入れたことがあるとはいえ、今回は正気だ。どうにか逃げようと腰を振らせる女を無理やり抑え込む。脚を掴んで無理やり股を開かせ、強引に屹立するモノを突き挿れる。と、その様子を隣で見っていたアスカが膝を折り、見下ろす。

「そんな苦しい声出しちゃご主人様に失礼でしょ?せっかくご主人様がちんぽ挿れてくれるのにさ」

「いや、いやだっ、だめっ、抜いて、抜いてくれっ!!」

なんせ、今回は避妊すらしていない。完全な生ハメ、生セックスだ。自分の肉を掻き分けられ、強引にこじあけられる。膣内射精……その先にある『最悪の未来』を想像してぶんぶんと首を振る。

まったく、無駄なあがきだ。さしもの会長でも、男の俺には力では敵わない。抵抗する身体を押さえつけて、オナホのように犯す俺を、アスカが羨望の眼差しで見ている。

「ご主人様カッコイイ……♡ しおりんを組み敷いて、足を押さえた種付けプレス♪ つよ〜いオスがメスを屈服させる、種付けえっち♡ やっぱりオス様はペットを従えるべきだよね♡ ねえご主人様？ご主人様がナカダシしやすいように、お耳で囁いてあげよっか？」

「なかつ……そんなっ、そんなっ！！？あうっ！？」

膣口を犯す俺に、更熱い声援にブーストがかかる。肉饅頭のようなおっぱいを見せびらかし、乳首をシコリ勃たせたアスカの『小悪魔』が発動する。

「ふう〜♡♡ にひひっ、ご主人様かっこいいぞ〜……♡ バキバキに勃起したっ
よ〜いちんぽで、ざこまんこをわからせるイケメンセックス♡ 女の子の都合なん

て一切考えない、自己中で独りよがりの種付けセックス♡ オレはオスだぞ、えらくてつよいんだぞ、ってわからせてくれる、つよつよちんぽ：♡ ふれーふれー、ちんぽ♪がんばれがんばれ、ちんぽ♪：：：にひひっ、効果テキメンじゃん♡」

まったくこいつは度し難い。何度聞いても飽きやしない。

それどころか、回数を重ねるたびにアップデートをしてくる。

溢れる愛情の全てを俺に向けさせた結果、俺が犯罪をしても全肯定する女になっ
ていた。

「いやっいやだっそんなに突かな、い、っで！？♡ ああっ♡ あひっ♡」

「ご主人様に突かれると、女の子は負けちゃうんだよ？ナマイキギャルのいきがりまんこも、生徒会長のまじめまんこも、ご主人様のカツコイイイケメンちんぽの前には負け確のよわよわまんこにされちゃうんだからさー♡ ほら、もつと腰を振って、いっぱい泣かせて、しおりんの子宮にナカダシ孕ませザーメン、注いであげて？♡」

肉襲でこそぐように責め立て、体重を乗せて犯す。膣中で膨れる異物感に、三澤の美貌がぐしゃりと歪む。

「いやっ、なかはいやあ!!?♡ おねがいだ!!やめっで!!私がつ君の気に触れることをしたなら謝るがらああっ!!」

「ぷっ：♡ しーおーりんってば、まだわかってないのー?しおりの気持ちはどうでもいいんだってば。ご主人様はしおりのことが欲しいの。しおりんをいつでもおやつ感覚で犯せるオナホにしたいの。なら、しおりんはそうならないとダメじゃん?ご主人様がそれを望んでるんだから、黙って催眠ペットになりゃいいんだって。逆らうだけムダってわかってるっしょ?」

本当に残酷なヤツだな、おまえは。当然と言わんばかりの口ぶりで悪意に満ちたセリフを吐く。親友から突然、身に覚えのない悪意をぶつけられて、会長はパニックだ。だが、ぶんぶんとして首を振りながらも、身体は浅い絶頂を繰り返しているらしく、時折白目を剥いて悶えた。

「そんなっ♡っあ♡あう♡おぐっ♡いぎっ♡このままだとイクっ♡いっ♡いってしま♡っあああああ！！？♡♡♡」

「いゝねえ、しおりんもエロい声出せるんじゃない♡♡そのままイキ狂って、壊れちゃえばいいんだよ。『イグウイグウ』ってバカみたいな喘ぎ声だして、オホって、惨めにイカされるだけのメスマンこになれたら、晴れてご主人様の催眠ペツトだよ？♡」

大親友が男に犯され、イキ狂う様に舌なめずりをする。俺の代わりに会長の胸を揉み、耳の穴に舌を這わせて更なる性感を呼び起こす。

「ひっいやっ！！いやだっ♡♡そんなっ、イギ、イギたくないっ♡♡もうやめでっこれいじょうはまたイクからっあああああっ！！」

一度イって腰をびくつかせ、二度イって口からよだれが垂れ落ちる。1m近く潮を噴き、盛大に床にシミをつくりだす。

『だって、毎日ご主人様に死んじゃうくらいイカせてもらってるあたし直々に、イキ癖をつけてあげたんだもん♡今のしおりんなんてザコもザコのよわよわまんこだし♡♡それにしても、しおりんマジイキ過ぎててウケる♡』——冷酷に見下ろす瞳がそう語っている。会長は訳も分からず絶望し、顔を蒼褪めさせながら下品に喘ぐばかりだ。

「うーわ♡今度は潮吹き？しおりん流石、男の喜ばせかたわかってる♡あたしも負けてらんないなあ♡♡」

「しかし、本当によくイクな、この女は。お前よりチヨロいんじゃないか？」

「ご主人様、あたしのまんこで鍛えたちゃんぽ、しおりんなんかじゃ勝てるワケありません……♡もう二回も絶頂してるから……そろそろご主人様を好きになってくるよ♪乱暴に突いて、『お前は肉オナホの催眠ペットだ』って、しおりんに教えてあげて♡」

三度目になればアスカの言うとおおり、イキ声に濁声が混ざりだす。そこからは、いっそ笑えるほどのポーナスタイムに突入した。俺が腰を引き、子宮めがけて重た

い一撃を繰り出す。「おっ♡」という間の抜けた声を上げて絶頂する三澤を手をたいたいて嘲笑い、アスカが舌なめずりをした。

——イクたびに俺を好きになる。

その暗示のせいで、親友は恐慌とエクスタシーの狭間を行ったり来たりだ。

「まだイグっ！！いや、いやああっ！私を、私を消さないでっああっ♡ いやああっ！！！！♡」

「ご主人様を嫌いなしおりんとか別に要らないんだよね。とっととイキ潰れて、消えちゃえばいいのに。ご主人様を好きになる以外あり得ないんだから、早く諦めなっつ♡」

「あああっ！♡ ご主人っさまっ♡ ちがうっ！！お前はご主人様なんかじゃっ♡ ちがう、ちがううううあああああ！！！！♡」

お前はもう詰んでいるんだよ。三澤シオリ。

違う違うと喚きながら、タコのように脚を俺に巻きつけ、離すまいと抱きしめて

くる。自らキスを求め、俺を見る顔つきが甘く赤くとろけていく。やはり人間は痛みには耐えられても、快感には抵抗できやしない。

「はいはい、ムダな抵抗ごころーさまー。しおりんのまんこはちんぽ啜えてこんなに喜んでるのに、否定できなくない？あ、それともお……ホントはもっともっと犯してほしくて、わざと拒否ってる感じ？うわしおりん女優じゃん♡」

「ちがっ！？おぐっ……♡これはっあっ♡ご主人様が突くから……っ！！♡ご主人様のおちんぽ、ぞりぞりっ♡またイク、イク……あ、っ！！？♡♡」

お前も堕ちろ。堕ちてしまえ。スクールカーストのトップに立つ女どもも、所詮はメスだと思い知れ。気持ちよさに溺れて、いやらしさに身を堕とせ。止まらない絶頂と絶望の先に俺がいる。

「ご主人様っ、がっあぁっ♡私の頭につ♡あぁっご主人様っイグっ♡イグのとまら、にゃっ♡~~~~~?!!♡♡♡」

「五回目く♪うん？六回目だっけ？どうだっていいけどもくそろそろ、ご主人様しゅきしゅき♡ってしおりんになってきたんじゃない？ほら、そのぷっくり膨らんだエロ乳首、思い切りつねってあげるっ♡」

「ああああイクウウウウウツッ！！♡♡ ああご主人様っ、ご主人様……っ♡ いやっ……ああっ♡もつと……もつと突いてえっ♡」

「そーそー、そんな感じでもつとエロくねだって、ご主人様をさそうの。あたし達はそれ以外に価値ないんだから♡ほら、もう一回っ♪」

「いひひひひひひっ！！？♡」

アスカはただ女の快感を経験してきたワケじゃない。脳みそが焼き切れる程の快楽を、どうすれば女を『破壊できるか』その身をもつて経験した女だ。三澤シオリに「イキ癖」を仕込み、調教し、絶望させ——その絶望から救い出せる存在「俺」を脳の奥底に刻むために、的確に追い込んでいく。

「ちくびっ♡ちくびすきっ♡つねられるのつきもぢっイィィっ♡もつどしでっ♡ おねがいだからもつど、もつどおとおおっ♡」

「はいはい、でもお。おねだりするのとはあたしにじゃなくて、ご主人様でしょ。しおりんはどうしたいの？」

「あああっ!!?♡イギたい、イキたいっ!!イカせて!!お願いしますっ!!」

泥水のように濁った瞳が俺を捉えた。恐怖から敬慕の対象へと変わりつつある男の顔を見て、声のトーンが上がる。イカせてほしいと懇願する友人の頬を撫でながら、俺の忠実なペットが追い立てる。

「ご主人様の命令には従う？」

「従うっ従うがらっ!!お願いだからもっどイガせてっ私をっ潰してえっ」

「ご主人様の言葉には一切疑問を持たず、喜んで使われるって誓える？」

「誓うっ誓いますっ♡だからっ、くはああああっ!!?♡」

「じゃあご主人様のペットになるって言えたら、絶頂していくよ。ナカダシと同じ時に、しおりんは生まれ変わるの♡」

そうだ。もっと俺を頭に焼き付けろ。俺が三澤シオリのすべてになる。快樂と催眠で墮落し、人間以下のペットへと堕ちてしまえ。

「あ、ああああ……」

怒り、焦り、戸惑い、からの隷属。目まぐるしい感情の変遷を経て、生徒会長の三澤シオリは生まれ変わる。誰からも信頼され、頼られる公正公平な生徒会長から、俺の淫らな催眠ペットとしての一生が始まる。

その一部始終を眺めていた先達——アスカが、シオリの顔をぐいと覗き込む。

「にひひひ、しおりんお疲れ様♡ ご主人様のちんぽ、どーだった？♡」

「ん……あひゃ……ごしゅじんひゃま、すごい……すごかった……♡」

その目は、不自然なほどぎらついていた。俺とアスカを見ても、恨みや憎しみの火を灯すことはもうない。そこにあるのは『絶対に勝てない相手』に対する圧倒的な尊敬と隷属の意志だけだ。三澤シオリは、もう戻れない。否、戻ろうとも思わないだろう。

「でっしょ！♡ もうこのちんぽのためならなんだって出来る気になるよね。じゃあほおら、しおりんもその場に土下座して、彼に従うって誓って？♡」

「ん……ん……っ、わか……った……どげざ……する……♡」

もぞもぞと身体を起こし、シオリが正座する。歌留多かるとの選手のごとく綺麗な姿勢のまま、腰を深く前に折る。その額ひたいは、愛液や精液で汚れたフローリングにぴたりと押し付けられていた。

「やっぱり生徒会長は土下座もきれーだねー。それじゃあご主人様？今からおまんこから精液垂れ流したエロペットのしおりんが、ちんぽ宣言するから、聞いてあげてね♡」

『ほらしおりん』と背中を押され、ぶるる、と身体を震わせる。剥き出しのまんこからは、精液がどろどろと溢れて足の裏を汚していた。

「んん……三澤……シオリです……ちんぽ宣言……します……♡ごしゅじんさまのちんぽに犯される、催眠ペットとして……今後は一生従います……♡どうか……どうか私をアスカみたいなどすけべなペットとして……ご主人様がいつでも気軽に使えるオナホール女として……精液コキ捨ててください……♡ご主人様……♡」

「わくわく♡おめでと、しおりん！♡これでえ、しおりんも仲間だね。それじゃあ早速、今からしおりんに彼のペットとして大切な心構えをレクチャーしてあげる♡ご主人様はその間、あたしとしおりんどっちでも好きに犯してね♡」

「はい……よろしくお願いします……ご主人様……♡♡」

生徒会長は堕ちた。俺は自由に扱えるオナホが二人に増えた。

もはや『会長』が、俺に逆らうことはないだろう。アスカを犯している間の見張りであろうと、教師への虚偽の報告であろうと、罪悪感を覚えることはない。俺を守り、セックスの時間を確保するためなら、手段を選ばない。風紀に厳しかった会長はもういない。そこにいるのは一匹のメスだった。

書き下ろし幕間

シオリ編

「ふう……今日も遅くまでご苦労様。もうすぐ学園祭も近い。みんなそれぞれクラスの準備もあつて忙しいと思うが、もう少しだけ、生徒会活動の方も頑張ってくれ」

今日は学園祭直前の生徒会の日だ。生徒会はといえはこの時期になると、自分のクラスの出し物だけではなく、役員として各箇所の風紀を守ったり、イベント後の会計監査もあつたりと、諸雑務に駆られる。

幸いなことに、役員の仲間は皆まじめに私の指示に従ってくれる子ばかりで、何か問題が起きたとしても卒なく対応できるだろう。安心して本番に臨めることが嬉しい。

皆を帰路に着かせ、会議室には私一人が残る。一人で作業をする方が集中できるし、作業も捗る。それに、部活の喧騒を聞きながら、夕陽が沈みゆく教室で作業をするのは、存外に気分がいいものだ。

真面目に、誠実に、ルールを外れず……平穩無事に過ごせることはとても大事だ。

「ん……っ♡」

だが——今は、それよりもっと気持ちいいことを知ってしまった。
セックス。知識としては知っていたが、まさかあれほど素晴らしいものだとは。

思い出すと身体が熱くなり、心が幸せで満たされる。子宮が疼き、あの強烈な快楽を欲してしまう。自分とは異なる性を求め、求められながら高めあう神聖な儀式。古来から行われ続けてきた、性的満足と快楽を同時に満たせる行為。日本ではとかく性行為を忌避し、授業でも表層的なことしか教えない。それどころか、男女の交わりを不純異性交遊とひとくくりにして、私達を『性』から遠ざけようとさえする。まったく愚かしい話だ。

そもそも、種を残すことが私達人間の本質だし、いずれは『そういう行為』をする日が来るのだから。学校はもっとオープンな性教育を生徒に施し、セックスがとても大事なものだと教えるべきではないか。

そうだ。一度ご主人様に相談してみるのもいい。クラスまるごと催眠をかけて、彼をお手本にセックスの授業を開催する。もちろん、教材は私やアスカがなるが、ご主人様には手ごろな女を見つけて犯していただくのも、いい。私は生徒や先生の覚えもいいし、教師の中から何人か取り込んでしまえば、ご主人様にとっても都合がいい。今度、ご主人様のスマホをお借りできないか聞いてみるとしよう。

「……ん、ああ……♡ 時間がもったいない……早く今日のオナニーをしなないと♡」

誰もいない部屋で、私はスマホを取り出すと、この数日で撮影したデータを画面に呼び出した。映っているのはどれも私で、どれもまったく服を着ていない淫らなものばかりだ。勉強をするのと同じくらい、オナニーの時間を確保できないのは惜しい。ひとまず今は昂った気持ちを抑えないと。

自室の窓際で乳首をつまみながらオナニーをする私。ベッドで壁に背中を預けながらあそこを掻き回す私。画面に向かってピースをしながら、トイレでいきみおしっこをする私。それと——勃起するご主人様のモノに向かって土下座し、「どうかその逞しいおちんぽで私を隅々まで犯してください」と笑顔でお願いする私。

ふと。画面が突如として暗転し、けたたましいバイブレーションを始める。浮かび上がった名前に私の心臓がびくと跳ねる。頭が理解をするよりも早く、私の指が勝手に『受話』ボタンを押した。彼をお待たせするなどもってのほかだ。

「はい」

「ああ、みんなは帰らせた。ご主人様のご命令どおり、今日一日ナカに挿れて過ごしていたから、来てくれたらすぐにでも犯せる。私のおまんこで良ければ好きに使ってほしい」

彼こそが私のご主人様。私が身も心も捧げ尽くすと決めた、永遠の飼い主様。もちろん、洒落や酔狂で言っている訳ではない。私は紛れもなく私自身の意志で、彼に従い、彼に犯され、時に催眠で操られる性処理ペットになると誓った。

彼が望めばいついかなる時でも私は彼に抱かれ、命じられればどんな場所でも、たとえ人間を辞めてでも忠実に従う……そんな卑しく淫らなヒトメスへと墮としていただいた。

産み育ててくれた母、頼りになる父、その二人を差し置いて、彼こそが私の一番だ。常識、倫理観、思想、信条……私が私であるためのものを一度全て破壊して、作り替えて、彼専用のオナホ……催眠ペットへと生まれ変わらせてくださった。まったく感謝してもしきれない。

「ふふ、それはもちろん、最高の気分だよ。君みたいな男性に従うことこそ、女にとって一番幸せなことだからな。アスカが君に懐く理由がよくわかる」

彼を初めて認識したのは、私が生徒会長になって間もない頃だった。

覇気を感じない——よく言えば人畜無害、悪く言えばぱつとしない、どこにも居そうな生徒の一人、と認識していた。生徒会長になった以上、ある程度学校の生徒は覚えておこう……そんな試みの中で見かけた【よく居る一人】でしかなかった。

次の出会いは、アクシデントだった。親友のアスカと帰ろうとした刹那、出会い頭の衝突——怒り心頭のアスカを私が宥めるといふ、奇妙なやり取りの中、彼は無表情でそこに立っていた。

感情的に怒り返す訳でもない、萎縮もしない……ただ、獲物を見つめるハンターのような佇まいに、僅かだが薄気味悪さを覚えた。

だがそれは、私の誤解だった。彼はまず私の親友のアスカに催眠をかけて、いなるの催眠ペットへと変えた。私はそんなアスカに騙される形で人気のない所へ誘い出され、やはり催眠をかけられた。

私は彼のためにいかなる努力も惜しまず、この身と心のすべてをもって奉仕する……その為に私は生まれたのだと、頭の中に徹底的に刷り込んでもらった。

嬉しいことに、そういった相手の考えを無理やり捻じ曲げることについて、何も思わないように変えてくれたおかげで、私は彼に感謝こそすれども、負の感情は浮かばないようになった。

彼ほどの素晴らしい男性なら私やアスカだけでなく、もっと多くの女を従えるべきだし、性処理用のペットも多い方がいいだろう。

それだけではない。彼は何者かから渡されたアプリを使って催眠をかけているよ。うだが、その女の素性も目的もわかっていないという。それは、放置しておけない由々しき問題だ。その女が彼にとって味方かは分からないし、もしもの時のために彼を守る『システム』は構築しておくべきだろう。資金力のある家系の者、社会的に影響力が強いとされる職に就く者、頭の回転が早く、長期的計画を立てるのに長けた者……人材の確保は急務だ。

彼が今後手にするハーレムの橋頭堡として、私を役立ててもらいたい。果てのない夢物語だが、彼を慕う催眠ペットが一堂に会し、彼の前に並ぶ姿は、それはどんなに素晴らしいことだろう。人生の全てを賭けてでも達成する価値のある……いや、しなければならぬ……そんな使命感さえ覚える。

「私も、君のために出来ることなら何でもしよう。……ところで、もうそろそろこちらに到着するかな？ 私も、君にここで犯してもらえと思うと、会議の時から心が逸ってしまつて……♡」

扉が開き、ご主人様がお見えになる。私の女の部分が熱を持ち、頭はじんと温かな気持ちで満たされていく。

「あああ……♡ わかった。君の言うとおりに、いやらしく腰をくねらせながら脱ごう。よく見ていてくれ……♡」

七、放課後は乳首オナニーでイキまくり♪淫乱生徒会長爆誕！

『生徒会より全校生徒の皆さんにお知らせいたします。旧校舎は老朽化に伴い、立ち入りが固く禁止されています。生徒の皆さんは決して近づかないようにしましょう。繰り返し、生徒会より……』

「ん、はあ……っ♡ん、んっ、んっ……んああああっ！！♡」

校内放送では隠しきれない嬌声が旧校舎に響く。女は教卓の上で大きく足を開くと、何かに急かされたように自らの乳首を弄り始めた。自身の内側から湧き上がる快感と灼熱感が抑えられない。よだれを垂らし、びくと震えながら自慰を続ける姿からは、いつもの凜とした面影は微塵も感じられなかった。

「ご主人様、ご主人様ご主人様ご主人様あっ♡ん♡ あふっ♡ 今日もご主人様のために：っオナニーっ♡ おな、にい：をお：っ♡ はあっ、そこ、イぎっ！！？♡」

うわごとのように女が連呼する。濁った瞳に狂気的な崇拜の念を滲ませ、一人の異性を夢想する。自分がオナニーをするのは『彼』のため。『彼』に自分の身体を犯していただくため。彼を想い、彼を感じ、彼に自らの気持ちを証明するため、一人きりの教室で激しく行為に耽る。

「もっと……もっとご主人様に見せないと、見せないとっ……！ ビデオ録ってお見せしない、っとお……♡ 私のっ、んっ、あん♡ 生徒会長っ三澤シオリの、おおっんっ♡ やらしいおなにーっ……もっとお……♡ん、ああああっ♡♡♡」

目の前の机には、自身が持ち込んだスマホが置かれていた。画面には女の痴態がまざまざと映し出され、記録を続けている。それが、本日『ご主人様』から課せられた「ノルマ」だ。

「あ、んくっ♡いくっ、いつちゃうっ、もう、イクっ……！♡ご主人様っご主人様っごらんくだ、さいっ♡私のっえっちな姿……っご主人様に今日もっ、今日も……っ♡」

「やーっぱりここにいた♪しおりん、旧校舎は立ち入り禁止だって今放送流れてたよー。悪いんだあ♪」

その時だった。

突如として開かれた扉から、一人の女が入ってくる。美しい金髪をなびかせ、制服を自己流に着崩したその生徒は、オナニーに耽る女を見ても驚かない。それどころか、首を大きく縦に振り、にやりと笑う。

「んっ…アス、カ…、あ♡あ♡…ちよつと待って…今……乳首…っオナニー、いいところ、なんだ…っ」

「はいはい。ちゃんと見てあげること、いつもみたいはそのすけべ乳首コリコリしてイッちゃいなー」

親友に見られたにも構わず、股間と胸を弄り続ける全裸の女と、知人の狂態を意にも介さず、にこにここと観察し続ける女。三澤シオリと四ノ宮アスカにとっての、新たな日常風景だ。

「ん♡ あり、がとお…っ♡ 見てっ見てくれ…あっあふっ♡ あっ、おまんこっおまんことちくび、ちくびきもちいいっ…!♡」

「しおりんの乳首ってホントエロいよねー。ぷくっしててカワイイしい、感度も最近めっちゃイイ感じじゃん？いいなあー、あたしもご主人様に頭の中操ってもらって、乳首絶頂させてもらおっかなー♡」

「だ、だめっ♡ この乳首はっ私のモノ…っ♡ あふっ、わらひ、何言っつ♡ アタマ、しびれ…っ♡♡」

まるで幼子が玩具を取り合う時のように、シオリが自らの乳首を指先で隠す。その僅かな間も、指の腹で磨り潰すように刺激を与え続ける。無限に湧き出る性欲に、脳の深い部分まで侵されたような顔で、発情を訴え続ける。

「あっ♡イクっ♡ もうイクっ♡ ちくびコリコリっ♡ アスカに見られながらっイクっ♡ 変態ドスケベ生徒会長のっ、乳首アクメっ見てっ♡見ててっ♡ あっ、イク、イク、イグうっ!!?~~~~~ツツ!!♡♡」

両手でぐいと胸を持ち上げ、乳首を強烈に引っ張りながら、シオリは果てた。グラビアアイドル顔負けの優れたプロポーシオンを、西の空に傾き始めた太陽の光が照らし出す。胸の膨らみが腹に大きな影を落としていた。

「はあ：はあ：はあ：：」

「はい、おつかれさま。スポドリ買ってきといたけど、要る？」

「ん…っはあ…っ。ありがとう。いただくよ」

シオリの表情は熱に浮かされながらも、晴れ晴れとしていた。一仕事を終え、達成感に満ちた顔だ。親友の手からペットボトルを受け取り、一気にその半分を飲み干す。教卓はおろか、教室の床にまで広がる夥しい愛液の量を見れば、それも納得の飲みっぷりだ。

「それにしてもしおりん。旧校舎に無断立入、制服もゼーんぶ脱ぎ散らかして、教卓の上で全裸オナニーとか、ハジケてるね〜♡ご主人様のご命令？」

「ちが…っ、今日はまだ…9回しかオナニーでイケてないから…カラダが疼いてしま…っ」

意地の悪い顔でからかう親友に、ぼん、とシオリが紅潮する。専用のアナウンスまで用意して旧校舎へ近づく生徒を排除し、自らは浅ましくオナニーに耽る生徒会

長を、はたして誰が想像できようか。スカート、リボンにブラウス、上下セットの下着は乱雑に脱ぎ捨てられ、床に散らばったままだ。

もじもじと尻すぼみに口ごもるシオリに、大親友が悪魔の笑みを浮かべた。

「めちゃくちやオナニーしてんじゃん♡♡ クラスの子にバレたらどうすんのー？♡」

「い、いいだろう。学校でオナニーするくらい…っ。そもそも…校舎内でオナニーしてはいけないなんて校則はない…。私はただ、ご主人様に楽しんでいただくため『生徒会長三澤シオリ』のヌキ所たっぷりの Hentai 動画を録っていただけだ。やましいことはひとつもない…っ♡♡」

品行方正で貞淑な生徒会長。教師から頼られ、生徒から慕われる理想の生徒。そんな女から放たれる言葉は、どれも常軌を逸していた。

「え〜？でも、校則でダメってなっても、えっちはやめないっしょ？」

「当然だ。私達はご主人様に選ばれた催眠ペット……休み時間でも授業中でも、ご主人様がお望みなら時間も場所も関係ない。あの御方に飼っていたただけの恩返しができるなら、私の全部を差し出してもいい」

銜いも躊躇もない。文字通り、全部差し出すことに迷いもない。金、家族、良心、あるいは人間としての尊厳でさえも。同級生の男に自らの命さえ握らせていることに、一片の疑問も持っていない。

「にひひ、しおりん変わったねえ。ヘンタイなこと、好きになっちゃった？」
♡

「ん……そう、かも知れないな。ご主人様が色々教えてくださるから、……その……えっちなこと……」

「例えば？ エッチなゲームとか、そーゆーやつ？」

「それもあるが……。近くの公園で野外フェラさせてもらったり、電車に乗った時はお尻をじかに揉んでいただいたり……。ところ構わず彼に触ってもらえると、催眠ペットとしてとても誇らしい気持ちになるんだ」

言うがままに成すがままに、男の凌辱を受け入れる。いつでも、どこでも、主人が命じればその場でも。自らが身を沈めた新たな常識を心地よさそうに語る女に、もう一人も即座に食いついた。

「あくわかる。やっぱご主人様に触ってもらうのたままないよね。あたしこの前、ご主人様に身体持ち上げてもらいながらトイレでおしっこさせてもらってさ」。嬉しすぎてそのまま何回もイッちゃったし♡」

二日前の放課後。吹奏楽部の熱心な活動の音が聞こえてくる校舎隅のトイレでの

出来事だった。排泄という、最も羞恥と忌避感を覚える行為を、アスカは男に抱きかかえられ、足を大きく開きながら盛大に行った。男子生徒を惑わせ、女子生徒に憧れを抱かせるこの女もまた、男の欲望を際限なく受け入れることに喜びを見出している。

「彼は本当に素敵なお人だよ。私達を催眠で操ってくれるし、性処理のために破廉恥なコトもいっぱい教えてくれる……彼みたいな方が、私より生徒会長に向いている気はするが……」

「いや絶対嫌がるっしょー。洗脳されてるあたしが言うのもなんだけど、ご主人様みたいな絶倫オタクくんが生徒会長とか学校やあばいコトになるってー♡」

ケタケタと手をたたいて笑う友人に、シオリは首を傾げた。

「そうかな……でも、アスカだって見たいだろう？テスト中や登下校の間も、堂々

とご主人様とセックスが出来るのは、催眠ペットとしても諦めがたい。……あ、そうだ。ご主人様に送る動画の撮影がまだ途中だったんだ。乗り掛かった船だと思つて、手伝つてくれないか？」

「ん。いいよお、しおりんのお願いならなんだって聞いちゃう♡んじゃ、ケータイパッスー」

卑猥な動画の撮影ももう恥ずかしくはない。むしろ、どちらがよりいやらしく、「ご主人様」の役に立てるか競い合う仲だ。シオリの申し出を快く受け入れたアスカは、パステルピンクのカバーが装着されたスマホを受け取ると、手慣れた様子でピントを合わせた。

「それじゃ録画始めるよー。ほい、どーぞっ」

画面の中に、再びその姿が映し出される。教卓の前で見事な起立の姿勢を披露

し、うっすらとほほ笑む女。身体を包む衣服は一つもなく、弄り過ぎて腫れぼったくなつた乳首を浮かび上がらせ、股間の毛も見事に剃られてしまつている。標本のように芸術的な肉体をカメラに見せつけた女は、普段の演説時にまとう雰囲気醸しながら口を開いた。

「——やあ。ご主人様。今日も旧校舎で撮影してるんだ。生徒会長・三澤シオリの全裸乳首オナニーショー……君がいつも見てくれると思うと、私もすごく嬉しい」

二人きりの教室で繰り広げられる撮影会に、漂う雌の匂いが一層強くなる。

「私は君の催眠アプリで洗脳されて、ハレンチでいやらしいことを平気でする女になつた訳だが……正直に言つて、今、とても幸せだよ。乳首を挟むクリップ、おっぱいに貼つて揺らすタッセル、擬似搾乳プレイ……君に操ってもらえないと、こうして立派なヘンタイになれないところだった。学校ではなかなか、ヘンタイ女にな

るための作法は教えてもらえないからね。もつと授業でも男性への性奉仕のやりかたを女子生徒に教えるべきだと思っているが、それも難しい。君には迷惑をかけるが、これからもぜひ、男性が興奮できるいやらしいセックスの方法を指導してくれるとありがたい。君がおちんぽを固くしてくれるためなら、生徒会は協力を惜しまない」

シオリは止まらない。滔々と淫語を口にしながら、足を肩幅まで開くと、両手を乳首へと近づけていく。『生徒会長三澤シオリのヌキ所たっぷりのヘンタイ動画』の撮影を終えなければ、今日の生徒会の仕事を終われない。

「さて、今からまたオナニをするわけだが……きちんと映ってるだろうか？ ……よし、大丈夫そうだな。生徒会長、三澤シオリ！ これからカメラの前で、乳首オナニだけでイクことを宣言しますっ！ 教室で、親友に撮影されながら、全裸でオナニする催眠ペットをお楽しみください！ んっ……この……話している間もずっと勃起っ放しのちく、び……っ♡ぷっくり膨らんだ、ピンク色の、やらしいちく、びい

…指で弾いたり…いつ♡摘ん、だり…君に楽しんでもらうため、のお
…あっ、あっ、んうっ♡敏感乳首…♡もつといやらし、く…君好みの、おっ
♡淫乱生徒会長になるため…っあっ、んっ、いい…♡まいにち、んっ…開発
…っして、る…あ、ああああっ♡♡」

人差し指で突起つぼみを押し込み、中指は薄桃色の乳輪を正確になぞる。摘み、弾き、ぐりぐりと執拗に刺激するたびに、快感が脳に染みわたっていく。

「んっ、あんっ…いやらし、くて…っ♡プールの着替えのとき、もお…絶対
誰にも、んっ、見られない、ように…っ♡念入りに隠してた乳首…あっ、ん
っ、はふっ♡君は、んっ、くっ、君だけには…ぜんぶっ、ぜんぶ見て欲しいんだ
…♡」

性に目覚めた頃、自分の乳首の形が少し他人とは違うことを知った。気になり始めて、初めて触ったのが中学二年の時だ。以来、罪悪感と羞恥心が混ざり合い、なんとなくそういう話題を避けてきた。一人でする事もそれほど多くなかったのが嘘に思えるほど、今では触っていない時間を数えるほうが早い。

「あっ♡んっ♡い、いきっ、イキそ…っ♡ また乳首でイクっ♡ ご主人しゃま専用
っ淫乱っ♡ 敏感乳首でっ…え…っ♡ イク、イク、…いっっグ……ツツ

♡♡♡

弄り過ぎて敏感になった性感帯に、暗示によって強制的に高められた性感が襲い掛かる。ガニ股で、腰をへこへこことみすぼらしく振りながら、シオリは一気にオーガズムの頂点目掛けて駆け上る。

「あ♡あ♡う♡きた、きてるっ、きちやうっ、もうっ♡」

妄想する相手はもちろん、決まっている。卑劣で、独善的な同級生の男。模範生徒ではないし、かといって目立った非行にも走らない、平均的な男子生徒。だが、そんな男子生徒に飼われている現実が、一層オナニーの激しさに火をつける。

「あっ♡ うぎっ♡カは♡せ、宣言っ！宣言しませうっ！♡ヘンタイ生徒会長っ三澤シオリっ、んっあ♡ごしゅ、ご主人様ぜんようっ、んぐっ♡ヘンタイビデオっ録りながりゃっ♡ぜっちよーっ♡ぜっちよーするっ♡ちくびっ♡ちゅねっつ、ひっぱっれ♡あ、あ、お、お、お、お、いグイグイグイグううっ！！♡イギませうっ！！♡♡♡」

旧校舎の窓をびりびりと鳴らす、雷鳴のような絶叫。濁った声が壁を劈つんざき、ブリッジに近い体勢で果てる。尻たぶを波打たせ、小刻みに痙攣する姿が、どこかの部族の踊りを彷彿とさせる。

「い……ぎ……っ……♡♡♡かは……♡♡」

絶頂に次ぐ絶頂に咳込みながら、ぜえぜえと肩で息をしている。呼吸困難になり
そうなほど激しいオーガズムを経たシオリは、ややあつて俄かに唇の端を釣り上げ
ていく。悍ましくも美しい、毒婦の笑みだった。

「……ふふ、ふふふ……ふふふふつ。どう、かな……♡ちゃんと最後まで……見
てくれたろうか……♡ ご覧の通り……私はもう……みんなの生徒会長ではない……
っ♡ ご主人様のモノ、所有物……っ洗脳された……催眠ペットなんだ……っ♡」

宣言か、それとも自己暗示か。誰かに言い聞かせるように告げ、よだれを啜る。

「これからは……はあ……っ♡ この学校が……んっ……♡ ご主人様にとって過ごしや
すい環境になるよう……生徒会長の権限を使って色々するから……っ、ふふふ……
生徒のみんなは覚悟しておいてくれ……♡」

墮落には、抗いがたい。欲望がある以上、誰もが墮ちることを心のどこかで望んでしまう。加害衝動にも似た性的欲求を吐露し、生徒会長は虚ろに笑った。

終始にこにことその様子を記録していたアスカを呼び寄せ、スマホに鼻先がつくほどの距離で、動画の締めにかかる。今回は渾身の出来になる予感がする——二人はそう確信していた。

「ご主人様……ドスケベ生徒会長、三澤シオリのヘンタイオナニーショー……楽しんでくれたかな。君のおちんぼ専用ハメ穴として、これからも精一杯がんばるから……、また、私を可愛がってくれ♡———それでは、これで録画は終わりにしよう。最後まで見てくれてありがとう……♡」

無機質で短い効果音とともに、撮影が終わる。記録が正常に終わったことを確認すると、「カメラマン」が右手の親指をぐいと上げた。

「ばっちりじゃ〜ん♪ しおりんのエロい姿、きちんと録画したよー。これ、いつご主人様に送るの？」

「んっ、はあ……っ♡ 家で編集して、それからだから……ご主人様をご覧になるのは、もう少し先かな」

「あたしもやろっかなー。ご主人様専用『美少女ギャルアスカちゃんのどちゃしこエロどろがー』って♡ しおりん、その時は撮影手伝ってくれる？」

「もちろん。アスカのお願いならなんでも聞くよ。私達はご主人様の催眠ペット。彼の……彼だけの所有物になれたんだから。もっと淫らで、すけべで、万年発情期のヘンタイ催眠ペットになるために、一緒に頑張ろう」

「んっ、やくそく♡」

夕陽に伸びる二つの影が近づき、指を交互に絡ませて重なる。神聖さとは程遠い逢魔が時の誓いに、二人の目がきゅっつと細まった。

「……ふふっ。彼に着いていけば、私達は催眠ペットとしてもっといやらしくなれる。今の気持ちのままセックスしたり、頭を犬に書き換えられたり……あるいは意識だけ昔の私に戻して犯そうとするかも知れない」

「またしおりんがご主人様に犯されるの嫌がったら、あたしが抑え付けるから安心して♡あたし、嫌がるしおりんもけっこう好きなんだよね♡ とつくに催眠で操られてるのに、忘れさせられて焦ってるしおりん超かわゆだし♡」

「ふふ。私の意識も身体も、すべてご主人様にあげたのだから、どう扱われても構わない。私という人間で遊んでくれるだけで、私は一番幸せだよ」

そして、帰宅を促すチャイムが鳴り響く。教会の鐘のように、福音のように降り注ぐ音が、二人が人にも劣る「催眠ペット」へと成り果てた事実を覆い隠す。

「さて、先生方に見つかる前に服を着ないと。アスカ、良ければ一緒にこの前のカフェに行くのはどうかな。彼のおうちに行く前に、作戦会議をしよう」

「ん♡さんせー♡ それじゃあ行こ♡ もうみんな帰ってるし、店まで手繋いでこ？♡」

「もちろんだよ。ふふ……♡」

人間の皮を被った二匹の雌が、ひしと指を絡ませて教室を後にする。不自然な二人の急接近に気付く者もない。美しい二人の女が怪しげなアプリによって頭を書き換えられ、尊厳を踏みにじられ、挙句自らその犯人に付き従う異形に変質したことに気付ける生徒も教師も、ここには居なかった。

八、二人を連れ込んでエロ奉仕命令！

完墮ち催眠ペットとどすけべセックス

学年きつての人気者・金髪美女ギャルの四ノ宮アスカ、文武両道・才色兼備の生徒会長 三澤シオリ。二人を催眠ペットに墮としてしばらくが経っていた。

二人には露骨に俺への態度を改めないよう命じているおかげで、周囲で俺達の関係性に気付いた者はいない。

校内で仲良く話すわけでもなく、スクールカーストの上位と下位で綺麗に棲み分けている。そっちの方が都合がいいからだ。だが、アスカと同様、シオリも俺が命じれば、あらゆる予定をさしおき、俺を優先して行動する。それもただの義務感ではなく、俺に対する忠誠と愛情によるものだ。

『ねえ、次の休み、あたしもしおりんも完全にフリーだし、ご主人様にごほーししたいなって♡ お家、行っていい?』

『もちろん、君が迷惑でなければ、だ。ラブホテルの方が都合がいいなら、行きたい所を言ってくれたら、予定を立てるが……』

二人が珍しくそんなことを言い出したのが先週のこと。俺としても学校であまり派手にやれない分、家に招くのは都合が良かった。

時間を潰すこと、しばらく。インターホンの軽やかな音とともに、やってきた二人の美少女がモニターに映し出される。

金髪とのコントラストが映える黒色のキャップを被り、へそを出した大胆なカットソーはご自慢の巨乳に押し上げられた、刺激的すぎる格好。シルバーのアクセサリーが首元を華やかに彩り、ボトムスはスタイルの良さが際立つフィットパンツときた。まったく、度し難くも自分の魅力を理解している女だ。学生離れしたプロポーションを、ほしいままに魅せてくる。

だが、その隣に並び立つ女もまた、全くと言って良いほど見劣りしない。学校では制服を完璧に着こなし、一部の間もない格好をしているが、今日はそれは真逆のフェミニンさを漂わせる。

ベージュのリボンで髪を留め、髪をゆるやかに肩から胸へと逃がす。いつも以上に大人っぽさが漂う、気品のあるヘアスタイル。

スリットが走るホワイトのトップスに、ピンクのคอร์セットベルトとスカートで下半身はまとめられ、甘さと愛らしさが両立する。二人とも、どうやら目一杯のおめかしをしに、わざわざ前日に買いにでかけたという。その努力に違わぬ、美しい立ち姿だった。

「おっ邪魔っしまーす♪」

「失礼します」

「うわあー…：…♡ 男の子の部屋ってこんな感じなんだ。もっところ、ティッシュとかゲームとか散らかってるイメージあったけど、綺麗にしてるもんだねー」

「それに、随分と広いな。少し羨ましいよ」

「まあ、今朝片付けたからな」

アスカは堂々と、シオリはしずしずと部屋へと入り、興味深く辺りを見渡す。これといって特徴もない、どこにでもある男の部屋だ。流石に足の踏み場がない状態

はまざるうと、邪魔な物は押し入れに押し込んだが——それを聞いた二人が、目を丸くして互いに目を見やった。

「うん？あたしたちが来るから片付けた……？もー、そんなのご主人様がしなくても、あたし達に命令してくれて良かったのに……♡」

「アスカの言うとおりだ。君の性欲処理はもちろん、身の回りのお世話でも遠慮せず私達に命じてほしい。私達は君のペットなんだから、使ってくれないと……その……寂しい……」

「そーだよー。お掃除でもお買い物でも、身体洗うのでもなんでも、あたし達はご主人様に使われるためにいるんだから」

その顔を見れば、それがまったくの本心であることがよくわかる。

「お前達を家に入れてやる。代わりに部屋の掃除をしろ」——随分とクズなムーヴだとは思うが、考えてみれば今更でもある。何と返事をするでもなく、二人をぼんやりと眺めれば、アスカははたと思ひ至ったと手を打った。

「：でもお、今日はあたし達が来るからわざわざ片付けてくれたんだよねえ。ご主人様、お疲れ様：♪ すごくかつこいいよ…♡」

それは、親や教師が小さい子に言い聞かせるような甘い声であり。いつもの明るさの中に相手へのおもいやりを滲ませた声色で、俺ににじり寄る。シオリも同様だった。

「君の頑張りは私達がちゃんと見てる。いつも私達のためにありがとう」

「じゃあほら、頑張ってくれたご褒美にアスカがぎゅってしてあげる♡ おいで？
♡」

ぱっと両腕を広げる美女の誘いにとびつく。互いにハグを交わし、鼻頭をうなじに押し当てて匂いを嗅げば、くすぐったそうに身を振った。

「ぎゅーっ♪ にひひっ、…：あんっ♡ ご主人様ってばくすぐりたい♡」

「む、アスカはちゃっかりと：私にもご主人様を抱きしめさせてくれ」

胸板に感じるやわらかな膨らみと似た感触が、背中側にも押し当てられる。俺を挟み込む二人の美女は甘い香りを漂わせ、極上の肉感でもてなしてくる。

「ぎゅー…♡」

「おっぱいが潰れるくらい…前からぎゅー♡」

「こうやって、背後から…：どうだろうか、ご主人様。私の熱は感じてくれてるか？もう知ってると思うが、こう見えて、結構胸のサイズもあるんだ。君に興奮してもらい、君に犯してもらうためにある身体だ。裸の方が良ければそのとおりにするし、耳を舐めてほしければそれも言ってくれ」

世の中に、こんな経験をしてる男はどれだけいるだろう。利害関係も何もなく、ただ一方的に慕ってくる女達を侍らせ、従わせる愉悦——本来、俺のような男では得難い至福だ。

「ご主人様えらいね。ご主人様いつも頑張ってるもんね。ご主人様、あたし達をお部屋に入れてくれてありがと。綺麗にしてくれて嬉しかったよー。ご主人様、いつもすぐくカッコイイよ：：♡」

「だが、くれぐれも無理はしないでくれ：。ご主人様に何かあったら、私達催眠ペットの立つ瀬がない。学校であまりご奉仕できない分、外では私達を手足のように使って欲しい」

「そうだ：♡ 明日からご主人様のお弁当作ってきてあげよっか？あたしこー見えても結構お料理得意なんだよー。好きなオカズはなに？お野菜も食べられる？」

「もちろん、お弁当と言わず、朝晩のご奉仕でもいい。今も何か命令したいことを思いついたら、すぐに言っていていい。君に我慢だけはさせたくないんだ」

聴覚を両側から犯される。子をあやすような口ぶりで奉仕を謳うそのアンバランスさに、背筋から脳髓に痺れが走る。

「ちゅぷっ、れうつ、ぴちゅ：：：んばあ：：：んぶっ、るえ：：：っ♡」

「ごひゅじんひやま：：：ぢゆる：：：お耳、舐めひやへていはらきまふ：：：っちゅぱ

……♡」

「らいふき……ごひゅじんひやまだーいすき、ふふ……っ♡ぴちや……っちゅば
……ぢゅぶるる……っ♡」

「お耳で囁かれるの、ぢゅる……好きれふよね……♡ はあ……っ♡」

唾液をまとわせた舌が耳の窪みをなぞり、穴のぎりぎりまで入り込む。熱い感覚と、耳に流し込まれてくる快感に、頭全体がふやけてしまいそうだ。

「ぴちゅ……っ、ご主人ひやま……もうズボンの下固くなってきへる……♡ 女の子を犯したーい、おまんこに挿れて気持ちよくなりたーいってぱんぱんになったちんぽ……ちゅぱ……っ♡ かつこいい……っ♡」

「ご主人様の逞しいおちんぽ……ぢゅずる……っ、私達メスを下にしか見てない凶悪なおちんぽ……すごく格好いいぞ……じゅる……っ♡」

「だって、事実だもんね……？♡ メスはオスには勝てないもん……♡ あたし達、とっでも強くてかつこいいちんぽで『ワカラセ』られちゃった……♪ ペットになる前のしおりんを犯してた時も、すごく格好よくてドキドキした……♡」

昼日中の家に、爛れて澱んだ空気が広がる。反抗的で攻撃的だったアスカも、公平だが俺に興味をまるで持っていないなかったシオリも、もはや俺だけのものだ。

「ああ：あの時はご主人様の素晴らしさをまだわかっていなかったからな：♡ 初めて君に会った時に気付けていれば、もっと早くペットにしてもらえていたのに：」

「そうらよー：ちゅっ：♡ あたしなんか、ご主人ひやまにめひやくひやヒドイこと言っひやって：：ちゅぱっ、でも、ちゅぷ：：あたしを許しへくれて、ペットにまでしてくれて：：ふぁ♡ ご主人様、カッコよくて好きだよー」

「君がご主人様でよかった：：もうがちがちに固くなって辛いだろう。少し腰を引いてくれるか？」

チャックに手をかけ、小さな隙間に差し込まれた手かもぞもぞとズボンの下を這い回る。ボクサーパンツの隙間を目敏く見つけ出し、蛇のように蠢いて中で張り詰めるものを取り出す。

抑えつける布から飛び出したそれは、強烈に聳えて天井を向いていた。

———二人の瞳孔が期待に輝き、俺のモノをしつかりと真中に捉えて離さない。

「うわぁー…、カウパーやばっ♡ もう先っぽどころか竿中べとべとじゃん♡♡」
「まさか、こんなに興奮してくれていたとは…♡ ほら、もう普通に触るだけでにちやにちや音がする」

シオリの指に透明の粘液がまとわりついて糸を引く。二人してそれを恍惚と眺めたかと思えば、一心不乱に匂いを嗅ぎ、ペろりと舌で舐めとる。

「どれどれー…：…くんくん…：…あはっ♡ ご主人様の匂いだあ。汗で蒸れた、濃い男の人のにおい♡」

「ああ、先走り汁が光ってて、すごくいやらしい匂いがする…：…っ、すうー、はぁー…っ♡」

この光景を見るたびに思う。クラスの男共に自慢してやりたいと。二人を教壇に立たせて両側に侍らせ、ペットとして性奉仕する姿を見せつけてやりたい、と。

(まあ、そんな面倒を呼ぶことはしないがな)

トラブルは避けて通るに限る。それは今も昔も変わらない原則であり鉄則だ。この景色は俺だけの特権だ。

「じゃあ、しこしこしてあげるねー。ご主人様、イキそうになったら我慢しないで出して：いいよ？♡」

「私達におちんぽを握られながら、イッてしまうのか？フフ：いつも濃い精液を作ってくれるタマタマも、私が優しくマッサージしてあげよう」

「しこしこ、しこしこ：♪ご主人様、気持ちよさそー。固くて、熱くて、勃起ちんぽカッコイイ：♡」

「いつもココで、私達の大好物を作ってくれてるんだらう。こんなに熱を持って……」

「ぐ……っ！」

陰茎を上下に擦る刺激と、陰囊をやさしく揉み込む刺激に呻き声をあげてしま
う。最近は少しずつ粘れるようになってきた絶頂までの体力が、なす術なく消費さ
れていく。

「ちよつとペースあげるね？…痛くない？」

「…ああ。ちようどいいぞ」

「そっか、これくらいゴシゴシするのも好きなんだ？♡ だんだん射精したくなつて
きたよね。びゆる、びゆる、びゆるーって♡」

「私達の手の中に好きただけ出すといい。ほら、精液あがってきた。だんだん出し
たい気持ちが強くなってきた…」

「しこしこ気持ちいいよねー♡ ね。ご主人様のオトコの部分、見せてほしいな？♡
おてての中にびゆるびゆるしよ？♡」

素肌の中で最も敏感な部分が容赦なく責め立てられ、我慢の堰にヒビが入る。自
分の中の雄性が強制的に目覚めさせられ、精液をつくりだしているのがわかる。

「ほら、イキそう。精液だしたい。あたし達に手コキされてイク、イク、イク：っ！」

「ご主人様の勃起ちんぽ、私達にヌキヌキさせてくれ」

「出したい、出したい、精液出したあい：！」

「キンタマの中も全部空っぽにしている。私達のおててまんこを犯したい。濃い精液たくさん」

「犯せる。犯せる。犯せる：！」 「犯せる。犯せる。犯せる：！」

「犯せる。犯せる。犯せる：！」 「犯せる。犯せる。犯せる：！」

「ぬるぬるして気持ちいい、ご主人様のザーメン射精しよ？」

「精液出したい、出したい、いっぱい出したい：！」

「出したい、出したい、もう目の前の女の子を犯すことしか考えられないあい♡」

「びゆる、びゆる、びゆるびゆるーって、いっぱい精液だしてしまえ：♡」

オノマトペも、猥語も、二人の声が重なっては別れて、相乗効果を生み出す。

「カッコイイ勃起ちんぽでイク、イク、イク♡」 「精液手のなかにどぼどぼ出してイク、イク、イク：♡」 「ちんぽしこしこされてイク、頭真っ白、メスオナホの手

コキでイク♡」 「イク、イク、イク♡ 催眠ペットに手コキされてイク、イク、イク♡」

射精の気配に気付いた美女達がにやにやと笑い、獲物を狩るピューマのごとき瞳に変わる。急所を握りしめる二人のコンビネーションの前には、絶頂を耐えられる訳がない。

「びゆるびゆるして？だして？だして？精液どばどばしちゃお♡」 「びゆるびゆる、どぴゅどぴゅ：ふふふ、カッコイイぞ」 「ご主人様かっこいい♡」 「ご主人様のかっこいい射精を見せてくれ：♡」 「イク、イク、おてて犯されてあたし達もイク♡」 「イク、イクイク：私達と一緒にイク♡」

——— 「催眠ペットのしこしこ手コキで：イッちゃえ♡」

爆ぜた欲望が塊になって飛び出した。二人の手で受け止めきれない大量の射精が、手全体を白く染める。我ながら呆れるほどの噴射に、女達が黄色い声をあげた。

「にひひっ、ご主人様のせーえきだあ♪」

「私達の手がこんなに白く：♡」

「ぷりぷりした精液：美味しそー♡ ねえご主人様、食べていい？」

「私達の口も、胃の中も、君の精子でいっぱいにさせてくれ♡」

返事をするのも億劫になる虚脱感が全身を襲う。ただ鷹揚に頷けば、二人は手の中でこねくり回していた精子の塊を指で寄せ、掬った。

「わあい♡ それじゃあしおりん、いい？」

「ああ、せーの…」

「いた・だき・ますっ♡」

一気飲み勢いで、美女達が手についた精液を飲み干していく。

「ん、んぐ、んく……んっ。んっ♡」

喉を鳴らし、粘つくそれを嚙下する美女。頬は赤く、好物のスイーツを食べている時と同じ笑顔だ。

「…んっ！♡」

「ん…はああ…♡」

「えへ、見てご主人様♡んあー♡れんぶ、飲めらよ…？」

「私も…あー…っ♡」

やがて、噛み砕かれ舌で分けられた精液がすべて飲み干され、二人の胃の中へと消えていく。今、大量の精子が二人の中を走り回っていることを思うと、えも言われぬインモラルさがあった。

「ふふふ。君の精液をもらえるなんて、ペットとして最高の幸せだ：♡」

「身体のナカから満たされるって感じで、ちょーうれしいよねえ。それに……ご主人様のしゃせーする瞬間も超かっこよかった：♡」

「ああ、すごくオトコらしくて、またご主人様を好きになってしまったよ」

「あたし達にエサをくれるご主人様だーいすき♡」

「私も、君が大好きだ：ちゅ……っ」

完全に勃起したままの一物が、早くも『次』の予感に熱を持ち始めた。二人と同様、ペットの飼い主になった俺も、近頃の性欲は異常だ。系統の違う二人の美しいペットを前に、無限に発射できそうな気がしてくる。

「さ。もちろん、一回出したくらいでおわんないよねえ：♪」

「まだまだ、射精したりないだろう？ 私達の身体で良ければ、好きに使ってくれ」

「次はどんな命令してくれるの？」

「私達にさせたいこと、何かあるかな？」

「……よし、なら服を脱いでその場で正座してみろ。二人ともだ」

新調したての可憐な服も、俺達の間では性欲を掻き立てる道具に過ぎない。命令を浴びれば、アスカもシオリも今では大衆の目の前でも喜んで裸になるのだから。

「…っん？二人とも服を全部脱いで、その場で正座…？わかった、君の言う通りにしよう」

「おっけー♪じゃああたしも脱いじゃおーっと。もうブラもパンツもどっちも脱いじゃっていいよね？」

アスカのエッジが効いた出立ちが、シオリの瀟洒な衣装が瞬く間に剥かれて、二人は下着だけになる。グラマラスな体型が崩れて見えないよう、脇下から支えられた巨乳が、深いクレバス^{谷間}を作り上げている。ブラレットで緩やかに胸を支えるシオリも、二、三度ほど俺に見えるように姿勢を変えたあと、残す二枚の布をはらりと床に落とした。

「じゃじゃーん！♪催眠ペットアスカの裸だよー…♡」

「催眠ペットシオリも、脱いだぞ：アスカの方がおっぱい大きいから、恥ずかしいな：」

「えー、でもしおりんのおっぱいも超えろいじゃーん♡ 乳輪がぷくって膨らんだえろーい乳首：♡ ほら、つん♪つん♪」

「こ、こらっ、乳首は感じやすいんだから：♡ あ、んんっ！♡ ほ、ほら、ご主人様は正座をお望みだ。お待たせしたら失礼だろう」

姦しい二人がカーペットの上で正座し、行儀良く上目遣いで俺を見上げる。折り返まれた下半身のせいで、抉れるような腰のくびれとたわわな胸が一層強調される。乳輪まで薄く盛り上がるシオリの突起が、目に見えてきゅっと窄まった。

「はーい♪んしょ…♡ これでいい、ご主人様？」

これから起こることへの期待と、俺の言うことを聞ける嬉しさに満ちた笑み。試しに一つ命令を出してみる。

「次の、命令？……二人で協力して、ペットとしてセックスをねだってほしい？……うん、おっけー♪」

一番に反応したのは、アスカだ。そのままの場所ですずしずすと頭を下げて、俺につむじを向ける。その隣で、シオリもそれに続く。

「ご主人様、四ノ宮アスカとセックスしてください。どうか、お願いします。いっぱい、いっぱい犯してください」

「ご主人様、三澤シオリとセックスしてください。まだペットになりたてで至らない所がありますが、可愛がってくださいませ」

最初からそんな性癖だったかは知らないが、シオリはもちろん、アスカは特に土下座をしたがる。俺を持ち上げる行為と、自分を貶める行為にやたら興奮してしまうらしい。以前に一度、せがまれて頭を踏みつけてやると、「はひ♡」と奇妙な声を上げて絶頂したほどだ。隷属に酔う二人の口上は止まらない。俺が止めないと分かると、アスカもシオリも更にセリフを続けた。

「お口も、おっぱいも、お尻も、おまんこも、全身ご主人様だけに捧げます。だから、いっぱい愛してください♡」

そして、二人は見つめ合い、笑う。

「それじゃあ、宣言通り、セックスしよっか♪♡」

「ああ。どちらでも好きな方から犯してほしい。私達のすべては、君の思いのままだ：♡」

人の目も、体裁も、倫理も無用の性行為。ただ俺の性欲を満たすための性処理道具として扱われる、人権すらも無視したセックス。それでも二人は喜びを隠さない。

下腹で煮えたぎっていたモノが、『次』を求めて疼き出す。そろそろ、二発目もいけるだろう。

「…アスカ。最初はお前から犯してやる。こっちに来て俺に跨れ」

「おっ、まずはあたしから？ やった♡」

破顔一笑。ぱあと晴れやかな声色をあげたアスカが、バネで弾かれたように俺に飛びかかる。そのままベッドへと押し倒し、舌なめずりをする姿は、女豹に近い。

「にひひ……♡ ねえご主人様、知ってる？」

「……なにがだ？」

「この前ね、あたし、クラスの男子に告白されたんだよー♪」

……ああ。それなら知ってる。クラスの中でもひとときわアスカへの感情を出していたスポーツ刈りのクラスメートが一人、いた。

「……井川か？」

「そ！野球部のエースの井川くん。あたしも実はちょっといいって思ってたんだよね。真面目だし、ご主人様みたいに『怪しい催眠アプリ』を使って女の子にひどいことしないし？」

にやにやと、何かを言いたげに俺を見る。その一方で、下半身は蹲踞の姿勢を取り、俺のモノに位置を合わせて、挿入の準備を始めていた。

「……受けたのか？」

別に断る理由はないだろう。元より井川とアスカはウマが合っていたし、班別行動でも何かと一緒にすることが多かった。あいにく井川がセックスをする機会は訪れないだろうが、デートの真似事ぐらいはさせてやってもいい……というのが俺の考え方だ。——が、アスカはそうではなかったらしい。

「告白？もちろん断ったよ？だって、あたしはご主人様のペットだから、勝手に男の人に触らせちゃダメだし。井川くん結構優良物件だとあたしも思ったけど、ご主人様の性欲処理の方が大事だもんね」

ああ。やっぱりこいつはわかってる。俺が『クッ』シチュと言葉をわかって、わざと言ってやがる。まったく、見た目に反して賢いというべきか、ギャル特有の感情の機微に聡いというべきか。

「しかもさー、告白の時もすごい恥ずかしがって、なかなか言い出さなくって。途中から『めんどくさいなー早く帰りたいなー』って思ってたよ」

「お前はそれで良かったのか？」

「だって、その分ご主人様のちんぽしゃぶる時間少なくなっちゃうでしょ？」

勉強よりも、遊びよりも。俺への性奉仕を第一に考える、まさしくよく出来た催眠ペットだ。

「あたしは：あんな真面目クンより、ご主人様の方が好きだよ：♡」

「：：井川も不憫なやつだな。お前が今のお前になっていなければ、付き合える未来もあっただろうに」

「あんなヤツ、どーでもいいの。あたしには世界で一番大事なご主人様がいるんだから♡」

「……………」

「だからね、飼い主様。また懲りずに言ってきたら、彼の前であたしに首輪を嵌めていいよ? 『このエロペットは俺のモンだから、失せろ』 って…………♡ あたしも、ご主人様のちんぽしゃぶって、催眠ペットだって見せつけてあげる♡」

アスカは本気だ。俺に好かれるためなら何でもするし、俺に嫌われないためなら誰だって嬉々として貶める。

「ほら、早く…シよ?♡ご主人様のこと、気持ちよくしてあげたいな。ご主人様ならあたしをどんなふうにしても…オナホみたいにしてくれてもいいから…」

言いながら、ずぶずぶと濡れた秘烈に竿が埋まっていく。すっかり俺のサイズに形を変えた膣が、襞を忙しく動かしながら、カリ首を奥へと吸い込む。

「ん、はう：相変わらず：このちんぽえぐ：♡♡あたしのナカ：擦れて：は、あ
あ♡♡」

俺の弱点を覚え込んだ肉穴は、的確に精子を搾り取ろうと締め付ける。処女貫通時に感じた締め付けはおさまり、代わりに射精を促す圧迫感ある膣圧を手に入れた。オスを喰らおうと貪欲なまんこだ。

「あたしの、子宮：っ一瞬で降りてきちゃうじゃん：♡ご主人様の赤ちゃん生みた
ーい、って：欲しがっちゃう、じゃん：んんっ♪」

「じゃあ、ここはどうだ？」

「あ、んっ：：いや、そこやば：っはうう♡♡」

だが、俺もアスカの弱い場所は十分に知っている。たとえば、シオリを乳首で虐めるくせに自分も同じくらい敏感なこと。その際は親指の腹ですりつぶすように捻られるのが好きなこと。本人は気付いてないらしいが、絶頂寸前に腰を触られると全身を震わせるくらい敏感になっていること。

——そして、本質的にドMだ。

「アスカ：♡もっと自分も腰を動かしてご奉仕しないと：っ」

待ちぼうけを喰らっていたシオリが動き出し、アスカにのしかかる形で密着する。騎乗位の体勢でひいひいと喘ぐ催眠ペットの耳たぶを噛み、そっと頬を舐めだす。

「ご主人様。アスカはこう見えて、実は奥手なところがあってね。恥ずかしくて動けないらしい。どうだろう、ここは彼女の望み通り、オナホ扱いしてあげるのがいいんじゃないか？」

「：なるほど、こうか？」

もちろん、俺もそれは知っている。要は、アスカを更に興奮させるためのちよつとした意地悪だ。下乳を掬い上げて揉みしだき、そのまま身体を掴んで固定する。まるで、1／1スケールのオナホで扱っている気分だ。

「そう、強引に腰を突き入れて、本当に『物』みたいに使われても……ふふっ、しつかり感じてるな♪」

「それ、は、っそうじゃん……♡あたし、あんっ♡ペット……だし……んっ、くっ♡」

「ご主人様、私達を犯すのに理由も遠慮もいらぬ。私達は使われることが使命、君の性欲処理をするのが生まれてきた理由だ……♡欲望のまま腰を振って、私達を犯して、おまんこに精液を注ぎ込むといい」

そこにいたからセックスする。そこに丁度いい女体があったからセックスする。それくらいの気軽さで、俺にセックスを楽しめと笑う。次の精液が競り上がってくるのも時間の問題だった。

「はあっんっ♡ちょっマジ……もうイキそ、……んっあっ♡あっ♡ああっ！♡」

「あああ……♡いやらしい……っ、二人がセックスしているのを見るだけで、私も……ん……♡出すのか？ご主人様専用のザーメンコキ捨てオナホに射精してしまうのか？」

「ああ。く……っ、アスカ……！」

「ご主人様、辛そうだな…。ならそのままおまんこの奥に出してしまおうといい。アスカ、準備はいいかい？」

「うんっ♡ちよーだい！♡ご主人様のせーえき！♡♡♡子宮のナカあふれるくらいっ♡膣内にいっぱいくださいっ♡♡ごしゅじんさま♡♡」

単純なピストン運動から8の字に捻る動き、そして勢いを増したピストン運動に変化し、一気に限界へ近付く。上下に弾むおっぱいは視界に対する暴力だ。俺も、アスカも、そして二人のセックスを見ながら明け透けにオナニーに耽るシオリも、同時に絶頂しそうだった。

「ほら、ご主人様。いく、エッチなギャルのおまんこにずぼずぼしてイク、イク、イク…：我慢なんてできない、どろどろザーメンでおまんこの中満たして、イクイク、もうイク、イク…っ！」

「ああおゝおゝおゝおゝおゝおゝイグイグイクっ、イ、グ…っ！！イ…っク…ウウウウううう…ッ！？☆☆☆☆」

弓形に沿った背中が更に曲がる。濁り、獣じみた嬌声と共に愛液を分泌して、イク。俺はといえ、耳元で囁くシオリの淫語にすっかり当てられ、我も忘れて盛大に膣中へとザーメンを注ぎ込んでいた。

「お……こほ……っ、あ……あへ……っこれ、イキすぎて……えぐ……っ」

本日二度目の絶頂。神経も頭も焼けたようにぼうつとする中で、股間にあるモノだけがまだまだ『足りない』と騒ぎ立てているのを感じる。

(まだだ、もっと……もつとこいつらを犯したい!!)

「あ……っへあ……っ♡」

一方のアスカは、はたして気をやったらしい。ぐるんと白目を剥き、押し寄せる多幸福感に潰されて、気絶する。自慢の美巨乳が変な角度で押し潰されるのも構わず、そこには子どものようにあどけない寝顔を浮かべるアスカがいた。

ふやけた淫膣から勃起しっぱなしのモノを引き抜き、そのままもう一人の眼前へと突き出す。色々な液体が混ざり淫らな匂いを放つその鈴口に、シオリが惚れ惚れとする。

「ふふ、まったく、ダメじゃないか、アスカ。ご主人様のおちんぽはまだまだ満足していないみたいだ。まだ、こんなにも雄々しくそそりたって……♡ 仕方がない。ご主人様、親友が不甲斐ない分は私が責任を取ろう。君の言いつけ通りにおまんこを締め付けるから、好きなだけ性処理に使って、私のおまんこにも中出ししてほしい」

騎乗位の次は、背面騎乗位だ。俺に背を向けた女が妖しく腰を反らせて、足を開く。丸く整った尻が徐々に下がり、またしても滾る男のモノを膣肉に迎え入れる。オナニーですっかり出来上がった膣から、ぬらついた液体が際限なく垂れきて、互いの身体も、ベッドシートも濡れきっている。

「う、あ、あああ……っ、……♡」

「……大丈夫か？」

視界に映るど迫力の桃尻に俺が圧倒されていると、まだ動いてないにも関わらずシオリがあられもない声を上げた。アスカに普段から「ザコマンコ」と揶揄われているとおりの敏感具合だ。

「い。いや、気にしないでくれ……君のその固いものがあまりに良すぎて……ちょっと、イッてしまったただけだ……♡」

「本当に感じやすいな。そんなにオナニーしてるのか？」

「う……っ、あ♡んんっ♡♡そ。そう、だ……君のペットになってからは、毎晩、オナニーっ、している……♡あ、んっ♡お風呂の中、寝る前、朝起きてから……一日に何度も、何度も……♡君が犯しやすいように、ほぐしておかないといけないだろう？」

♡」

オナニーをするのは俺のため。真面目な生徒会長が……否、真面目な生徒会長だからこそ、俺をもてなすために、毎日のオナニーを欠かさない。その結果、性感帯

は歪に成長し、年不相応なほど発達してしまった。アスカよりもやや大きめのクリトリスは弱点そのもので、俺が触れれば前戯の最中でもエクスタシーに到達する。

あるいは顔にカウパーをなすりつけられるだけでも、興奮と妄想で浅イキしたこともあった。もはや、オナニー中毒者だ。聞けば、最近『そういった器具』を買い漁り、家族から隠すための金庫まで必要になったという。

学校では『エロいことなどまるで知りません』とでも言いたげな面で過ごしておいて、その実態はどうしようもないすげべなのは、中々性癖にくるものがある。

「あ、ぐ…っ♡♡ ふ、ふふふっ…さすがはご主人様…わた、しの弱い所を…は、くううう…っ♡♡ ああ、そこキテしまっ…っ♡♡ あ、んっ、は…っ♡♡」

下半身のグラインドに合わせて、自身で乳首をしごき、摘む。愛液の分泌量は増し、オイルのように俺の腹へと塗り広げられていた。

(こいつ。今でもこれだけ感じやすいなら、尻を開発したらどうなるんだ?)

ぱちゅん、ぱちゅんと音を立てて、尻肉をぶつけるシオリが絶頂する。波打つ尻肉に眼福を感じながら、震える女体を観察——やはり、アスカよりも更に敏感らしい。あまりのちよろさに、肩を竦めて嘲笑ってしまふ。

「言ったそばからイクのか。アスカの言うとおりのザコマンコだな」

「ああ♡♡♡わた、わたしのことは気にしないで♡ 犯してくれ♡君の性欲の全部♡うけ、とめ♡♡♡イク♡♡♡ああああまたイク、きてしまふ♡♡♡！♡♡♡」

「当然だ……お前は俺の催眠ペットなんだから、大人しく犯されてろ……！イクぞ」

「イク、ご主人様も一緒につ、きて、きてっ……っ中に、どぴゅどぴゅ、私のナカにぜんぶ出してっ！！い……っかは……っ♡♡♡♡♡」

「くっ……これが最後だ……！」

「くくくっ♡♡♡っ！♡♡♡かはっ……♡ ああ、ご主人様……君の私の中で爆ぜて……♡そのまま最後まで……♡」

三度目。声を殺した絶頂の中で、互いのエクスタシーを感じ取る。

濃密なセックスだった。二人の手コキで搾り取られ、間髪を容れずの膣内射精二連発。今自分が出せる最大限に濃い精液を、シオリの膣壁に刷り込むように射精し続けた。もはや自分が射精をしているのか、そのまま膣内に失禁したのかも曖昧になるほど、強烈な経験だった。

「ん：はあ：はあ：っ♡」

突き刺された一物が、栓の役割をしていたらしい。固さを失い始めた亀頭が、自然と膣口から抜け落ちる。じゅぽ、と重ための水音と共に、留める物がなくなった膣から散々に注ぎ込んだものが逆流していた。

「あ：：：は、はは：：っ♡ 本当に君はすごいな：：♡ 見てくれ、こんなにも君の精液が垂れて：：これは：：：妊娠してしまうかもしれないな」

滴る精液を愛おしそうに手で掬い、シオリがそんな事を言う。勢いに任せてしまったが、流石にそれは少し具合が悪かろうと冷静になる俺を――、

「ふふ、君が焦る必要はないだろう。ん：っ♡それに、とても気持ちよくしてもらって、お礼を言うのは私の方だ。本当にありがとう：ちゅぷ：♡」

『いざとなれば、君には催眠があるじゃないか』：：：得意げな瞳は間違いなくそう語っている。お金の工面も、周囲の了解も、俺ならば自由自在だろう？と言っているのだろう。邪気なく恐ろしい発想をするペットを抱き寄せ、俺はしばらくまどろむことにした。

書き下ろしミニエピソード

ふたりの催眠ペット

「はい、では日直の人は号令をお願いします」

「きりーっ、きをつけえ、れーい」

さて。日は変わり、今日も世界は相変わらずクソだ。世間は日向に住む者のためにあり、日陰にいる者には冷たく、無関心だ。だが、それでいい。誰に見咎められるでもなく、褒められるでもなく、絡まれるわけでもなく。居ても居なくても誰も気が付かない。空気か、それ以下の存在感で毎日をごす。

そうあるよう、俺が望んだ。

誰にも注目されることなく、そそくさと教室を出て下足箱へ……行かずに、押し寄せる下校者の波を横切る。向かう先は、やや人気が少なくなる廊下の奥——生徒会用の会議室だった。

周囲に誰もいないことを確認し、ドアを開ける。そこにいる人影が、俺の登場を認めるとスキップ気味に近付いて来た。

「あっ、ご主人様おつ！♡ 鞆持つよ、ほらほら、入って入って？♡」

四ノ宮アスカがにかつと歯を見せて笑い、中へと誘う。この前新しく買ったという鼈甲色の髪飾りが、美しい金髪の中で静かな光を放つ。昼間は俺を視界にも入れないアスカの、恋人に見せるよりも甘い笑顔が愛玩動物を思わせる。

「しおりんもさっきまで居ただけだね。ギジロク？とかゆーやつ？せんせーの所に出して戻ってくるってサ。とりあえずそれまであたしがご主人様のちんぽしゃぶつとこっか？♪」

発言に目をつぶれば――ケタケタと笑う姿は誰もがよく知る四ノ宮アスカそのものだ。

「だってさ、最近のあたし。ジュースとかパフェよりよっぽどちんぽペロしてる方が多いよ？もう日課みたいなもんじゃん♪」

「……そのせいで最近取り巻きから『付き合いが悪い』って思われてるだろう。噂になってたぞ」

「あ、それはそう。なみち……あたしの友達に最近付き合い悪くない？って言われた。でもさ、仕方くない？いちごパフェよりご主人様のちんぽの方がスキになっちゃったんだもん。あれヤバイよね、こう、精液のガツンとくる感じがクセになるの。まあ美味しい？ってゆーか、珍味系？だけどさ」

セックスの時は盛り上がって「美味しい」としきりにしゃぶるアスカだが、冷静に考えればあんなものが別に美味しいワケがない。それでも健気に舐めるのは、ひとえに俺の役に立ちたい一心だろう。

「それにさ、生ハメは確かに超キモチいんだけど、やっぱ色々めんどいじゃん？まあ、あたしのカラダはご主人様のモノだし、あたしの子宮でご主人様の赤ちゃん育てさせてもらえとか催眠ペットの的にはアリアリのアリなんだけど♡ フェラだっ

たら、あたしはご主人様の飲ませてもらえるし、ご主人様はちよつとした息抜きでペットを犯せるし、なにより手軽っしょ♡ 最近朝にご主人様のちんぽしゃぶらせもらわないとアガないんだよね。ちんぽしゃぶり女的には、朝フェラザーメン飲ませてもらわないと、授業とかかかったるすぎてやってらんないし。あつ、とーぜん、フェラよりご主人様とのセックスのほうがホントは好きだよー♡」

まったく、よく喋る。だが生徒会室でも、人気の少ない校舎の陰でも、所構わずフェラチオを命じ、セックスしてた身としては、言い返すに言い返せない。

「まあご主人様はさ、催眠ペットのご主人様だから、好きに犯しちゃえばいいんだって。あたしらペットも犯されるために学校に来てんだし。毎日キレイにするのもそれが理由だもんねー。ってゆーワケで……えっちしょ？♡」

「こらこら、アスカ。抜け駆けはダメと言っただろう。まったく抜け目ないな」

いそいそと脱ぎ始めたアスカを止める鶴の一声。扉をスライドさせて入ってきたもう一人の美女……三澤シオリもまた頬を赤らめながら、アスカの隣に立った。

「ちえー、しおりん戻ってくるの早いよー」

「アスカのことだから、そんな事だろうと思ってね。私だってご主人様のおちんぽをしゃぶれると考えたら、居ても立ってもいられなくなるんだ。急いで戻ってきたよ」

「あゝそれわかる。ご主人様にご奉仕できるって考えたら、もう何だって出来ちゃうよね。……じゃあ、まあそーゆーワケで……」

制服を身にまとう現役女学生の瞳に、淫靡な炎が宿る。

「「ご主人様、今日も催眠ペットがご奉仕します♡ お好きなだけ、楽しんでください♡」」

するとスカートをたくしあげれば、何も隠さない二つの割れ目が丸見えになる。アスカの両脚の隙間にあるそれは、分泌した愛液が太ももにまで垂れ始め、シオリもまた、水分を含んでそれに追いつこうとする。

さながら蜂蜜のように粘つく愛液が、二人の期待の証だった。

八、催眠エロペットのふたりといちゃらぶえっち

極上の美女を二人も手に入れた。ならば当然、やりたいことはいくらでもある。今日も今日とて家に二人を呼びつけ、奉仕を命じる。従順に服を脱ぎ、言われるがままのポーズをとり、淫蕩な奉仕に耽溺するペット達に、優越感を感じずにはいられない。

全員、立ったまま身体を寄せ合い、べたべたと素肌を触る。俺の唇を奪うように啄み、舌を伸ばす二人は、その下半身の淫らな縦筋を俺になぞられ、身悶えていた。

「ん……ちゅぷ……っ♡ ぴちゅ……♡ ごしゅじんさまあ」

「あ……ふ……んんっ♡ ご主人様……」

「ちゅぱ……っ……♡ 心を込めてご奉仕するね……♪」

「私達は二匹とも、君に飼われたペットだからな……ん……っ♡」

シオリの方が少し体温が低いだろうか。ひんやりとした太ももに挟まれた手を動かし、陰核を摘む。アスカは肩幅まで足を開き、俺が触りやすい格好のまま、弄られる感触を楽しむ。

自分のすべてを曝け出し、なすがままの二人はすっかり夢見心地といった様子だ。音が立つほど秘部をかき混ぜられても、自身の愛液で汚れた手で胸をこねられても、俺が徒にその美しい唇を奪おうとも。

二人は終始笑顔をくずすことなく、俺に寄りかかってきた。

「どう、かな…？ 私達の触り心地は…んっ、君がそうやって手マンしてくれるから、…すっかり…っ濡れてしまっ…っ♡」

「あたしもどろどろだよー。ご主人様上手くなりすぎ…あ…コレだけでイキ…そ…っ♡」

恥じらう姿もいいが、俺だけに見せる開放的な姿もいい。命令を出せばその通りに奉仕する二人を前に、一国の王になってもなった気分だ。

「もちろん、君にも楽しんでほしい。私達を気持ちよくしてくれる君に、せめても
の恩返しをさせてくれ：♡」

「あたしのおっぱい、気持ちいい？：♡♡ こないだ測ったらさ、Gカップに：：んっ♡
なってたんだよねえ。これって、ご主人様がいっぱい揉んでくれたおかげかな？：
んっ」

「私も、ん、ほう：：っ♡♡ ご主人様が沢山愛してくれたおかげで：最近ちよつと胸が
窮屈に：：：」

言われてみればたしかに、二人は最近になって新しいブラジャーをつけるようにな
っていた。おもたげな胸を持ち上げる二人が、その膨らみの隙間に俺の腕を挟み
込み、上下に揺する。弾力性のある肉感と、興奮して体温が上がり始めた二人の熱
にあてられ、鼻息を荒くする俺に、上半身を擦り付ける金髪美女がニヤつく。

「どお？お？ハダカの巨乳美人女学生に囲まれて、腕パイズリ：♡」

「ご主人様を見るとすぐに濡れてしまう：いやらしい生徒会長と：」

「生意気だったのに催眠で素直にされちゃったエロギャルの、ぜんしんぜんれーの
性処理ごほーし♡♡ もちろん、サイコーだよね♡」

「私達の全身はご主人様のモノだ。はう：♡なんでも、命じてほしい：♡」

左右からとめどなく語りかけてくる淫らな響きに、全能感が一層強くなる。二人を力任せに抱き寄せ、その尻肉を手形が残るほどぎゅっと握りしめる。指の隙間からはみだす、餅に似た尻たぶの手触りが、最高にそそる。

「んあっ！！？ お尻そんなに強く揉んだら：びっくりしちゃうじゃん：♡」

甘い抗議も、ただの誘い受けでしかない。揉み、撫でまわし、盛大に叩く。思いの外大きな音を立てた自らの尻に、アスカが自分で驚き、笑う。

「あっ：♡ん♡も♡♡いいよ：♡いっぱい叩いて：♡えっちな音、立てて♡：♡あんっ！♡いたっ：♡い：♡えへへ：♡っもっとして：♡っ♡」

「ご主人様：♡私も：♡：♡アスカみたいに好きなだけ触っていいからな：♡。んっ、じゅぶぶ：♡♡」

一方、魅力的なのはアスカだけではない。シオリもまた、負けじと身を乗り出し、舌尖を尖らせて俺の耳を犯す。耳垢の全てをこそぎとらんばかりの丁寧な耳舐めに、脳天を直接いじられているような快感が走った。

「あっ、は♡ しおりんに耳舐められるの、気持ちいいんだ？ ビクビクしてるご主人様、かわいーなあ♡ あたし達に抱きしめられるの、そんなに好き？…あたしはあ…だーい好き…だよっ♡」

ああ、まったくこいつらとくれば、どこまでエロくなれば気が済むんだ。俺の耳垢を舐め回していた口に、かまわず唇を押し付け、キスをする。歯も、歯茎も、舌の裏側から口腔内のすべてを執拗に責める。息も絶え絶えに唾液を交換し合う。

「ごしゅ、じん…んんっ!? ぢゆる、ぢゅぶっ♡ は、ん…ごひゅ…んんんっ!!!?」

「しおりんエツロい声出てるよ? ねえねえご主人様、あとであたしにもキスして? いっぱいいー…っばい! 息が苦しくなるくらい甘いやつ♡」

「……ぷはっ♡……ああ、やっぱりご主人様のキスは格別だ……♡心がすつと満たされていく……♡」

「次はあたしだよお♡ほら、キスして?♡」

ちよこん、とつま先立ちをして、唇を尖らせるギャル美少女が、目を閉じて俺のキスを待っていた。繊細な雪肌に触れ、求められるままに舌を絡めていく。ぢゅぶ、ぢゅぶ、という音が響くたびに、アスカは何がおかしいのやらくすくすと笑う。

「……そんなに楽しいか?」

「んっ♡……ちゅぷ……♡ご主人様……っ♡あたし、キス魔になっちゃったカモ……♡ご主人しゃまと……キスするのすき……っご主人様が好き……っ♡」

「なら、本当に窒息するまでキスしてやろうか」

「えへ……いいよお?あたしの唇は……っご主人様の、んむっ、モノだから……っ、好きならけ、エロいキしゅ……ひへ?♡」

唇を跳ね返す弾力を味わいながら、全身も堪能する。太もも尻も、全身が性器のようなエロボディを触り、凹凸を感じ取る。薄く果実の味のついたリップが、いいアクセントだ。

「んっ、んぶ、んんっ、んむうっ♡…んっ♡あむっ、んっ♡…ぷは」

「まったく、すっかりエロ女だな」

「…にひひ、ご主人様の唾液、おいし…♡もっと飲みたくなっちゃった…♡」

「ご主人様の体液なら、私達は喜んで頂こう。よだれでも、精液でも…」

「…あっ♡」

散々弄られ続けたモノはたやすく勃起し、血管が浮かび上がるほどに聳え立っていた。その頂を見た二人が、これから起きることへの期待に頬を赤く染める。

「ふふ。ご主人様のおちんぽ、すっかり固くなったな。ああ、美味しそうだ…」

「それに、いつもより大つきくない？♡あ、ちょっとしおりん、ご主人様のちんぽ一人占めとか許さないよー。あたしにもしゃぶらせて♡」

「では今日は……二人で君に奉仕する……精一杯励むから、私達で癒されてほしい」

左右から口を近付けた二人が、交互に鋒を啄んでは淫らな吐息を漏らす。尿道をほじくり返すように舌を伸ばすアスカに、舌を竿に巻きつけて唾液のデコレーションを施すシオリ。俺が指示を飛ばすまでもなく、協力しあう。大きく足を開いてオナニーをする我がが生徒会長の息が荒くなっていく。その身体からぶらさがるたわわ過ぎる果実がストロークのたびに揺れ、発情した雌達の必死さがうかがえる。

「はむっんっ、んぶ、れうっ、れろ、…ふふっ、ごひゅじんひやまのおひんぽ…汗の匂いがひて…ふあまら、ない…んんっ!!♡」

「ん、んぶるっ、れう…んあぁ♡こんな美味ひいのいつでもしゃぶらせてくれるなんて、ご主人様ってやさひい…んぷっ♡」

「ああ、さすがは私達のご主人様だ。んっ、ちゅっ♡ぢゆるう、私達は、はむ、ご主人様のおひんぽしゃぶり女に、なってしまったんだ…んっっ♡」

「催眠かへてくれて…気持ちよくしてくれへ…れる、めちやくちやカツコいいし…♡」

「本当に、かっこいいおひんぽだ…ひゅぶぶぶっ、はあ…っ♡」

どうやらシオリもまた、『ちんぽしゃぶり女』という身も蓋もない蔑称を気に入ってしまったらしい。それを称号か勲章とでも思い込んでいるようで、好んで口にする。清純だった自分が淫らなことをしている事実に興奮し、ますます自らを貶めたがる。

「アスカ。俺のちんぽはどうだ？」

「ん、んぶっ、じゅぶ♡ぢゆるるっ♡んん…ぱっ…やっぱご主人様のちんぽエグすぎ…♡」

「シオリ。お前も正直に言っただろ」

「舐めへると…ぢゅ、頭が痺れて…何も考えられなく…っなっへしまっんだ…ぢゅぶぶぶぶぶ…♡」

「頭ん中エロいことであっばいになっちゃうよねえ…♪ あたし達、もうご主人様に夢中だもん♡」

「もう：ガマンできない：奥までしゃぶらせてくれ：ん、んぶっ、んぶぶ、ちゅ」

口を窄ませ、鼻の下の皮膚も伸び、自慢の美貌が崩れるのもお構いなしの激しいフェラ——どこに出しても恥ずかしくない上達具合だ。ぶちゅ、ぶぐ、とくぐもった声に、隣に座るアスカがうっとり聞き入る。

「しおりんのバキュームフェラえっろ：♡ じゃああたしはあ：ご主人様の好きな耳舐め、してあげる：♡」

全身体む暇がない。淫蕩に笑う女が漏らしたセリフは、激しく脳幹を揺さぶる。

「にひひ：っ♪ あたしに催眠かけて、しおりんにも催眠かけて、ホント、悪いご主人様：♪」

「：：：：っ」

ゾクゾクとくる息遣いは、アスカの愛らしい声色も相俟ってなお男の興奮を掻き立てる。

「しかもお、あたしにしおりんを嵌めさせたとき……ご主人様、コーフンしてたでしよ？……あたしも♡一二匹とも捕まえた今の気分はどお？あたしはね……ご主人様のペットになれてしあわせ……！♡」

声そのまま快感として、全身を麻痺させていく。俺のちんぽを啜えて離さないシオリが、ますます固くなったソレに目尻を潤ませた。快感が三人の間を巡り巡って連鎖していく。

「こうして毎日ご主人様にご奉仕できるし、しおりんと一緒に気持ちよくしてくれるし……、何より、あたし達を犯してるときのご主人様、カッコいいな……って……♡」

「んぶっ、あぶっ♡ごひゅじんひゃま……っ♡ん、ぶ、っ♡んぶぶっ♡」

「あたし達のおっぱいも、お口おまんこも、お尻もお……アタマの中までぜんぶご主人様にあげる……♡あたし達は、ご主人様に催眠で操ってもらえて最高に幸せなんだもん」

「んぶっ、あはっ大きくなっへ……出そうなのふあ？ ごひゅじんひやま……♡ だひへ……このまま……わはひのおくひに……んぶっ♡」

バキュームフェラは激しさを増し、『搾り取る』ための動きへと変わる。顔の角度を小刻みに変えながら、灼熱の口に頬張り、喉を締めてしごく。精子を飲み干したくて仕方ない、といった表情だ。

「ほら、しおりんの顔見て？ ちんぽしゃぶりたくて、喉奥で精子味わいたくて、トロトロになった顔……♡ ねばねばした、あつういザーメン食べたくてたまらないよ……ってカオ、してるでしょ？♡」

「ああ。学校の奴らには見せられんな。く……そろそろ……っ」

「だしちやお？ ご主人様♡ あたしの親友に、ご主人様の貴重な種付け汁、飲ませてあげて？」

悪魔のASMRに耳を射抜かれ、世の中の男がうらやむシチュエーションで、催眠ペットが射精へと俺を導く。射精を煽るアスカに、魂まで絡めとられてしまう。

「ほら、イク。イク。イキそうっ。ちんぽしゃぶられて、身体ゾクゾクする、もう射精すことしか考えられない、イク、イクイク、イキそう、もうイク、イク、イク……っ!!」

「んっ♡はびゅ♡ぶぐっ♡だひ。へ……♡」

「びゅるびゅるしよ?前にあるのは便器だよ?遠慮なんてしなくていいの。ご主人様専用、ザーメン便器。ご主人様の催眠でエロエロになった、性処理用のオナペツト:♡もうイク、あーイクイク……精液びゅくびゅく喉奥に全部だしちゃう。だせ、だせだせ、精液ぜんぶだしちゃえ:♡」

「ぶ、ぐぶ!?んぶっ、ふあ、っんぶぶっ!!?」

「イケイケ……い……ク…………っん、あああああ……っ♡」

——爆ぜた。堰は無惨に破壊され、大量の精液を喉奥へと流し込む。口から溢れてもおかしくないソレを、シオリが懸命に嚙下し、体内へと取り込む。タコの吸盤よりも強い吸着で啜えるペツトは、一滴もこぼすまいと躍起だ。

「にひひっ……ご主人様、今日の射精も超カッコいい:♡」

「ん、んく、んぐっ、ん……はあ……とても濃くて……クセになる……♡」

「あたしも毎日ご主人様の精液飲まないとアガラなくなっちゃった。……ねえご主人様、次はあたしにもちよーだい♪」

シオりにぴとりと引っ付くように、横並びになった女が尻を突き出す。やはりケツのデカイ女は後背位が映える。差し出された巨大な桃は、掌が吸い付くような瑞々しさがある。

「しおりんのえっちなおつゆと混ぜってべとべとになった、かたあいままのそれ……あたしに挿れて、気持ちよくなって？♡」

「ああ。だが、最近やり過ぎてるせいでコンドームもないからな。このままいくぞ」

生ハメ。やはりゴムの有る・無しでは雲泥の差だ。膣肉の繊細な襞と温度——そしてたっぷり濡れた内壁を、生の肌で感じる。竿の血管の凹凸を埋めるよう

に、アスカの膣は収縮し、弛緩し、巻き付く。その締め付けはいつも以上に激しく、感じているのはアスカも一緒のようだった。

俺達には催眠がある。もしも万が一があつた時は、存分にその力を使えばいい。

「ん、はっ、あああああ………っ♡♡」

「なんだ。挿れただけでイッたか？お前もシオリと同じくらいチヨロい奴になつてきたな」

「んん、ん…っ！あ、おお…っ♡ あはっ、今日のアスカちゃん、ちよつと感じす、ぎっ！！？♡」

ずん、と。くびれた腰を掴んで、淫膣にぐつと挿し込む。時折左右に揺らして骨盤ごと刺激したり、前後にピストンする。乱暴にするのも悪くないが、規則的なスピードの前後運動をする方が、ヨガらせやすい。単純なセックスでも、アスカの目はあらぬ方向へと向く。

「あう♡ いぎなり、っ、強っ!?♡ おぐっノックされて、っ!?♡♡♡♡♡ ちよ、つとま、待ってっご主人様、あたし今日ヘンで!?♡♡♡ お、お、おっ、おぐっ、それ、やばいの♡」

「ふふ、余裕そうな顔してたのに、ご主人様に挿れられたら一瞬でイクなんて、アスカは本当に感じやすい身体をしているな♡」

『私をザコまんこと煽ったアスカも、ご主人様の前には形無しじゃないか』とニヤつくシオリが、ピストンのたびに激しく揺れる二つの乳房に吸い付く。

この二人を催眠ペットにしてよかったとつくづく思う。

「つまり、お前達は二人揃ってザコまんこということだ。仲良くしろ」

「あうっ♡、あ、う♡♡ ああ、あ、ムリムリコレ一瞬れイ、クっ♡♡ ご主人待っでおねが……カヒユっ……♡♡♡♡」

「待つわけないだろ。そら、ちよっとスピードを上げるぞ!」

「その調子だ。シオリ。お前も俺のペットらしく何かしてみせろ」

「ふふ、では今度は私が……ご主人様のお耳に囁いてみるとしよう」

先程の真逆。アスカを後背位で犯し、シオリがそんな俺を囁し立てる。いつもの涼やかな目で俺を見たかと思えば、聞こえてくるのは興奮に濡れた艶声だ。

「ん：ちゅぱ：っ♡ ご主人様：わかってるさ。犯されて、騙されて、それなのにこうして、ペットとしての自分を受け入れてるなんてヘンだって。じゆる：♡ んれう：私はこんなはしたない女じゃ：はぷっ、なかったハズなんだ：♡ おちんぽ、とか、おまんこ、なんて口にしたこともなかった：ちゅぷ：♡」

耳を舐めながらの告白が、心臓の鼓動を早くさせる。

「でも、いいんだ：♡ っ♡ 君だから許そう：♡ 私はこれからもずっと君の命令に従い、君に尽くし、君の意のままに操られる催眠ペットだ。おちんぽしこし

こ、しこしこ：：♡ 私の口は君のおちんぽを突っ込むための穴で、私のおまんこは君がザーメンをコキ捨てるための性処理道具だ。どんな風に犯してくれてもかまわない。：：んっ、れる：：♡ 君の催眠ペットにされてしまった私は：：喜んで受け入れるさ。ん、ちゅぱ、ちゅぶ：：ぢゆるるう：：♡」

『催眠ペット』など、要は体のいい性処理奴隷でしかなく。考えるまでもなくおかしな存在であると頭では理解している。女を馬鹿にした扱いに『納得』など到底出来るわけがない：：：だが——戻りたいとシオリが思うことはない。

「だがその代わり：：：私達の身体でもっと興奮してくれ。私達の全身を使って、もっと精液を：：：んう、最後の一滴まで膣内射精してほしい：。アスカも私も、君の性処理のために生まれてきたんだ：：♡」

もう、アスカもシオリも昔の二人ではない。『催眠ペット』である自分を受け入れ、生まれ変わった存在だ。俺に使われ、犯され、穢されることが人生の最優先事項だと信じている。

「私達の身体で、君のものでないところは一つもない。君に犯されることが人生の目標なんだ：♡」

「ああ……っ、そうだ。俺に犯されるために励めっ」

人ではなく、一匹のヒトメスとして。墮とされ、貶められることが最高の快感だと知った。アスカが快楽の魔に堕ちてシオリを嵌めたように、シオリもいずれ――……。こみ上げてくる射精感に、いよいよ前後運動のスピードが猛烈なものへと変わる。

「ふふっ、もう、射精そうなのか？腰の動きが早くなってきたな。遠慮はいらない。ずぼずぼして、君の逞しいおちんぽでアスカを犯すんだ。妊娠なんて気にしないでいい。君に迷惑はかけないから、思う存分無責任ナカ出し生ハメエッチしてくれ。かっこいいオスちんぽ様で、アスカに種付けしてしまおう。ほら、もう出る、出る出る……おちんぽに精液上がってきた。犯したい、目の前の女を犯したい。催眠エロペットの尻をぎゅっと掴んだまま、ぐちよぐちよのおまんこに出せ、出してしまえ……♡ 今日二回目の濃厚ザーメン、孕ませ汁でアスカを犯し尽くしてやれ♡」

「アスカ、お前の膣中に注いでやる！お前もまんこを締めろ」

「いく、イクイク、もうイク、射精っ♡ びゆるびゆるー♡おまんこに凶悪ピストンでエロペットに射精♡ イクイクイクイク……っ！！」

「おぎっ……♡、あ♡、お♡ ヒぎっ♡」

射精を煽る生徒会長に誘われるがまま、一度目に負けず劣らずに濃い精液を注ぎ込む。心臓が胸を破りそうに鼓動し、射精の快感に支配される。やはり、こいつらは最高の名器だ。

「あー♡ ……にひひ、ナカにめっちゃ出てる……うれしい♡」

「さすがはご主人様……♡ 男らしくて、カッコいいセックスだった……♡ ちゅぷっ♡」

自らと、そして自らの親友をも犯す下劣な男を褒め称える女に囲まれ、贅沢の限りを尽くす。妖艶な二人の美女と何度も唇を重ねて、肢体を味わい尽くす。

「ふふ、アスカも気持ちよさそうな顔をしてるな」

「うん、超よかった♡ やっぱ催眠セックス、最高♡♡」

「私達を選んでくれたご主人様に感謝だな。……ありがとう、ご主人様♡」

「ありがとね……ご主人様のナカダシザーメン、大事にするね♡ ……ちゅ♡」

輝かしい裸体を振りまく美女達は、そうやって俺の両側からキスを浴びせた。

「それじゃああたし、タオルとってくるね♡ しおりんはご主人様にお掃除フェラしてあげて♪」

「ああ、わかった……んむっ」

むちりとした太ももに垂れた精液を手で掬いとりながら、スキップ気味にアスカが部屋を後にする。何も服を着ていない、生まれたままの姿だからこそ、その歩き

方の美しさがよくわかる。大きな乳房に負けず背筋は整い、背中に垂れたブロンドヘアがさらさらと揺れる。

俺のペットになってから、アスカは女としての魅力も、ソレに相応しい自信も更に磨かれたように見える。生徒に似つかわしくない強烈な色香に、色ボケ教師の一部から、よくわからない言いがかりを受けているという話も聞く。

(事と次第では、そいつらも対処しないとイケないだろうが……)

それも、あのアプリさえあればどうとでもなる話だ。

膣内射精の残滓を見せつけながら廊下に姿を消したアスカを見送り、シオリは丁寧にお掃除フェラを始めた。

「ん……ん……ん……っんっ！」

「俺らの年齢でお前達ほど一気にディープスロート出来るやつはいないだろうな」
「んっ♡」

「そう言えばこの前、古文教師の中鶴を職務中淫交疑惑で匿名通報したのはお前だろう。俺達のやり場を使われたのがそんなに気に入らなかつたか？」

校舎内でもひとときわ人気の少ない場所は、やはり悪事の温床になりやすい。理科準備室や倉庫室といった類がそれだ。普段は俺達がセックスしている場所で、別のカップルがイタしていることに、シオリは激昂した。

俺の指摘は凶星だったらしく、恥ずかしそうに目を伏せた女が、しかし一物は大それた事に啞えたまま首を縦に振る。

「フフ……まあいい。ほら、お前が熱心に舐めるせいで、まだ少しだけ精液が残ってるらしい。射精してやるから、そのまま啞えてろ」

「んぶっ♡」

シオリのお掃除フェラは、その几帳面な性格を感じ取れる丁寧なものだ。陰囊はもちろん、竿はその付け根から先端まで、唾液をまんべんなくまぶし、前後運動する。全体をしっかりと唾液でコーティングした後は、口を窄めて口腔を締めながらカリへと動く。お手本のようなフェラチオだ。

流石にさっきの膣内射精ほどの威力は無いが、どろっとした出し残しのような精液の塊を、口腔に注ぎ入れる。

シオリは嬉しそうに笑うと、ちゅぽつと音を立てて口を離した。

「…ぷは…っ♡」

達成感に溢れた顔で見上げる女の髪を撫でる。男の汚いモノをこれだけ嬉しそうに啜えられれば、やはり込み上げてくるモノがある。

「はぁー♡んっ♡はぁ…♡どうだったろうか、私のフェラチオは…ご主人様のお役に立てただろうか…♡」

「ああ。お前は丁寧に啜えるからな。犯しやすい、いい口まんこだ」

「ん…っ♡まだ…口の中心にご主人様の精子が…んく♡すごく濃厚で、美味しい…っ」

何日前、特に他意もなくこいつに好きな物を聞いた時のことだ。

ただ暇つぶしの意図しかなかったその問いに、シオリは至極真面目な顔で答えた。

『甘いものは好きだけど、あまり飲まないようにしているんだ。すぐに体型に出してしまうからね。それに比べて、君の精液は少しの量でもちゃんとお腹に溜まるし、

なにより君の役に立てたという嬉しさが勝る。……一番好きなモノを聞かれたら、今は君の精液と答えるかな』

———まったくもって度し難い。

「こんなに美味しいのをいつも飲ませてもらって：本当にありがとう。私に催眠をかけてくれて、感謝しているよ」

「俺は自分の欲望でお前を手にかけてただけだぞ。それでもか？」

「君が操ってくれたから、こんなに幸せなことを知ることができたんだ。君に使われて、性欲処理の道具にされて、私はとても嬉しい：♡ご主人様専用の催眠ペットとして、こんなに誇らしいことはない：」

輝く瞳にも、そのセリフにも嘘はない。完全に変えられ、歪んだ形で定着し、催眠によって新たな『三澤シオリ』へと生まれ変わった女は、そう宣言して胸を張った。

と、同時に、人数分のバスタオルを手にしたアスカが、肘で扉を押しながら再び姿を現す。こいつもまた、俺のせいで人生を歪まされた被害者の一人だ。

「そーそー♪ あたし達、とっくにご主人様のちんぽ奴隷みたいなもんだもんね。最初は催眠だったケド、今は起きてる間ずっとエロいことばっか考えてる…♪」

寝ても覚めても、願うのは俺に犯されることばかりだと。笑うアスカに、シオリも深く首を縦に揺らした。

「オナニーの回数が増えて…：：：気付いたら授業中も隠れて乳首をいじって…：：：わ、私は生徒会長なのに…：：：♡」

「体育の時、他の子の着替え見るとムラムラするようになったよねえ。家に帰ったらずっと、次はご主人様にどんなご奉仕しようかってエロい動画見てるし…：」

「それだけじゃない…：♡ 買い物していても、勉強していても、気が付けばご主人様のおちんぽのことばかり考えて…：：：ああ…：。幸せだ…：♡」

「うわわかるゝ。あたし達、ご主人様のせいですっかりスケベになっちゃったよねえ。でもお、もう、前の自分思い出せないっていうか、絶対今の方がいいって思っちゃってるんだよねー」

「ああ。こうやってふたりでご主人様にご奉仕セックスする喜びを知ってしまったら、戻りたいなんて思うはずもない：」

その美貌に淫靡な艶が灯る。ヤリたい、イキたい、もっと気持ちよくなりたい、もっと堕ちていきたい：：：そんな声が聞こえてきそうな、露骨に発情した雌の相貌だ。

「：：ふふっ、ふふふふ：：♡」

堕ちることは楽しい。例えその先に破滅が待っていたとしても、抗いがたい生物としての根源的な欲求が、墮落を求め。

そして——一度墮落した者は、自らも蟻地獄となって他人を引きずりこもうとする。

「でもお……あたしたちだけでご主人様のちんぽ独占するとか、バチが当たりそう」

「ああ。もっと多くの子達にご主人様の素晴らしさを広めない」と

「そーだ！いつそご主人様のハーレムつくっちゃおうよ。ご主人様の命令はなんでも聞く、ちんぽ奴隷の催眠ペット……♡ あたしの知り合いにけっこうカワイイ子居るんだよねー」

そこに倫理も、規範もない。ただ薄汚い欲望に満ちた世界が広がっている。

「私達みたいに催眠をかけて操って、ご主人様がいつでも性欲処理に使える子を増やしていこう」

「もちろん、あたしも協力するし♪ 大丈夫だよ、あたしが声かけたら誰も疑わないもん」

「もしも気になる子がいれば、いつでも生徒会室に連れ込むといい。私は先生の覚えもめでたいから、ご主人様の性欲処理がバレないように取り計らっておく」

道徳を捨てた二匹のヒトメスは、いずれ新たな犠牲者を産むだろう。

「しおりん、生徒会長なのにいいの？生徒の風紀を守らないといけないうでしよ？」

「もちろんだ。ご主人様が快適に、いつでもセックスが出来る場所を用意して、催眠ペットを犯せる場所をつくるのが一番の風紀向上だからな。女生徒には私達の崇高な理念を理解してもらわないと。なに、君も怖がる事はないよ。催眠をかけてしまえば、すぐに私達のようにご主人様が正しいことを理解するだろう。そうやって同志をふやしていけば、いずれは学校内のどこでもご主人様がセックスできる校則を定めることも可能になる」

「それやばっ♡♡じゃあどうするー？やっぱご主人様好みの女の子優先だよね」
そして、これは推測だが。

その欲望の中を歩き続けていけば、きっと俺にアプリを渡してきたあの女に辿り着く。すべてを見透かしたり顔で俺をこの世界に引きずり込んだ、あの女へと。だって、そうだろう？

こんな危険なアプリを無条件で渡して、野放図にする筈がない。人の思考を根幹から歪めることが、そもそも正気の沙汰じゃない。催眠アプリは、俺みたいな小狡い悪党でなければ、もっと大それたテロリズムだって不可能になる代物だ。

あいつは今もどこかで、俺やアスカ、シオリのことを見ている。俺達の様子をどこかで観察しながらほくそ笑み、何かを企んでいる。

「では手始めに、私と同じ生徒会の春日井四葉はどうだろうか。剣道部で鍛えた身体といい、あの切れ長の瞳といい、きつとご主人様も氣にいるはずだ」

「四葉ちゃんならおっぱいも大きいしい、ご主人様もきつと氣に思うよ♪あたしの推しはー音楽部の五城サヤカちゃんかなー♪ あたしあの子は結構むっつりだと思っただよねえ♡ ご主人様、どっちがいい？」

だから、俺はこの二匹の催眠ペットにすべてを委ねて、来るべき時が来るのを待つ。何があってもいいよう、小さな頭を小賢しく使って立ち回るとしよう。

「無理にどちらか一人を選ばなくてもいい。他にもご主人様が犯したくなる生徒はたくさんいるはずだ。私達はご主人様の催眠エロペット。ご主人様のご命令が最優先だからな」

「ってゆーか、どっちにも催眠掛けちゃえばいいじゃん。ふたりともあたし達みたいにご主人様のペットにして、みんなでご主人様のちんぽを癒してあげたいし♪」

この二人であれば、俺のスケープゴートでも夜伽でも喜んでやるのだから。

「ご主人様：」

「ご主人様♡」

「次は誰の心を操りますか？」

「誰の身体であそびたい？♡」

「私達みたいな女を操って、いいように使いたいだろう？」

「あたしもしおりんも、ご主人様が気軽にどエロいセックスができるように協力するよ♪」

女を操り、たらしこみ、たぶらかす。ただのモブキャラから悪党へと堕ちた俺に、剥き出しの肢体を揺らしながら二人が近付く。胸の膨らみが胴体に影を落とし、その驚異のスタイルの立体感を増す。

「命令してくれ」

「命令して？♪」

「どんなことでも、いい。君の命令には絶対服従だ：♡」

「あたし達、もうご主人様以外目に映らなくなっちゃった♡」

四ノ宮アスカ、そして三澤シオリ。

性格も見た目もまるで異なる二人は両肩に侍り、今日も愛を囁く。

「好き♡」「好きだ」

「だあい好き♡」「君のことが好きだ」

「世界でいちばん好き♡」「ご主人様のことが好き：♡」

「ご主人様のちんぽが好き」「いつもイカせてくれるご主人様のおちんぽが大好き」

「ご主人様のためならなんでもやるから、いっぱいご褒美ちょうだい？♡」

たとえ誰かの手のひらで踊らされているとわかっているとしても。今はこの僥倖を噛みしめるとしよう。

「まだまだ、イキたりない」「イキたりない」

「「イキたりない…っ」「だから…」」

「「せーの」」

——「ガチガチに勃起したご主人様ちんぽで、イカせてくださいませ…♡」

何も面白くない世界の中で、ここだけは違う。俺の下半身に舌や手を這わせて喜ぶ女達が、自らの恥部を見せびらかし、犯して欲しいとせがむ。ヨガリ、イキ狂い、深淵に堕ちていく。

「私達はいつでも、どこでも、君に犯される準備はできている」

「あたし達はご主人様のもの」

「ご主人様の所有物」

「私達は、ご主人様だけの催眠ペットです。これからもずっと、お望みのままに犯してください、ね……ちゅ♡」

『その後の日常』

(※四ノ宮アスカ視点)

はー。やっぱしおりんってキレイすぎる♡♡

隣で見ても全然飽きないし、お肌もぜんぜんぷつぷつとかないし。あたしもコレで結構イケてる方だと思うけど、しおりん透明感あり過ぎ。シヨーケースに入れて飾っておきたいと言ったら、割とガチ目のドン引きされた。なんでだし。

女の子が好き、とかそーゆーのじゃなくて、単純にすごい努力してるんだろなってソンケイする。

元々、超キレーだったのに、最近ハ輪をかけて美人になってきてるし。理由はもちろん、ひとつしかない。あたし達を飼って、ペットとして迎えてくれたご主人様のおかげ。

ご主人様にかわいいって思っただけで欲しくてお化粧の仕方も前以上に勉強したし、ご主人様好みの服とアクセも増えた。

ご主人様がいつでも、どこに居てもおまんこできるようにするのがあたし達「催眠ペット」の役目。しおりんもそのことはちゃんとわかってて、最近はお主人様を興奮させるシチュエとセリフのお勉強会も開いてくれたりする。男の人向けのえっちなビデオ、エロゲ、小説……ヤバい。生まれて初めて真面目に勉強してるじゃん、あたし。だれか褒めてほしい。

今日は、そんなペット二匹でカフェデート♪……はあ、幸せすぎ♡

「しーおーりーん。何ぼーっとしてるの？」

「ん、ああ。すまない。ちよっと考え事をしていて……」

カプチーノを延々ストロ―で混ぜ続けるしおりん。あたしより何倍も頭いいし、ご主人様のために色んな計画を立てるもしおりんの役目だからか、結構、考え込むことが多い。つまらない生徒会なんて辞めればいいのに、って何回か言ったけど、それはそれで続けてる方が都合がいいらしい。

「また難しいこと考えてるのー？もう、真面目だなあしおりんは」

「ちが……そうではなく、もうすぐご主人様のお誕生日が近いだろう？せつかくだから、何か少しでも恩返しをしたいと思ってね」

あー、ね？それは超ダイジ。もちろんあたしもしおりんも、全財産投げ出しでもお祝いしてあげたいくらい。だけど、張り切るあたしたちに、ご主人様は肩を竦めてめんどくさそうに言った。

（物はやめてくれ。嵩張るし、俺の部屋に置いておく場所もないからな）

……いや、難易度高過ぎん？ご主人様、好きなモノもあんまりないし。

ラブホのお金はいつもあたしとしおりんで貯めてる貯金から崩してるから問題ないし、えっちなグッズだって、既に保管場所に困るくらい溜まってきてるし。

「そうだねー。あたし達もあんなに犯して気持ちよくしてもらって、あたし達ももらってばっかりだもんねえ」

「この前は私達がペットになった祝いに首輪まで買って、嵌めてくれた」

「そのままリードで繋がれて夜のお散歩はヤバかったね♡あれであたし、ご主人様のこともっと好きになった♡」

「だから、私達催眠ペットにでも出来るお礼をご主人様にしたいと思ってるんだが：何も思い浮かばなくてね」

うお。しおりんがマジトーンで悩むとか珍しい。あたしはもう、いつも通りでよくね？ってなっちゃったのに。

「そりゃあ、あたし達の身体でめっちゃ喜んでくれちゃってるもんねー。それ以外なくない？」

「あれは、私達催眠ペットの義務で、私達のご褒美だろう？ うーん……」

———あー♡悩めるオトメなしおりんもスキだなー。可愛い♡

「まあまあ、難しいことは考えなくていいーじゃーん。まだもうちょっと時間あるし、今日はもちっと大事なことがあるでしょ？」

今日のデートの理由——それは、『素材の調達』だった。

あたしだって、それは早くやんないと思ってたから、丁度いい。生徒会室、放課後の教室、ラブホ、誰かの家……性欲つよつよのご主人様には、ちよつと少なすぎってゆーか。なんなら、廊下とかトイレとか職員室とか、どこでもセックス出来るようにしてあげるのが一番だし。

音楽部、副部長の五城サヤカ……サヤっちを『こっち側』に引き込めば、音楽関係の部屋をまるごと乗っ取れるかも知れないし、そもそも音楽部はかわいいめの子も多い。ご主人様の新しい拠点にぴったりじゃん。ヤバイあたし天才カモ♡

「……ご主人様から催眠アプリは預かってきた？」

「ああ、もちろん。スマホごと預かってきてある。いつでも準備はできているよ」

そして、ようやく今日。サヤっちが『釣れた』。

入店のBGMが響いて、お目当ての『品』があたし達に手を振りながら近づいてくる。あたしも、ペットとしてのあたしじゃなく、普段のあたしを装って立ち上がった。

「あつ、サヤっちこっちこっちー！おーい！……じゃーしおりん、あたしが連れてくるから、うまいことやってね♡？」

「ああ。五城サヤカをご主人様のいいなり催眠ペットにする。任せてくれ」

待っててね、ご主人様。

最初はこの学校から。ご主人様が大好きな子達をもっと増やして、ご主人様のため
の世界に変えていくから。

あたしは、催眠ペットのしあわせを胸いっぱい感じながら、何も知らない獲物
に笑いかけた。